文藝と繪畫·研究

精神分析

★第6卷·第2號★昭和13年3月·4月★

原作者·大內青圃氏

一九三七年度·フロイド賞牌

東京精神分析學研究所出版部

る。なほ附錄として、運・鈍・根の分析考が加へられてゐるが何れも興味津々たる中に許多の教訓を含んで居る。

×

序論は、殆ど純學說で、多少心理や哲學の素養の無い人には分り悪からう。又、精神分析に共鳴せぬ學者からは異論もあらう。が、之を熟讀すれば、その主義學說の如何に拘らず、何人も首肯するに違ひ無い、極めて穩健妥當な教訓道德が說いてある。筆者は曾て、序論第二を丁酉倫理會に於いて著者から直接に聽き、當時質問もし、意見も述べたことであるが、その時から著者の說は突然聽けば奇矯のやうであるが、その根柢には堅實な妥當性のある事を認めてゐたが、今この著書全體を讀んでます〳〵その感を深くした。

×

從來の道學先生の說く、所謂形式的、因襲的道德を厭惡してゐた青年達も、この書を讀まば、必ず喜んでこの說を受納れるであらう。此の點より見て、筆者は本書を國民教育又は中等教育を受けて、將さに世に立たんとする青年男女に推薦すると共に、是等青年を指導する世の父兄教育者、その他一般指導者の參考に、必讀の書として推薦したい。

東京日日新聞・大阪每日新聞

昭和十二年三月二十日所載

德富蘇峰

大槻憲二君の本著は、月並離れのしたる點が、先づ取柄であらうと思ふ。記者は心理學者でもなければ、所謂る精神分析なるものに就ても、何等の知識も持たない。されば本書の根柢を作す理論的方面は、他の評者に讓り其の實際的方面には、假道學先生の架空的純道德的說法よりも、却て青年立身者に取りては、即時實踐す可き、意味ある教訓を見出す。

假令へば、

西洋の諺「に正直は最上の政策」と云ふのがありますが……馬鹿正直は、厄介なものですから、尻尾を出さない限りで、時々は嘘もつくが、それは他人を陷れるやうな陰險な方途に用ゐない嘘で、大體に於て自他を公平に利して行かうと云ふ如き生活態度の人を、私は誠實のある人と云つてよからうと思ひます。

とある一節の如きは。所謂る佛者は方便と云ひ、兵家は調略と云ふ類にて、著者の心持は能く判るが、然も單純なる眞正直の讀者に取りては、或は其の本旨を誤解し、

飛んでもない間違ひを來すの虞なしとしない。

斯る問題を取扱ふには、硬くすれば硬きに失し、柔くすれば柔に過ぐるものだ。福澤翁の楠公權助論の如きも、六十餘年後の今日尙ほ作者の眞意を誤解するものがある。故に予は著者の爲めに老婆心ながら一言する。

然も讀んで、

結局、誠意のある人とは、相手の立場や、利害をも考へることが出來。さうしてその立場や利害に卽して、こちらの行動を定め、かくて相手に滿足を與へるが如き、さ　云ふ人であると云ふことが出來ると思ひます。だから誠意とは要するに心理學的に云へば、自分を他人に同一化することの出來る能力であります。

との一節に至れば、雲を排して山を見るが如く、著者の眞意は自から分明だ。要するに著者の立身道は、常識立身道だ。

×

なほ本書中には、その實例として、信長、秀吉、家康を擧げ、新井白石や河村瑞軒を擧げ、加藤淸正や小西行長を擧げ、石田三成、伊達政宗等を擧げ。其の例證の中に、著者の論評がある。中にも明智光秀論の如きは、心理學的解剖の俎上に載せ來りて、頗る月並ならぬ意見を並べてゐる。

讀賣新聞・昭和十二年五月六日所載

JOAK講演課長　多田不二

本書は、その題名からして誰もがすぐ所謂名士の成功美談か、心得おくべし式の立身虎の卷であらうと思ふであらう。だが、これとそれとは實際上あまりに緣遠い。こゝではまづ一度、他力本願的な、そんなあまい夢を微塵に打ち壞してゐる。そして總てを裸にひん剝き、ありのまゝの姿を街頭にさらけ出してゐるのだ。凡そこの種の目的を持つた書物で、これほど大膽に、しかも無殘に、人心の內部を解剖したものはないかも知れない。偶像をすつかり地上に引き下し粉々にうち碎いてその內臟を我々に見物させてゐる、道德も、良心も……。

この本は讀者自身の心の分析と對手の心の分析をも述べ、そこに立身出世のキーポイントを摑めと訓へてゐるのだ。

患者自身自ら局所を切開し、病根を處理せよと說く著者の態度は聊か無理な宣告を下す醫者のやうであるが、それは心の分裂を如何にして整へ、如何にしてより良き心の運用をなすべきかを自覺させることに目的を持つが故である。本書がこの種の他の本と特色を異にするとこ

ろは、此處にある。敎へ諭す代りに讀者に反省を强ひて居る。即ち反省の仕方とその活用を戰國武將の幾多の實例によつて說いてゐる。また河村瑞軒の生き方によつて說いて甚だ有益である。

要するに本書は從來の社會通念と非常にかけ隔つた多くの考へ方を藏してゐる。私は社會乃至人間に對する頗る興味ある、且つ實際的な觀察の仕方を此本から敎へられた。

本書の五大特色

一、舊道德を打破して科學的新道德を樹立せること

二、凡人もまた强者として生き得るとの明朗なる福音を述べたること。

三、光秀、秀吉、家康、政宗、その他戰國武將達を心分析俎上に載せ、その心理を抉剔して讀物としても極めて面白きこと。

四、立身主義と成功主義との一致點と離反點とを明かにせること。

五、心理エネルギーの經濟政策を確立すべき方法を示せること。

目次概要

文藝と繪畫・內容目次

『精神分析』第六巻・第二號

隔月刊行誌
定價五十錢
送料共

半年　一圓五十錢
一年　三圓
送料共

昭和十三年一月二月　夢と象徴　第六卷第一號

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

精神分析學界懇話會（**前列向つて右より**）諸岡　存、丸井清泰、杉田直樹、鈴木雄平、小峰茂三郎、富田義介、（**中列**）懸田克躬、木村廉吉、小山良修、宮田齊、大槻憲二、古澤平作、（**後列**）岩倉具榮、高橋　鉄、長崎文治、北山　隆、大槻岐美、速記者。（彙報欄參照）

（上）小山良修氏作『針金』
（下）大内青坡氏作『ヴィナス脱殼』（アプフウブ欄參照）

『精神分析』第六巻 第二號 巻頭言

★彼自身の謎を解くスフィンクス

米國の哲學者エマースンは、人間はスフィンクスの如きもので、彼自身スフィンクスでありながら而も自分の謎を自分で解かずば已まないものだと喝破してゐるが、至言である。文藝美術は地靈としての人間スフィンクスが自ら吐き出し生み出した謎である。卽ちその限りに於いてこのスフィンクスは藝術家である。然るにその謎を我々はまた飽くまでも解き明かさなければ已まない正反對の要求を持つ。その限りに於いてスフィンクスはまた科學者である。この科學者にとつては藝術と症狀とは同じ意義と價値とを持つ。藝術家と科學者とは人間スフィンクスの二つの面である。この二つの面は相互に密接に聯關してゐる。一面あつて他面なき人間は考へられない。科學面なき藝術家はナンセンスである。藝術面なき科學者は淺薄なる論理遊戯者である。世人は屢々一方に立つて他を輕視し、輕視することに依つて自分の高さと深さとを證明し得たりと信じ（願望し）てゐる。おゝ何たる頭の惡さぞや。

精神分析學はこの謎を解くための實に驚くべき貴重なる鍵を發見した。この鍵に依つて今までに解かれた謎の數々は數へ切れない。而も傳説に於いてスフィンクスの謎を解いたエディポスが現實に於いて人間の謎を解くための最も大きな鍵の一つとなつてゐると云ふことは、嗚呼、實に何たる不思議なる偶然的必然であらうか！

繪畫及び文藝に於ける超現實性

大槻憲二

一、超現實性と無意識

私は所謂シュルレアリズム（超現實主義）に就いては、あまり多くを知らない。併しこれが實質的には精神分析學の感化の下に、文學史的にはダダイズムの嗣子として、繪畫史的にはキウビズムや未來派の遺産として、十數年前フランス又びスペインに於いて擡頭した藝術運動であり、西歐の詩壇及び畫壇を動かしたのみでなくわが國にもその餘波を及ぼし、二科會及び獨立美術協會などにその第一波を擧げ、只今では全國に十數派の團體を生み出してゐると云ふこと位のことは世間の人々と共に私も亦、承知してゐる。併し只今では精神分析學から絶縁してコムミュニズムと握手しようとするやうな傾向のあると云ふことを仄かに聞き及んでゐる。併しこの派の代表者の主張が如何なる内容を有するにもせよ、私の理解し得た限りでは、繪畫のみならず一般の藝術に於いて超現實性が永久不動のものであると云ふことだけは信じて疑はざるところである。超現實主義は必ずしも今日に始まつたものではなく、それは實に人類と共に古く、藝術と共に永遠であると云ふことが出來る。

所謂超現實主義の超現實とは如何なる意味のものであらうか。わが國に於けるこの派の代表的評論家の一人なる瀧口修造氏は『超現實と現代文化』（『新造型』昭和十一年一月號）の中で次のやうに論じてゐる。

「私は現在の超現實主義を考へる場合、藝術表現の形式化として明晰にすることよりは、超現實性の文化的な認識、いひかへれば超現實性の要素的奪回が現在の問題として、もつとも急迫したものだと考へるのである。たとへば藝術

の一隅に發生しつゝある表現の超現實主義的要素と現實主義的要素との矛盾の解決は、超現實性の無言の退却によつて果されるとは信じられない。超現實主義は過渡期的な色彩に過ぎぬといふ見解は、單に藝術運動としての表面にしか視野を持ち得ない思想的狹隘性に原因してゐる。超現實性の現實性への反抗對立が特殊な個性的狀態にあること、單に心的な要素として分散してゐる所に最初の文化的な問題が見出されることを注意しなければならない。それは云ふまでもなく現代が個性の、自意識の特異なエポックであることに起因してゐる。そして集團性との矛盾が時と共に複雜化し深刻化することをも意味する。また不幸にして個人性がもつとも怠惰であるのも現代であることを意味するのである。このやうな混亂した意識生活の中で、現實を定義し超現實を定義することは、もつとも困難であると同時に、もつとも重大な文化的な問題を提出するであらう。」云々と。

右は藝術評論家的な語彙を以て表現せられてあるが、これを心理學的な語彙を以て表現し直すならば、意識と無意識との對立葛藤、本能と現實社會との相尅矛盾の現代に於いて熾烈なる所以を明かにし、現代に於いて本能(無意識)をしてその本然の要求を充足せしめるに如何なる方途を擇ぶべきかと云ふことが最も重大な問題であると云ふことになるのであらう。更にも一つ精神分析學的語彙に換言するならば・現代社會に於ける快樂原則と現實原則との妥協を如何にして講ずべきかと云ふことになるのであらう。

快樂原則(生の本能)と現實原則(死の本能)との對立關係は實に永遠の問題であつて、この二者は文藝繪畫思想上に於いて、誠に種々雜多な觀念となつて披瀝せられて來たのである。古典主義と浪漫主義、寫實主義と唯美主義などの言葉は種々特殊な內容を含んでゐるにもせよ、畢竟するに心理學上快樂原則と現實原則との對立を意味するものに外ならないのである。私はかつて現實原則の代りに必然原則又は必要原則の名稱を以てすることの妥當なることを主張したことがある。現實は必然(必要)の世界である。無意識は快樂の世界である。併しこれ等二者は決して無緣のものではなく、快樂なき現實は無意味であり、快樂あつて現實なきは夢想である。人類は久しくこれ等二者を相闘はしめて來た。併し分析學はこれ等二者の闘ふべきでなく提携妥協すべきものであることを敎へ、且つその方法を示

唆して來たのである。その意味に於いて分析學は最も文化的な新學問であるが、この學問の眞意義を未だ十分に理解してゐる自稱文化人のあまりに少いことを我々は痛嘆する。さきに引用した瀧口氏の文の中にも「超現實性の現實性への反抗對立」と云ふ言葉があるが、もし現在のシュルレアリズムがこのやうな「反抗對立」を主張するものであつたならば、我々分析學徒の意向とはいささか違ひ、我等分析學徒は決して現實に屈伏することを主張するものではない。現實改變への意慾は不斷に抱いてはゐるが、我等に常にその改變の可能の限度と我等自身の現在の力量限度とを考慮することを忘れないだけである。シュルレアリズムがコムミュニズムに傾きつゝあるらしいことは、この「反抗對立」のための「反抗對立」に好都合なためであるのでなかつたならば甚だ幸である。我等はコムミュニズムの思想に何らかの眞理を認めないものでないが、さう云ふ思想が一朝にして實現せられ得る、或は實現せられねばならないと考へることは、快樂原則が現實原則に螳螂の斧を振ふものだと云ひたいのである。現代のシュルレアリズムの繪畫にもこのやうな「反抗對立」があつてそれがこの派の畫人等をして必要以上に奇嬌にさせてゐるのではないであらうか。我等はその主張に多大の同感を持ちつゝその仕事に多少の疑念なき能はざる所以である。我等はシュルレアリスト達が畫壇の因襲と惡弊とに對して反抗的であることは大いに結構であると思つてゐるが、傳統と自然と現實とに對して反抗的であつたならば永久に救はれないであらうと云ふことを述べておきたい。これ等二種の反抗は屢々混同せられ易い。何となれば、共に無意識に根差してゐるから……。

それ故に我等は「超現實性」と云ふ如き言葉は一つの反語的な表現であるとさへ信じてゐるのだ。正しくは、それは別種の現實性に過ぎない。我等の享受し感覺するさまざまの快樂、これほど生々しい現實が何處にあらうか。我等を背後から壓倒せんばかりの强力な本能、これほど否定し難き現實が何處にあらう。所謂現實、所謂外界、所謂社會はみな我等の内的現實を實施すべき手段又は材料に過ぎないではないか。我等の内的現實の無意味化せられるところに、外的現實に何の存在理由があらう。この意味に於いて我等はシュルレアリズムへの完全な同情者であると敢て明言しておきたい。

G・ウェルカア氏は『近代造型藝術』（瀧口修造氏譯、みづゑ昭和十二年九月號）の中で次のやうに云つてゐるのは、やはり、超現實主義の本質として右に私が述べて來たところを一層確めるものゝやうに思はれる。

「超現實主義は吾々の內的生活と外的生活との間の障壁を控除する。それは夢を現實で現實を夢で穿通し、心的なものと物理的なもの、意識的なものと、無意識なものと個人性と共同性とを衝突せしめ、融合せしめるのである」と。さうして更にアンドレ・ブルトンが『超現實主義宣言』の中で述べてゐるところを引用して右の文に附加してゐる。曰く「外觀上かくも相反する二つの狀態、卽ち夢と現實とが、未來に於いて絕對的な現實、云はゞ超現實に於いて解決せられることを、私は信ずるものである。」と。

右の引用の文意は私の理解を裏書きする部分を持つと共に、なほ私をして疑はしめる部分をも含んでゐる。卽ち、例へば「絕對的な現實、云はゞ超現實」と云ふ如き言葉である。こゝに於ける超現實はさきに引用した瀧口氏使用の場合とは內容が違つてゐる。「絕對的な現實」とはどう云ふ現實なのであらうか。現實は常に變化する。昨日の現實は今日の現實ではない。數十年前の現實にとつては飛行機や無線電信、電話等は超現實であつたが、今日ではこれは現實ではあるが、必ずしも絕對的な現實ではないであらう。現實には絕對的なもの「相對を超越したもの」などはあり得ないであらう。絕對はたゞ觀念としてのみ存在するやうに我々は考へてゐる。もしそのやうな「絕對的な超現實」に於いて夢と現實との「相反する二つ」が「解決せられることを」超現實主義が信仰してゐるものとすれば、我等の思想とは剩離するものである。我々は「相反する二つ」が實はそれほど相反したものではなく、實は妥協の餘地あるものであり、また現に常に妥協してゐるものであり、妥協してゐればこそ我々の生活はとにかく行はれてゐるのだと信じてゐる。我々は前にも述べたやうに、傳統や現實の殘骸、排泄物に反抗することはよいが、傳統や現實それ自身に反抗してはならない。それは提携すべきものであり妥協すべき相手であると信じてゐる。その意味に於いて我等と所謂超現實主義者やコムミュニスト達とは意見を異にする。我等と彼等とは窮極に於いて一致するかも知れない。併し、我等は窮極の事は窮極の事として考へ、只今は常に目前現實の問題を考へると云ふ方針を擇ぶものである。

二、所謂超現實主義の檢討

シュルレアリズムの文献に就いては、私は完全な知識を持たないが、邦文献としては、次の數程が直ちに私の視野に這入つて來た。

一、『シュルレアリズム繪畫論』阿部金剛著、昭和五年天人社發行「新藝術論システム」の內。
一、『シュールレアリズム文學論』西脇順三郎著、昭和五年天人社發行、右同システムの內。
一、『新造型』新造型美術協會機關誌。昭和十年十二月創刊?
一、『エコール・ド・東京』エコール・ド・東京機關誌。
一、『超現實主義について』福澤一郎稿、都新聞昭和十二年六月二十三日——二十六日。
一、雜誌『みづゑ』の最近諸號。

併し以上の總てにさへ私は悉く目を通してゐるわけではない。最後の『みづゑ』に就いて、私の通覽した範圍內で主な論文を擧げて見ると、次の數種がある。その題目を一覽しただけでも、この方面に何らの豫備知識のない方々には、その一班に就いて多少の概念を得ることが出來るであらう。

一、『チェッコに於ける二人の畫家』山中散生稿——スティルスキーとトーエンの二人に就いての紹介文。——昭和十二年三月號。
一、『ジョアン・ミロ』瀧口修造稿（六月號所載）一八九三年四月生れのスペインのこの派の大立物ミロの略傳である。彼は「一九二九年から三〇年にかけて一種のオオトマティズムに身を委ねた。對象からの直接な感動でなしに、日常殆ど知覺されない程の微妙な內的事件からも畫的動機を補へた。」とあるから、夢の場面なども屢々描かれたに相違ない。
一、『超現實性の現實的可能及びその方法論』島津純一稿（八月號）——この論文は比較的に組織を持つてゐる。內

に引用せられたり述べられたりしてゐる。種々の見解をとり出して批判を加へて見やう。それは超現實主義の理論的立場を理解するに多少の助けとなるであらうから……。

「パラノイアとは組織的構造を持つ解釋の狂氣」と定義せられてゐる。これは精神病理學的定義としても異存なきところであらう。但し分析學徒はこの「狂氣」を「正氣又は狂氣」と直しておきたいと思ふ。

「繪畫とは具象的非合理性の、または凡ゆる想像的世界の、色彩を用ゐた手づくりの寫眞である。」とあるが、「色彩を用ゐた」の代りに「線條、色彩、又はその兩者を用ゐた」とした方が定義としては拔目がないのではなからうか。

「彫刻とは具象的非合理性の、又はあらゆる想像世界の、手づくりの鑄型である。」即ちここでは合理的なものが嚴密に排除せられねばならないやうになつてゐるやうであるが、非合理のため非合理と云ふやうな傾向になりはせぬかと云ふ危惧を起させないでもない。

右の三つの定義は何人の與へたのか筆者島津氏は明白にしてゐないが、恐らくはかのダリの言葉であるらしく思はれるなほそれに續いて次のやうな言葉がある。即ち――

「此の精神錯亂的狂氣的創造方法に依つて作される作品に於いて、人間の潛在意識に潛む最も醜惡とせられ耐え難いとせられるエゴイズムが曝露せられるので、人々はこれに目を被ふであらう。此等は抽象創造に優る强烈なる無意識本能の露出であり、同時に人爲的又は自然的な表象の中に直觀性の補ひ難い艮が潛み、智力と情熱との悲劇的な葛藤を象徴してゐる。併しまたこの偏執狂的體系に認容せられ許可せられる方法の總括的要素としては、左の四つの項目に分類することが出來よう。(A)同時的重複影像に關する方法。(B)夢的象徴的機能に關する方法。(C)連想的遇發的壓縮的影像に關する方法。(D)影像轉位に關する方法。」

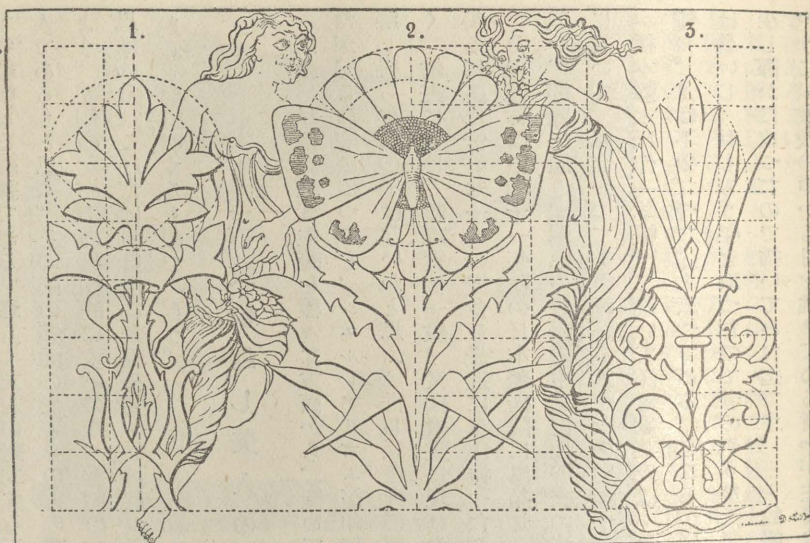
右は殆どフロイドの夢の說にそのままである。殊に最後の四項目は、フロイドの說く夢の四種の仕事に殆ど一致してゐると云へる。これ等で見るとシュルレアリズムと分析との關係が如何に深いものであるかが察せられる。併し夢と繪畫とは多くの共通點を持つてゐるにもせよ、兩者を同一規準の上に置かうとする創作論に就いては、なほ再考の

餘地があるやうに思はれる。

一、『禪と超現實主義』福澤一郎稿（同號）――「總ての道樂は禪に持つて行ける樣だ」とて、菓子、盆石、水石、俳句、川柳などに言及し、「聊か論理は飛躍的だが、超現實主義に就いて、僕は常にこれを西洋の禪みたいだと考へてゐる」と結論し、更に附け加へて「過去のものは一切過去のものであつて、それ自身とり上げられても深海の怪魚の如く、內臟を吐いた死んでしまふだけで、何にもならない。吾々の仕事が所謂禪畫や舊來のオブジェに逆戾りしたら、ミイラ取りがミイラになることである。何の意味もない。御注意肝要。超現實主義は禪に比較すれば歷史も淺いが、偉大さに於いては禪に到底及ばない。しかしこれも一つの精神の脈流であるのである。超現實主義が滅びる時があつても、この非合理的直觀の大きな脈流が滅びる事を意味しない」とあるのは一見識である。

一、『ジァコメッティの彫刻』山中散生稿（九月號）――ジャコメッティは一九〇一年十月十日生れのスイス人で、元は畫家であつたが、今は超現實派の彫刻家である。極度に單純化せられた直線と曲線、象徵的な諸々の形態などが彼の藝術を形成してゐる。

一、『シュルレァリズムの店グラディヴ』瀧口修造稿（十二月號）――アンドレ・ブルトンたちの手で巴里のセイヌ街にグラディヴと云ふ名の店が出來た。この名はイェンゼンの小說『グラディヴ』から由來してゐるのであつて、殊にこの作はフロイドの精細な分析批評があるので、分析學徒間のみならず、世間一般の間に有名になつてゐる。この作は嘗て本誌に紹介したことがある。シユルレアリスト達が店名にこれを用ゐたことは彼等の間になほ當然分析學への興味の失はれてゐないことを證明するものであらう。

一、『腐つた驢馬』サルヴァドオル・ダリ、山中散生譯（十二月號）――現今シュルレアリスト達の間で最も勢力ある人ダリ（S. Dali）の感想文であるが、原文のせいか譯文のせいか、甚だ晦澁なものである。題名は次の一節に由來してゐるのである。こゝを讀んで見ても如何にその難文なるかを察することが出來よう。「僕は幾重にもなれる影像の例證の內に、幻像の幾重にもなれる所在を認めざるを得ない、たとひそれらの狀態の一つが腐つた驢馬を表はしてゐ

ダリ作《吸血蝶》(但し大槻の勝手なる命名)

るとしても、或は又、たとひかかる驢馬が實際に、且つ目もあてられぬばかりに腐つてゐて、おびただしい蠅や蟻でたかられてゐても……。」この文章は恐らく次のやうな趣旨であらうと思ふ。「例へばここに重複した何かの影像があるとすれば、その影像の中には重複した幻像の存在を認めないわけに行かない。よしんばそれ等諸々の幻像の内には腐つた驢馬の幻像の含まれてあることはあるにもせよ……。」

つまり繪畫のモーチフたる影像は必ずしも所謂美的なる幻像のみから成立つてゐるわけではないと云ふことを說いてゐるので、それは尤もな意見である。畫家はその諸々の幻像の中から所謂美的な幻像のみを選擇して影像化するには及ばないのだ。その幻像それ自身の美醜を問題にする時は作品は通俗的、フィリスチン的となる。畫家はそのモーチフと表現とに忠實であればよいと云ふことになるが、たゞその表現の條件の中には現實原則的な約束がいろいろ入込んで來るのではないかと思ふ。

この機會に上に揭げたダリの作品を鑑賞して見よう。これは或る詩集の挿畫であると云ふ。如何なる詩集のためのものか明かでないが、幾何學的な機械美と唯美派的な、ビアヅリー風の奇怪美とをいみじくも混合させた、如何にも

才氣縱橫なる線畫である。恐らく左右の對立する二女人は中央に機械化し、無機物化し、圖案化せられてゐる蝶の擬人であらうと思ふ。その眼の邪淫の光とその舌の嗜色的な動きとは、この畫の中核をなす力であると云ふことが出來よう。左側の女の手の男性的に太いのや、右側の女の指の悪魔的な擴がりはその氣分を助長するに與つてゐるやうに思はれる。これだけの自由な表現を與へて、且つ同時にこれだけ圖案的效果を擧げ得てゐるのは彼の畫才の並々ならぬことを證明するものであらう。

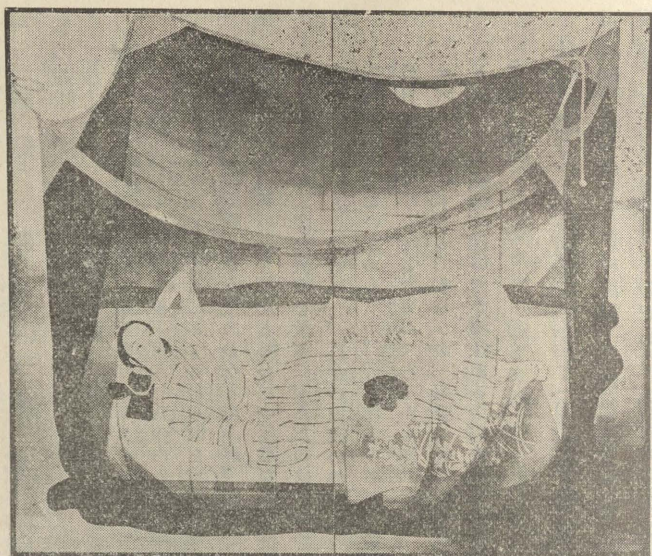
三、蚊帳越し美人の分析考

以上、私は超現實主義を種々な方面から、極めて斷片的ながら調査し、且つそれにやはり斷片的な批評を加へて來たが、これ等に依つても、シユルレアリズムが如何なるものであるかが、この方面には全く無知識な人々にも多少理解し得られたのではないかと思ふ。併し私自身の興味は必ずしもシユルレアリズムの特種な繪畫運動にあるのではなく、繪畫に於ける超現實性一般、又は繪畫に現れたる意識性と無意識性との關係にあるのである。その關係を闡明し得るに誠に恰好な一つの機會を最近に私は持つた。

その機會は昭和十一年秋の日本美術院に出品せられた橋本靜水氏作『翠帳』に就いてである。この作は次頁挿圖に就いて御覽の通り、翠色の蚊帳の中に白地浴衣の清楚な美人が横はり蚊帳越しに月を仰いでゐる圖柄である。この繪に就いて、私はかつて美術雜誌『雲雀』の昭和十二年一月號に次のやうに論じたことがあつた。

「橋本靜水氏作『翠帳』に就いて洋畫家某氏は『色の效果を狙つたのだらう。人物の手足のデフォルマチオンは少し變だ。月は不要だつた。』と云つてゐる。ところが同じ前號上で作者靜水氏自身はこの作に就いてから語つてゐる。『夏は暑いし、私ももう年を取つたので昔のやうな元氣はありませんが、美術界の騒ぎ（大槪曰、帝展改組騒ぎを云ふ。）も少し靜かに成つたので描いてみた迄です。……蚊帳の中から月を眺めてゐる所を描きました。』云々と。作者にはこのやうに。『蚊帳の中から月を眺めてゐる所』が主要な畫因であつたのだ。それに對して月は不要と云ふのはいさゝか酷

ではあるまいか。

私の解釋によると、蚊帳の中の人物が蚊帳越しに月を眺めてゐるやうに、作者も（從つて觀者も）蚊帳越しに美人を眺めてゐるのだ。結局、月は美人であり、美人は月である。月は昔から世界の詩人に依つて天上の乙女と解せられて來たのだ。＊この畫の場合に於いては、美人と月との關係は我々と美人との關係に等しいので、そこに二重の象徵的關係のあるのが面白いのである。だから月を無用と云はれてはこの畫は全く骨ぬきになるのである。作者は『夏は暑い』とか『年を取つて元氣がない』とか、『美術界の騷ぎも靜かになつた』とか、作畫の解釋には一向關係のなさゝうに思はれることを解說として述べ立てゝゐるのは、一見をかしく思はれるが、實はこれがやはり無意識心理的には大いに關係があるのである。も少し『元氣』があつて『暑くるしい』ことを厭はないならば、作者は蚊帳越しの美人などを描きはしなかつたであらう、蚊帳などは破り棄て、裸體に引きむいてしまつたかも知れない。併し元氣がないからとか何とか云ひながら、そのくせ相當エロティックな興味が殘存してゐるのである。蚊帳の翠色と腰紐の淡紅色との對比は相當に誘發的である。そこで某氏をして『色の效果を狙つた』と解せしめたのであらう。とにかく相當のエロティシズムとその回避との矛盾心理が妥協し、そこでこのやうな蚊帳越し美人の作畫となつたのであらう。正にこの境地を謳つたものに芭蕉の句『猫の戀やむとき閨の朧月』（『己が光』が

ある。猫の戀とは「暑くるしい』『元氣』な戀であり、月はさう云ふものを回避した戀、美人を象徴すると解してこの句の妙味が深くなるのである。」と。

註＊支那に於いては月は嫦娥であり、ギリシヤに於てはダイアナであつて、共に「美人」又は「乙女」を意味してゐることは人々のよく知るところである。百人一首の内の僧正遍照の作「天津風雲の通路吹き閉ぢよ乙女の姿暫しとゞめむ」と云ふのは、乙女を月の象徴として月にかゝるむら雲を憎む單なる叙景、風流の歌と私は久しく解して來てゐたのだが、さうして恐らく國文學界の一般定説もさうであらうと思ふが、私はこれは作者のトリックにかゝつてゐるものではなからうかと云ふ疑念を近頃持ち始めた。月の事を乙女と呼んだのは單なる洒落風流と作者は表向き逃げようとの用意があるのであらうが、僧侶の身を以てこのやうな大膽な表現を故意に選んだのは、却つて一種の逆手であつて、本當は文字通り「乙女」の事を意味してゐるのではなからうかと思ひ始めた。乙女の純潔の美が性の「叢雲」に依つて被はれ易いことを嘆じた一種の母コムプレクス(少女病的詠嘆の歌ではないであらうか。併し作者の名が「遍照」などゝ云つて、日月を意味するらしい名であつて見れば、或はまた存外自分自身の事を詠じたものであるかも知れない。もしそうとすれば「乙女」と云ふ表現は彼自身の女性への同一化、フェミニズムを意味するのであらうか。遍照の他の作や人物に就いて何ら知識のない私は只今斷定下すことを控へておくが、たゞ月と美人との關係に就いての興味ある主題であり、且つ本號が文藝研究號であるに鑑み、いさゝか平素の所懐を述べて見たに過ぎない。

私は以上のやうに論じて一先づこの問題は解決したものであると考へてゐたのであるが、偶々昨年十一月號の『中央演劇』誌を繙き、新村出博士の隨筆『蚊帳越しの花嫁』を讀むに及んで、なほこの問題には開拓すべき深甚な領域の存することに氣付いたのである。新村博士の文は次の一節を以て始まつてゐる。

「蚊帳越しの花嫁と云ふと、浮世繪に描かれてある筈。……千一夜物語ともすぐ連想されやすいアラビア語で、ホホヅキのことをアル・アルーサ・フィル・ナムーサといふ。義譯して蚊帳越しの花嫁である。正眞の南蠻通たる笠間杲雄氏の東西雜誌帳を見る」ことに依つてこの一文の想を暗示せられたものであるらしい。なるほどかう云ふ畫題は浮世繪には非常に澤山に發見せられるが、現代のわが國の油繪にもないことはない。私の記憶する限りでも、山本鼎、

有島生馬兩氏には蚊帳の畫がある。

ここに「蚊帳越しの花嫁」とあつて「蚊帳の中の花嫁」とないのが、重要な點である。さうだとすれば「覘き見られたる」と云ふのは、英語の through 又はドイツ語の durch に相當する語であらう。アラビア語の「フィル」と云ふやうな過去分詞形の働詞がそこに省略せられてあるものと、考へなければならない。中の花嫁では觀者側の透視窃視の意慾が表現せられないが、越しとあるのでその點が非常に判然としてゐる。またここに「花嫁」とあるが、それは必ずしも字義通りの花嫁でなくてもいいのであらう。一般に女又は美人の意と解していいのであらう。何となれば、花嫁とは女の全生活の精華、その象徴的、代表的の一瞬間であるからである。日本語で云ふ「ホホツキのツキは突の意ではなく、顏ツキ、眼ツキ等いふ場合のツキで、頬ツキといふにすぎぬといふ說に從つてよからう」と新村博士も云つてゐられる通り、日本語でもこれは美人の頬の如しと云ふ意味であるのだから、私の主張も必ずしも獨斷とも云へまい。アラビア語源を調べて見たら、必ず證明が與へられるに相違ないと信ずる。

なほこゝで序ながら云つておきたいことは、新村博士がこの『蚊帳越しの花嫁』を詮鑿する心理と橋本靜水氏が翠帳を描く心理との中に甚だ多くの共通するものの存するらしいことである。靜水畫伯に「元氣」がなくて「暑くるしい」ことをいとう心理があつたやうに、そのくせなほそれ等をあきらめきれないのと同じやうに、新村博士もこの問題への學問的詮鑿について「花嫁もかうさいなまれてはかはいさうであるが」云々とてサディズム的な意味に、即ち性象徴的な意味に解してゐる。さうして最後に「花嫁がいたくこの老翁の感興をそそつた。まだ若い氣持が多分に殘つてゐるとみえてわれながらたのもしい」と性象徴的意味にユーモラスに述懷してゐる。

蚊帳越しの花嫁の話から私の聯想は、私自身の嘗て見た芝居、夏目漱石原作『虞美人草』に於ける主人公藤尾（水谷八重子扮之）の自殺の、場面へと飛んだ。誰の脚色であつたか忘れたが、演出は松居桃多郎君であつた。自殺の場面に於いて松居君は薄物のカーテンをその室の前面に張り繞らせた。卽ち、觀客は蚊帳越し美人自殺の場面を見せられたわけであつた。これは恐らく、演出者自身の意圖では、人目を避けて密室で死に入らうとする主人公の意圖を彷

彿せしめたつもりであつたのであらうが、それには現實的には厚ぼつたい窓掛樣のものを以てしなければならないわけである。併しそんなことをしたのでは觀客には何も見えなくなるので、厚い布のつもりで薄い布を用ゐたのであらうと私は解してゐたが、新聞紙上の批評では村山知義君は無意味だとばかり一蹴してゐた。併し私は當時某誌上で松居君のために大いに辯護したことがあつた。それが松居君のために贔負の引倒しになつたかどうかは私は知らないが、少くとも私は演出者が蚊帳越し美人としての魅力と效果とを覘つたものだと解したかつたのであつた。

さう云へば、美人は昔も今も、彼女等自身を蚊帳に包んで街頭にまで進出してゐたではないか。平安朝時代には貴族の女たちは大きな笠の周邊に薄物を蚊帳樣に垂れて歩いてゐたし、西洋婦人はネットを鍔の廣い帽子から顎の下にかけて顏面の美を增さうと努力した。この風習の名殘は現代でもなほ我等の眼前に見られることで、ただ十九世紀頃までは顎の下に引き絞られてゐたネットが、現代では遙かに開放的になつて、鍔のない帽子から寧ろ前方に突出し、わづかに眼や鼻の前あたりにふら〳〵してゐるに過ぎなくなつてゐる。ネットはなくとも、鍔の廣い帽子では、片方の眼を隱すやうに引き下げて被る風習のあるのは同じ傾向であると云へる。これは心理學的には、男性近接への防禦禁制象徵であるが、それが逆效果としては彼等の竊視慾、近接慾を誘發する所以となるもの丶如くである。

このやうに靜水畫伯が何心なく取材した『翠帳』も、分析して見ると甚だ廣く深い無意識の普遍性に根差してゐることが分る。この無意識の普遍性が超現實性と名付けられ得るならば、繪畫の超現實性は人々の豫想外のところに存するとも云へるのである。恐らくはこのやうな超現實を無意識的に選擇し表現し得る才能が藝術家の第一の資格であらう。ただその表現の才能にはアルファからオメガに至るまでの等差があるにもせよ……。（完）

夏目漱石の精神分析（その文學）

北山　隆

一、序　言

漱石がわが國に於る、最も偉大な作家の一人であつた事は疑ひない。彼が世界文壇上に、相當の地位を要求して然るべき事も、廣く世に承認されてゐる。事實、彼の優れた幾つかの作品は、常に其の讀者をして强い感慨にふけらしめるであらう

しかし乍ら、本論は彼の藝術が如何に高いか——を扱ふものではない。筆者は分析の力を借りて、彼の藝術が如何なる特徴と傾向とを持ち、漸次どの方向に推移したか？　彼はその藝術的衝動をどの樣に支配し、又は支配されたか？——を考察せんと欲するものである。

漱石の文學を分類するには勿論、種々の方法がある。作品の年代による方法、主題の內容による方法、背景の傾向による方法——等が之である。筆者は本論の主旨よりして、分析的に最も注目すべき作者の心的傾向に從つて、之を數種に分類しようと思ふ。故にこの分類は個々の作品を單位として扱はず、一作品の中に多くの心的傾向を認める。

それらは「智的文學」「鬪爭文學」「洒脫文學」「遁世文學」「道德主義文學」「告白文學」「則天去私文學」などに大別することが出來るであらう。これらは一應の便宜的分類であつて、相互に確然たる區別もなく、また元來が各獨立して存在する物でもない。これら相互の關係及び共によつて來たる所以を明かにする事こそ、本論の目的である。

二、漱石の藝術的衝動

所謂「藝術的な人」、現實に滿足せずして藝術を愛し、進んで之を創造せんとする人々は、その强い藝術的衝動を「個人的な偶然の天賦」又は「遺傳」によつて授けられる——と一般には考へられてゐる。勿論吾々は之を否定する事が出來ない。しかし漱石の場合の如く、その近親者の悉くが、藝術的に低級であつた場合に、彼の藝術的衝動を「遺傳による」と考へる事は甚だ六づかしい。まして神祕めいた「個人的な偶然の天賦」が吾人の察知すべからざる物であるからには、吾々は之を專ら、後天の事實によつて辿るより外に途がない。

漱石は七八歳の頃から、かうした衝動を持つた。子供らしくない彼は、既に現實ならざる。ある永遠の物を求めたのであつた『草枕』には次の様な事が書いてある。

「子供のうち、花の咲いた葉のついた木瓜を切つて、面白く枝振を作つて筆架をこしらへた事がある。それへ二錢五厘の水筆を立てかけ、白い穗が花の間から隱見するのを、机の上へのせて樂しんだ。其日は木瓜の筆架ばかり氣にして寢た（翌朝、花が萎んだので）あんな綺麗なものがどうしてかう一晩のうちに枯れるだらうと、其時不審の念に堪へなかつた」と

又、「思ひ出す事ども」には、——

「小供のとき家に五六十幅の畫があつた。余は交る〳〵それを見た。さうして懸物の前に獨り蹲踞まつて默然と時を過すのを樂しみとした。……畫のうちでは、彩色を使つた南畫が一番面白かつた。……或時、靑くて丸い山を向ふに控へた。又、的皪と春に照る梅を庭に植へた柴門の眞前を流れる小川を垣に沿ふて緩く繞らした家を見て——無論繪絹の上に——何うか生涯に一邊で好いから斯んな所に住んで見たいと傍にゐる友人に語つた」

とある樣に、早くも實際生活の快樂よりも畫餅に心を傾け始めてゐる　廿歳頃に至つてはいよ〳〵人生の辛さと無常が身にしみ「あはれ塵の世に生れては、かはり行くわが身の上をうれひ〳〵て老いぬべきかな……われももとせの後は苔下にうづもれて、此月影を見ん事哉はず」（二十二年の作文『對月有感』）といふ濃い靑年期のセンチメンタリズムと疑惑に陷つてゐる。

この「感傷と失望」とは、全ての靑年に程度の差こそあれ或期間、存在するものであるが、これらを俗事によつて、又は抑壓によつて忘れ果てるのが普通の社會人である。しかも漱石は遂に死に至るまで、之を離脫し得ず、却つて其の不安と孤獨を補償し、人生を價値づけ、美化し、之を不死化する所の形而上的な或る物を、血みどろの足掻きを以つて探究し、獲得せんとしたのである。

二十二年の木屑錄に——

「余兒時、誦唐宋數千言、喜作爲文章……竊謂古作者豈難

臻哉、遂有意干以文立身……時勢一變挾厘行書上于郷校」

とある様に、彼は先づ漢詩を好んだが、やがて漠然とした目的（何か勉強しようといふ　を抱いて大學まで進んだ爲に、純粹の藝術的追究は一時停止され、むしろ智的追究、學識の貯蓄によつて自己の不安に對しようとする結果になつた。天然居士の忠言で英文科に入る時にも自ら藝術を創造するよりは、單に智識を廣く得て世を驚かす事を考へてゐたらしい。かうして彼は英文學者となり、ロンドンへ行き、帝大に講じた

尤も彼は學生時代に、既に小説を書いてはゐる。「僕が二十三四にかきかけた小説が十五六枚殘つてゐた。よんで見ると馬鹿げてまづいものだ。あまり耻づかしいから先達て妻に命じて反古にして仕舞つた」といふ書簡がある。

堂々たる學者となつた彼は、英國留學中の頃から、學問の蓄積が自分を保護し、自分の不安を除去する爲には、餘り役に立ない事に氣がつき始めた「近頃は英學者なんてものは馬鹿らしい様な感じがする」と三十四年ロンドンよりの書簡にある。彼の目的に取つて、學問は餘りに迂遠であり、餘りに消極的であつた　彼の探求する・・・或る物は遂に學問の世界に發見されず、彼の劣等感を補ふべき強大な名譽慾は、學問のみでは到底滿たされぬ所であつた。

「小生の文章を二三行でも讀んでくれる人があつたら難有く思ひます。面白いと云ふ人があれば嬉しいと思ひます。敬服する杯といふ人があれば非常な愉快を覺えます。此愉快はマニラの富にあたつたより大學者だと云はれるより、教授や博士になつたより遙かに愉快です」（三十八年簡十四）

「小生野分をかいたから、此次に何をかかうかと考へ居り候何だか——樣より漱石の方がえらい氣持に候。此分にては神樣を凌ぐ事は容易に候」（四十年書簡）

「近來の漱石は何か書かないと生きてゐる氣持がしないのである。」（四十年入社の辭）

「其次ギハマダ考ヘヌ、其丈書いて居る中ニ死ンデ仕舞フダラウ、死ニサヘスレバ書カンデモイイカラナ、書ク書カヌト何トカ、カントカ云フノハ生キテ居ルウチノ事サ」（三十七八年斷片）

これらを見ると、彼がたゞ藝術的衝動（名譽慾を含む）の爲に、如何に創作の熱意に燃えたかを察する事が出來る。彼は自分の不安に對する正當防衛として、生きてゐる中は何かを書かねばならなかつた　彼は死ぬ爲に書いた　とさへ云ひ得る。

この「不安」とは本來如何なる形の物であつたか？之を吾々は漸次に追究せねばならぬ。

三、智的文學

かくして彼は英文學を放棄し、職業以外の餘暇を驅つて創作に專念した。しかし、名譽慾の滿足を重視した彼の初期文學は、多く智的な內容と表現——哲學的又は敎訓的批評的內容と衒學的辭句——とを持つ結果となつた。その第一は『吾輩は猫である』であり、其他『倫敦塔』、『幻想の楯』、『琴のそら音』、『趣味の遺傳』、『虞美人草』、『草枕』等にも相當に含まれてゐる。智的文學を漱石は自ら批評して左の如く云ふ。

「智的要素は文學上最も薄弱なものである。……又最も俗社會から歡迎されるものである。俗人、殊に少し許り學問をして學問の習氣を有難がる者は、大抵理窟の勝つた句を好む。これは彼等が文學に對して先づ感じようとしないで、考へやうとするからである。世間一般の人（これが卽ち俗人であるが）は感受性よりも智慮の發達したものである。細緻な感應性よりも實際的判斷に興味を有して居るものである。」（文學評論）

之によると漱石が後年『吾輩は猫である』や『虞美人草』を非常に嫌惡した事情がわかる。同時に又、現在でも一般にはこの二作を彼の最大傑作として持映してゐる悲しむべき理由を知る事が出來る。ともかく、智的文學は藝術的にも又分析學的にも、重要な位置を持たないのである。

四、鬪爭文學

彼は智的文學の消極性に飽足らず、更に積極的に——自己を迫害する惡漢を摘發し、世に充滿する惡德を曝露し、彼等の膺懲と自己の勝利を確信せんとする——「鬪爭文學」に筆を進めた。彼の云ふ所を聞くとかうである。

「小生は生涯に文章がいくつかけるか夫が樂しみに候。又喧嘩が何年出來るか夫が樂に候」（三十九年書簡）

「左右前後に居るもうろくども一切氣に喰はず、朝から晩まで喧嘩なり。……喧嘩しつゝ文章かきつゝ、もうろくどもかくたばるま迄は決して千駄木をうつらずして安々と往生仕る覺悟なられば」云々（三十九年書簡。北山曰、誤字多き點に注意せられよ）

「岩崎の徒を見よ。終日人の事業を妨害して（否企てゝ）さうして三食に米の飯を食つてゐる奴等もある。漱石の事業は此等の敗德漢を筆誅するにあり。」（四十年書簡）

「吾人が世間ト戰爭ヲスル、又ハアル者ト戰爭ヲスル場合ニハ、戰爭ヲヤメロ、戰爭ヲシテモ貴樣ハ勝テッコナイト敎ヘテヤッテモ到底承知スベキデハナイ。矢張リ仕舞迄ヤッテ見

テ、ア、詰マラナイ、トウ／＼駄目デアツタト落膽サセテ自覺スル迄ヤラセルヨリ外ニ道ハナイノデアル」（三十九年斷片）

これは文學を以て社會を動かし、金持を呪ひ殺す事が可能であり、その勝算歴然といふ事である。誠に驚くべき誇大妄想であると云はねばならない。吾々はこゝに彼の幼兒的な無意識的願望と獨尊的（ナルチスティッシュ）な理想我との巧妙な結托を指示する事が出來る。

彼の憎惡は・貴族・金持・權威等――全て彼より優位に立つ者――に理由なくして向けられてゐる。謂はゞこの時期は彼の文學の左翼小兒病時代と呼び得るかもしれない。この傾向を持つ作品としては『吾輩は猫である』、『坊つちやん』『二百十日』『野分』を擧げねばならない。『猫』では苦沙彌先生が金田夫妻と立廻はりを演じ、『坊つちやん』は赤シャツ・野だ等と大喧嘩をやり、『二百十日』では圭さん碌さんが譯のわからない金持攻撃論を始めるが、その最も甚しい物は『野分』である。之は小説といふよりは「被害妄想患者の手記」と呼ぶ方が適當なくらゐであつて、目茶々々な八ツ當りの鬪爭のみが内容になつてゐる『二百十日』では（圭さん碌さんの對話）

「相手は誰だい」、「金や威力で、たよりない同胞を苦める奴等さ」、「社會の惡德を公然商買にして居る奴等さ」、「社會の惡德を公然道樂にして居る奴等はどうしても叩きつけなければならん。」

の程度であつたが、『野分』には――

「手の掌をぽんと叩けば自ら降る幾億の富の塵の塵の末を舐めさして生かして置くのが學者である。文士である。さては敎師である。金の力で活きて居りながら金を誹るのは、生んで貰つた親に惡體をつくと同じ事である。その金を作つてくれる實業家を輕んずるならば、食はずに死んで見るがいゝ」（圏點北山附之）

となる。救はれざる卑屈と劣等感とは、こゝに至つて全くの被害妄想となり、單なる白眼者ではなくして、恐るべき世の呪咀者、文化と金と權力と統一とに對する盲目的反抗者となつてゐる。しかも彼が一生の間、遂に眞の社會――地球上の營々たる現象としての社會――を發見し得なかつた如く、彼の云ふ金持・權威者・貴族は實在する所のそれらでは決してなかつた『野分』に明白な影響を與へたと彼自ら云つてゐる所の、イブセンの難ずる惡德は、確に世に存在する物であつたが、彼の敵は寧ろ彼の内に存したのである。吾々はそれが常に心の本能寺にある事を忘れてはならない。

五、遁世文學

世を呪ふ者には敢て世と闘ふか、又は退いて遁世するかの二方途がある 漱石は被害妄想の一症候とも云ふべき闘争文學に筆を染める一方、獨り退いて樂む所の遁世文學を始めた『草枕』及び俳句漢詩が之であり、彼の好んで畫いた南畫俳句の類ひ、竝びに謠曲に對する嗜好も之に通ずる物である。彼はかう云つた。

「住みにくさが高じると安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れ畫が出來る。……越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか寛容て、束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世長を閑にし、人の心を豐かにするが故に尊とい。』（草枕）

この論は一應よい。確に藝術の一面に於ける眞に相違ない。彼の俳句・漢詩は此の方向へ一途に浸らんとした物である。彼は更に云ふ。

「これが（詩）わかる爲には、わかる丈の餘裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。第三者の地位に立てばこそ芝居は觀て面白い。小說も見て面白い。芝居を見て面白い人も小說を讀んで面白い人も、自己の利益は棚へ上げて居る。見たり讀んだりする間丈は詩人である。それすら普通の芝居や小說では人情を免れぬ。……見るものもいつか其中に同化して苦しんだり、怒つたり、騷いだりする。……それが嫌だ」

全ての物に對して第三者の地位に立たねば詩を味はへぬ事――これも確に事實であり、また普通の人間が最も容易に行ふ所である 藝術とは緣の遠い民衆に於ても、それは何の困難をも伴はずに行はれる。彼等は芝居を見講談を讀む場合、その愛すべき主人公に自らを同一化して敵役を憎み、又は悪漢と探偵の雙方へ同一化して之に興ずる。彼等は芝居に關して怒りや喜びや悲しみを切實に感じはするが、それが爲に第三者の地位を彼てはしない。彼等は泣き乍らも怒り乍らも、芝居その物を面白がつてゐる。彼等は芝居と現實との區別を知つて居る。故に芝居に於ける怒りや悲しみが、彼等の日常の精神を脅かす事はない。彼等は强烈な芝居や小說に對しても、之に耐え得るだけの餘裕――精神區劃に於て云へば緩衝地帶、即ち自我――を持つてゐるからである。

かく觀ずる時、吾々の胸中には次の樣な疑問が湧く。即ち――執拗にまで第三者の地位に立つ事を强調し、しかも强烈な芝居や小說の爲に、ともすれば其の地位を保ち難い事を嘆く所の漱石こそは、元來が最も餘裕のない人であり、强烈な内容に耐え得られない人ではあるまいか？

そして、全ての物に對して直ぐさま自己の利害（心的

利害、即ちコムプレクスによる所の感情傾向）を結びつけ、自己の獨尊觀念（ナルチスムス）と願望とを以て之に對抗し、之と爭鬪する人ではあるまいか？ 又その爭鬪の爲に疲れ果て之を再び繰返へす事を極端に恐れる人ではあるまいか？ この疑問への解答は、漸次、吾々に與へられるであらう。

漱石は、この困難な第三者の地位を保つ狀態を稱して、「非人情」と云つた。『草枕』は非人情の世界觀を述べた物であつて、隨所に此の言葉が出て來る。「普通の小說はみんな探偵が發明したものですよ。非人情な所がないから、些（ちつと）も趣がない。」

この「非人情」なる物を吾々は何う解釋すべきであらうか。之を文字通りにとれば、「人情味を棄て去つて、悉くの物を其のあるがまゝに、自然のまゝに見る」といふ事になる。しかし乍ら、『草枕』の內容に表現されてゐる非人情は決してかゝる物でない事を吾々は知つてゐる。又、物をそのまゝに見る――即ち自然主義――こそは漱石が終生、最も甚しく憎む所であつたのだ。非人情とは正に語意そのまゝの意味ではない。吾々はもう少し、『草枕』によつて、その內容を吟味する必要を認める。

「汽船、汽車、權利、義務、道德、禮儀で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐつすり寢込む樣な功德である。……淵明、王維の詩境を直接に自然から吸收して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願。一つの醉興だ」

そして彼は次の漢詩を擧げる。

「採菊東籬下、悠然見南山」「獨坐幽篁裏、彈琴又長嘯、深林人不知、明月來相照」

彼が自ら作つた詩は

「青春二三月、秋隨芳草長、閑花落空庭、素琴橫虛堂、蠨蛸懸不動、篆煙繞竹梁」「獨坐無隻語、方寸認微光、人間徒多事此境孰可忘、會得一日靜、正知百年忙、遐懷寄何處、緬邈白雲鄉」

彼にとつては、悠長な茶店の婆さんが非人情であり、宿のお那美さんの奇嬌な行爲が非人情であるらしい。彼の非人情とは、世を捨て文化を捨て去つて、自己の人情を刺戟せぬ樣な所、自分に惚れた樣な、惚れない樣な、「愚弄者」兼「御機嫌取り」のお那美さん――が住む所へ逃避する事であるらしい。

凡そ、人情を動かさずに濟ますには、二つの方法がある。一つは、他に少しの人情も差向ける事なく、之を唯ありのまゝに冷然と見る積極的の自然主義、他は、自己の人情をも早や動かす必要のない程、周圍が好意と安靜とに滿ち〱た場合を想像して、この謂はゞ「人情の飽和狀態」ともいふべき境地に浸らんとする消極的方法で

ある。漱石の云ふ「非人情」とは、正しく後者でなければならぬ。然らば吾々は、この幸福なる狀態の心理的本源を、何處に發見し得るであらうか？　文化なく權利・義務・道德・禮儀なき、人情の飽和狀態は、實際に於て何處に存するか？　分析學は吾々に敎へてゐる――それは唯、人間の最幼兒期に存するのみである――と。かくして吾々は、「遁世文學」に於て、漱石なる自我の弱い人間が、社會の現實に耐え得ずして、最幼兒期へと遁走する姿を見るのである。この「非人情」が後年の所謂「則天去私」の前身である事は云ふまでもない。尙ほ附言するが、漱石は遁世文學の卑怯な所以を自覺して次の樣に云つてゐる。

「只きれいに美しく暮らす、卽ち詩人的にくらすすいふ事は生活の何今一分か知らぬが、矢張り極めて僅少な部分かと思ふ。で草枕の樣な主人公ではいけない。あれもいゝが矢張り今の世界に生存して自分のよい所を通さうとするには、どうしてもイブセン流に出なくてはいけない。僕は一面に於て俳諧的文學に出入すると同時に、一面に於て死ぬか生きるか命のやりとりをする樣な……文學をやつて見たい。それでないと何だか難をすてゝ易につき、劇を厭ふて閑に走る所謂腰拔文學者の樣な氣がしてならん。（三十九年書簡）

さう云つて彼は、次に『野分』を書いたが、やはり彼の心は年と共に、內へ／＼と傾いて行つたのである。

六、洒脫文學

世には漱石を目して、單に滑稽小說家なりと云ふ人がある。之は『吾輩は猫である』、『坊つちやん』が廣く讀まれてゐる故に外ならぬが、其他『倫敦消息』、『自轉車日記』、『琴のそら音』、『二百十日』、『坑夫』、『滿韓ところ／＼』等には確にその分子が多い。

之は鬪爭文學と遁世文學との中間を行く物である。卽ちそれは、世の惡に對して仰山な憤慨を表示すると共に之を下らぬ事として茶化さうとかゝる物である。漱石が幼時から江戶風の洒脫と落語趣味を好んだ事も、單に環境の感化のみではなく、更に深い彼の心的契機による所があらう。

しかも漱石の滑稽（ユーモア）は、世を客觀視して人間の愚を笑ふよりは、その惡と矛盾に向つて幼兒的な憤慨を爆發させる傾向が強い。それ故洗練された洒々落々たる物ではなく、むしろ餘憤勃々たる一時的休火山に近い、漱石の滑稽を「氣障（きざ）だ」と嫌ふ人もあるが、繰り返へし讀む時は、確に不快を覺える事がある。

七、道德主義文學

今まで吾々の觀察し來つた所は、漱石の文學に於て過渡的の位置を占める物であつた。又は出城の如き物であつた。吾々は之より漱石の本城に迫らうとする。

「道德主義」こそは漱石が最後まで固執した文學の目的であつた。鬪爭文學によつて社會に喧嘩を賣つても、一向に先方の降參しない事を、漱石は漸く悟つた。そして今度は道德主義を以て、社會を訓育しようと考へたのである。彼は之を小說に於てよりは、理論として執拗に主張した。

「倫理的にして始めて藝術的なり、眞に藝術的なるものは必ず倫理的なり」（大正五年斷片）

「作者は我作物によつて凡人を導き、凡人に教訓を與へる義務がある……文學は矢張り一種の觀善懲惡であります。……私の態度は……唯自分の良心にはづかしからぬ樣に觀善懲惡をやりたい。世間の道德に反對する事もあらうし、又は道德通りを示す場合もあらうし、世間の道德を是と感ぜしめると同時に、それを破つたものも大に稱すべき價値ある樣にも書かうし、要するに自己の見識に負かぬ樣にしたい……然し此人生觀は間違つてゐると知りつゝも、こんな風に人を動かさうと力めたら、其作家は正しく不德である。たとひ知らざるも間違つた人生觀を說いたら恥辱である」（三十九年九月「文藝界」）

右の樣に云つてゐるが、彼の云ふ眞の道德なる物は如何なる物か？ 吾々には全く判らない。彼が元來から几帳面な道德心（良心卽ち理想我）の強い人あつた故に、常識的な道德主義を奉じた――といふ理由だけで、之を片附ける事が出來るであらうか？ 彼は世間一般の禮儀道德の尊重を強調するのか（事實その樣に見える所もある）或ひは一般の道德等は無視して、全く哲學的な超現實的の道德を唱へるのであらうか？ 我々はたゞ、漱石の云ふ所が前者でない事は想像し得る。『文學評論』にアヂソン・スチールの文學が、日常の禮儀作法を詳述するといふ特徵の外に、

「たゞ殘るものは橫からも縱からも斜めにも見られる廣い世界を、たゞ道德の二字で貫いて、何んでもかんでも道德的に眺めてゐる彼等の平面的眼界、直線的視線である……彼等が凡てを綜ぶるに道德の二字を以てして、萬事を善惡の標準で律しやうとしたかを疑ふのである」

と之を非難してゐる。彼の云ふ所は、もつと深い、ある場合には現世の道德に違犯さへする超越的なものであつた

「學問は綱渡りや皿廻はしとは違ふ。藝を覺えるのは末の事である。人間が出來上るのが目的である。大小の區別のつく輕重の等差を知る、好惡の判然する、善惡の分界を呑み込ん

だ、賢愚、眞僞、正邪の批判を謬らざるむ丈夫が出來上がるのが目的である」（野分）

とあるのを見ると、彼の「道德」とは社會現象の實際とは無關係な、一種の哲學による物であるらしい、そして彼自身は、最も正しき道德を知り得たりと確信してゐた。三十八九年頃の斷片に「汝の見る所は利害の世なり……われの視るは實相の世なり……得失――善惡」とある。

右の如き彼の道德主義は、小說中に明白な形で表はれる事が少い。『明闇』は確にこの傾向を持つて居り、『虞美人草』は勸善懲惡の形式を備へてゐるが、其他には餘り見當らぬ。彼の中期以後、卽ち『三四郎』より『道草』に至るまでの作品には、道德による露骨な批判が少い。もつとも、それらの文學に於る人物の、尋常ならざる行爲や物語が、彼の道德を實踐的に示した物であると考へる事も不可能ではない。しかし何れにせよ、吾々は寧ろ、彼がしばしば爲した所の自然主義攻擊論に於て、道德主義の正體を最も明白に見る事が出來る。

「眞を發揮するの結果、美を構はない、莊嚴を構はない迄はよいが、一歩を超えて眞の爲に美を傷つける。善をそこなふ莊嚴を踏み潰すとなつては、眞黨の人は夫で萬歲をあげる氣かも知れぬが、美黨・善黨・莊嚴黨は指を啣へて、御尤もと屛息して居る譯には行くまいと思ひます」（四十年「文藝の哲學的基礎」）

「現代の文學者を以て、探偵に比するのは甚だ失禮でありますが、唯眞の一字を標榜して、其他の理想はどうなつても構はない、と云ふ意味な作物を公然發表して得意になるならば其作家は個人としてはいさ知らず、作家としての缺陷のある人間でなければなりません。病的と云はなければなりません……ゾラとモーパッサンの例に至つては、殆ど探偵同樣に下品な氣持がします」（同右）

この問題に對しては、從來から物議の存する所であるが、田山花袋一派、及びモーパッサン等への彼の憎惡は病的な程に猛烈を極めてゐた。彼は以上の如き議論を、恐るべき熱意を籠めて何度でも繰返へすのであつた。

「滑稽と云ふものは唯、駄洒落と嘲笑ばかりではあるまいと思ふ。深い同情もなければならぬ、假令其事實が如何に滑稽でも、惡感を起させる樣なものだつたら、決して之を上乘の作と云ふことは出來ぬ。モーパッサンのに次の樣なのがある。――。※

自分は之を讀んで何んだか嫌な感がするのである。勿論滑稽には違ひなひが、終ひにダイヤモンドが僞物だつたといふ事が知れるので――或は是が全篇の主眼點かも知れないけれど――夫婦が指環を（北山曰、之は明かに漱石の思ひ違ひで

ある、實際は首飾である）失くして虚榮心の充らない事を覺り、數年の間眞面目になつて働いたが、全く嘲の中に葬られて終つた。同情もなければ何もない。」四十年一月「滑稽文學」

（註北山曰、モーパッサンの傑作、嘲笑の裏に苦さと涙とを盛つた『首飾』は既に御承知でもあらうが、念の爲に概要を記する。ある夫人が、身分不相應な夜會に出る爲、友人某夫人から、高價な首飾りを借りる。それを紛失したが爲、その夫人夫婦は莫大なを金借り、紛失した物と同程度の物を貰つてそつと返却する。この借金の爲に、夫婦は長い年月を悲慘に暮す。漸く皆濟した後、或日夫人は例の友人に會ふ。友人は夫人を忘れてゐる、それ程みじめに變じてゐたのである。そして何故そんなになつたかを訊ねる。夫人の答を聞いて友人は云ふ——あれは擬ひの安物だつた——と）

モーパッサンに對して漱石は、右の如き評を下してゐる。吾々は之に多くの反駁を加へる事が出來る。彼がモーパッサン研究に於る不徹底、殊にモーパッサンを單に冷酷低級な滑稽作家と目した近視眼的觀察　これ卽ち漱石が自我の弱さの爲に小說に對して第三者的地位を保ち得ない證據である）等々。しかし今の場合、之等は問題でない。吾々は、彼が何の故にかくまで自然主義を攻擊し、殆ど獅子奮迅の勢で大人氣なくモーパッサンに迫るのか？又、『首飾』の結末を目出度し／＼に改作せよ——等と世にも愚な事を云ひ出すのであるか？その心的根據を追究せねばならぬ。

彼が自然主義を恐れた理由を考究する時、之を次の樣に假定する事が出來る。一つは現實あるがまゝの姿を、彼は無價値にして低劣な物と考へた事。一つは自然主義的觀察が、彼に甚しき苦痛・不快・動搖を與へる事。又一つには彼の理想我は極端に高く、脅迫神經症の機制に於けるが如く、常に彼の足を地より離れしめ、更に高き方向へと鞭うつ事（「又若し向上の信を抱いて事をなす時貴キ事神人ヲ超越シテ蓋天蓋地ニ自我ヲ觀ズ。——樣ノ御威光デモ是許リハドウモ出來ン。漱石ハ喧嘩ヲスル度ニ此域ニ出入ス」三十九年書簡）——右のうち、第二及び第三は多く意識的に理由づけられてゐるが、第一の物は殆ど無意識的に働いて居り、また最も根強い物の樣に考へられる。これらの豫備智識を携へて、吾々は更に追究の步を進めよう。

賢明なる讀者諸氏は、右の如き自然主義攻擊の言にも拘らず、漱石自身が明白な自然主義的作品——「道草」の如き物——を殘してゐる事に、いち早く氣付かれた事であらう。誠に「道草」こそは一個人の心理に對する、假借なき白刄にも似た、驚くべき自然主義の作品である。

しかし吾々は、漱石の自然主義と、一般の自然主義との根本的相違が何處にあるかを知つてゐる。後者が決して見逃さなかつた所の、そして又、或ひは多少誇大に注視した所の「人間の愛慾的行爲」と、之に對應する「感傷的愛情」の粉碎――この二要素が漱石に於ては、全然缺除してゐる事である。漱石は恰も之等から逃廻つてゐるかの樣に、之を取扱はぬのみならず、あらゆる場合に之等を排擊し、憎惡し、「無上の惡德」として殆ど齒がみせん程の態度を見せるのである。

『首飾』を不德と呼ぶのは、その結末が「感傷愛の粉碎」に外ならぬからである。モーパッサンの其他の作品、及びゾラを憎むのは、それらが『愛慾』の實狀を曝露するからである。漱石は之等を攻擊する際にも、決して「愛慾の曝露」を口にはしない。單に漠然と「不道德」を以て責める。（そこに吾々は寧ろ抑壓の機制を認める。）この點に關して、吾々が直ちに想起する所は、彼が常に放言した『裸體畫攻擊論』である。これまた獅子奮迅の勢であつて、吾々にとつては甚だ滑稽な議論である。

「古代希臘の彫刻はいさ知らず、近代佛國の畫家が命と頼む裸體畫を見る度に、あまりに露骨な肉の美を、極端迄描き盡さうとする痕跡があり〳〵と見えるので、どことなく氣韻に乏しい心持が、今迄われを苦しめてならなかつた。……裸體畫は其好例である。都會には藝妓と云ふものがある。色を賣りて人に媚びるを商買にしてゐる。彼の嫖客に對する時、わが容姿の如何に相手の瞳子(ひとみ)に映ずるかを顧慮する外、何等の表情をも發揮し得ぬ。年々に見るサロンの目錄は、此藝妓に似たる裸體美人を以て充滿して居る。彼等は一秒も、わが裸體なるを忘るゝ能はざるのみならず、全身の筋肉をむづゞかして、わが裸體なるを觀者に示さんと力めて居る。」「草枕」

かう云ふ議論を彼は隨所に放言する。甚しきは美術學校の生徒に向つて講演する。

「現今西洋でも日本でも、八釜しく騷いでゐる裸體畫杯といふものは、全く此局部の理想を生涯の目的として、苦心してゐるのであります……かの裸體畫が公々然と青天白日の下に曝される樣なものであります。一般社會の風紀から云ふと、裸體と云ふものは見苦し不體裁であります。西洋人が何と云はうと、さうに違ひありません。私が保證します」（四十年於美術學校『文藝の哲學的基礎』圈點は北山附之）

由來、洋畫家が裸體畫を畫きすぎる事實は、吾々も之を認める。又漱石が洋畫鑑賞に於て、純然たる素人であり、恐らくはフラゴナール・ワトオ・ブグロオ・ジェローム・アングル・コラン等の皮相的觀察に止り、かのレムブラント・クールベェ・ドガ等の神韻漂々たる裸體畫の前に、頭を下げる事を知らなかつた事――をも吾々は

想像する。しかし今の場合、吾々は之等を取上げまい。要は彼が愛慾的な物に對して、或ひは自己のそれを誘發すべき物に對して、如何に之を憎悪し、抑壓したかを見ればよい。

今や吾々は、漱石の云ふ「道德主義」の正體を索り得たやうである。彼の「倫理的」とは、一見哲學的背景を持つかの如くであるが、實は感傷的愛情の擁護」及「愛慾的行爲の排撃」を金科玉條とする物に過ぎないのであつた。彼は之等の爲に——殊に「感傷愛の擁護」の爲には——世の規律道德はもとより、世の制裁をも無視しようとしたのである。彼は必死の態で、このコムプレクスに取すがる憐むべき漂流者であつた。吾々はその姿を次の告白文學に於て見るであらう。

八、告白文學

「告白文學」とは餘り適當な名稱ではないが、他に呼び樣がない爲に之を用ひた。その理由はやがて説明せられるであらう。ともかく『それから』より『道草』に至るまでの文學を指すのがあつて、この間こそ漱石の文學に於る主體であり、本城と見なさるべき物である。（『三四郎』と『虞美人草』とは告白文學に至る過渡的作品と見られる。）

こゝには彼の最も價値高き作品『門』、『心』、『道草』の悉くが存在する。にも拘らず、此の間の文學は最も不可解な物である。そこには、譯のわからない挿話や行爲や感情が、次々と展開せられる。從來から人々は之を説明する方法に窮した。此處には、以前に於て漱石の主張した思想や行動が殆ど姿を表はさない。彼は之等の文學によつて、世を動かさうとする意志が無かつたかの樣である。それらは一體、何を結論するのか、何を云はんとするのか、一向に判らない。その物語には解決がなく、その終末は茫漠としてゐる。しかも之等は、抗すべからざる力を以て吾々を引きつけ、打ちすへる。そこには疑ふべくもなく、純粹な藝術的の或る物が存在する。

論を急がんが爲に、諸家の之に對する批評及び、吾々の立場よりする結論的解釋を先に述べてしまはう。今日までの、之に對する觀察は甚だ曖昧である。

「漱石の爾後の小説は人間の業に惱む者の道連れとなつた。然しその仕事は、仕事そのもの丶性質上、多くの場合、漱石を苦惱と悲哀と重い密雲の中に閉さざるを得なかつた」（小宮豐隆氏言）

「漱石の作品が、それを中心として旋回してゐたものは 愛の問題である。漱石の一生は愛の爲に、惱み續けた一生であると言つてよい」（同氏言）

これらの批評は正しい。吾々は、漱石が自己の表面的願望を捉へて、その主張を通さうとした「闘爭文學」「遁世文學」道德主義文學」を棄てゝ、自分をしてかくあらしめた。自分の過去、及び過去より現在までを貫く所の深い心理、自分では如何とも手のつけられない心的團塊——を除々に告白した物であつた——と註釋しよう。而して其の心的團塊は、正に愛の問題であつた。それは他人ごとではなくて自分の問題であり、之を問題にした爲に不快を催したのではなくて、終始自分を不快へと追ひ立て引き廻はす所の心的團塊が、自然に無意識に吐き出された物である。勿論その行爲によつて、漱石は多少の安易を得たに違ひはない。他人の爲を心配したり、社會を導いたり、或ひは善を行つたりする目的を以て、藝術は創められる物ではない。もし自らはさう意識しても、その最後的動因は必ずや、更に深い所に潛む。之に關して漱石は自ら云ふ。

「藝術は自己の表現に始つて、自己の表現に終るものである。……藝術の最大目的は他人とは沒交渉であるといふ意味である。親子兄弟は勿論の事、廣い社會や世間とは獨立した。全くの個人的のめい／＼丈の作用と努力に外ならんのである。」（大正元年『文展と藝術』）

「私の過去を許いてもですか、……私は死む前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。（中略）私の過去は私丈の所有と云つても差支ないでせう。それを人に與へないで死ぬのは、惜しいとも云はれるでせう、私にも多少そんな心持があります」（心）

かく漱石は、多少意識して自分の過去を告白したでもあらう。吾々は更に歩を進めて、これらの文學が持つ內容を檢討しよう。

先づ之等の小說に於る主人公、『それから』の代助、『門』の宗助、『彼岸過迄』の須永、『行人』の一郞、『心』の先生等——を引出して考へる時、これらの人物には、共通した一種の性格が存在する事が知られる。それは「煮切らない、他を愛するが如く、愛せざるが如く、全てに於て非精力的な、男らしくない、謂ばゞ不能的な」性格である。之は普通。漱石的な性格として、寧ろ尊い物の樣に云はれてゐる。しかし吾々は、之を單に「漱石らしい人格」と片附ける譯には云かぬ。

『行人』や『彼岸過迄』や『それから』は、その主人公の奇怪極まる思想と行爲の爲に、又はその間に織込まれた不可思議な物語の爲に、常識を以つては到底、解し難い內容である。しかも其處に何物か力强い興味の感ぜられるのは何故であらうか？　漱石の苦しんだ、そして、又之を告白せんとした心的團塊はそも／＼何物であらう

か？　この目的の下に、これらの小說の有つ注目すべき共通點を擧げて見よう。

第一が「登場人物間の近親的關係」である。一體、漱石の作品は一家族、又は一親族間の問題を扱つた物が多く、獨立した一個人、或ひは社會機構上に於る人間といふ物を、全く無視してゐる事は、讀者諸賢も旣に氣附かれて居られやう。たとへ『吾輩は猫である』や『坊つちやん』に於て多少の異論はあらうとも、漱石の文學は社會性に缺けると評してよい。そして「告白文學」に於ては此の傾向が特に甚しい。その人物の大部分は一家親族であり、友人であり、その妹であり、其外奇妙な關係によつて結合される者である。それらの間柄は互に甚しく緊密であつて、例へば『野分』に於て、主人公白井道也の弟子、高柳の親友である中野の親父は、道也の兄が勤めてゐる會社の社長である——といふ樣な關係である。

尤も、この場合は、驅け出しの小說家及び大衆小說家が多く用ひる所の、小說構成上、最も容易な、最も拙劣にして非現實的な方法に、該當するかも知れない。しかし『野分』以後に於ては、必ずしもさうとは云はれない。

右に關聯する一特徵として、小說中の主人公が、嘗て空想中に描いた人物（多くは女）と、其後に於て實際に會ふ人物とが、偶然に、甚だ神祕的に合致する——といふ不思議な事がある。『三四郎』に

「三四郎の夢は頗る危險な夢であつた。——轢死を企てた女は野々宮に關係のある女で、野々宮はそれと知つて家へ歸つて來ない。只三四郎を安心させる爲に電報だけ掛けた。妹無事とあるのは僞りで、今夜轢死のあつた時刻に妹も死んで仕舞つた。さうして其妹は卽ち三四郎が池の端で逢つた女である。」

といふ樣な近親愛的關係妄想が實際に行はれてゐるのである。之は古く『ロンドン塔』、『趣味の遺傳』、『虞美人草』にも明かに出てゐる。『三四郎』の廣田先生を始め『虞美人草』の小夜子には、主人公がそれと知る以前に於て、他所（よそ）ながら逢つてゐるのである。『心』に至つては主人公が「先生」に向つて「何處かで先生を見た樣に思ふけれども、何うしても思ひ出せない」と云ふ。つまり小說構成上に無理な近親的關係を拵へる事の消失した代り、主人公が他人に對し、常に近親愛的感情を以て對する態度が、明瞭に伺はれる。

右について吾々は、漱石が彼の實際の近親者へ無上の嫌惡を有してゐた事實を思ひ超す。そして、彼の小說は近親者間、又は近親者の對象となる者の間に於ける問題にのみ、集中されてゐる事を不思議に思ふ。然らば、そ

の問題とは何々であるか？

先づ「近親者間の運命的戀愛」である。之には必ず、實際上及び感情上の強い障害が伴はれてゐる所に特徴がある。（その女は全て感傷愛の對象である）『それから』では代助なる主人公が、親友平岡の妻、三千代を愛して自分に讓渡されん事を請ふ、彼等と三千代との關係は次の樣であつた。

「代助の學友に菅沼と云ふのがあつて、（中略）三千代は其妹である。此菅沼は……修業の爲と號して國から妹を連れて來ると（中略）兄がチフスで急死した爲に、其年の秋、平岡は三千代と結婚した。さうして其間に立つたものは代助であつた。」彼等は今や述懷する。「三千代を僕に周旋しようと云ひ出したものは君だ……あの橋の所まで來た時、君は僕の爲に泣いて呉れた」、「僕もあの時は愉快だつた。」しかし代助は平岡に肉薄する。「平岡、僕は君より前から三千代さんを愛してゐたのだよ、（中略）餘りに自然を輕蔑し過ぎた。僕はあの時の事を思つては非常な後悔の念に襲はれてゐる。僕が君に對して眞に濟まないと思ふのは、あの外僕がなまじひに遣り遂げた義狭心だ」彼は自分の戀をから信じた。彼はそれを天意としか考へ得られなかつた」

と、天意による戀が最も自然的であり、道德的であると主張する。

『門』に於ては主人公の宗助が、親友安井の妻お米（安井はお米を妹として宗助に紹介した。かうした事は漱石の周圍に、實際二度起つてゐる）を奪つたが爲に、世にも人にも棄てられる。「彼等は自然が彼等の前に齎した恐るべき復讐の下に戰きながら跪いた。（中略）彼等は鞭うたれつゝ死に赴くものであつた。たゞ其鞭の先に、凡てを癒やす甘い蜜の着いてゐる事を覺つたのである。」

『彼岸過迄』に於ては、主人公須永が、母の切に勸める許婚者であり從妹である千代子と、どうしても結婚しまいと考へ乍ら、しかも彼女を愛して、彼等の間に介入し來つた第三者、高木に對して非常な嫉妬を感ずる。須永は云ふ。「すると僕は人より二倍も三倍も嫉妬深い譯になるが、或ひはさうかも知れない。然しもつと適當に評したら、恐らく僕本來の我儘が原因なのだらうと思ふ。僕は變な心持と共に、千代子の見てゐる前で、高木の腦天に重い文鎭を骨の底迄打ち込んだ夢を、大きな眼を開きながら見て、驚いて立上つた」（圏點北山附之。）

『心』に於ては、「先生」といふ人が下宿の娘を愛し乍らわざ／＼Kといふ第三者を同じ下宿に引入れる。「先生」は驚いて俄に友を裏切り、娘の母親に迫つて娘を貰ふ事にしてしまう。その結果、Kは自殺し、「先生」も其後の幸福

な結婚生活に拘らず、往々にして不安に襲はれ、遂に自殺する。「私は妻と顔を合はせてゐるうちに、卒然としてKに脅かされるのです。つまり妻か中間に立つて、Kと私を何處迄も結び附けて、離さないやうにするのです。妻の何處にも不足を感じない私は、たゞ此一點に於て、彼女を遠ざけたがりました。」先生は自ら求めた恐しい戀の爲に、他人をも自分も殺したのである。

『行人』に於ては、一家の中での、かうした關係が更に深刻に物語られる。主人公の二郎は兄の妻直に對する、自分にも不可解な親しさと尊敬の爲に、親達の勵める結婚に從はうとしない。兄の一郎は二人の仲を極度に疑つて、遂に神經症へと陷るのである。一郎は二郎に對して恐るべき事を云ひ出す。「直は御前に惚れてるんぢやないか」「だつて嫂さんですぜ。」夫のある婦人、殊に現在の嫂ですぜ」（中略）「實は直の節操を御前に試して貰ひたいのだ。お前と直とが二人で和歌山へ行つて、一晩泊つて呉れゝば好いんだ。」二郎は否み切れずに嫂と和歌山へ行き、二人で同室に泊る。二郎はその時、次の樣な妄想に襲はれる。

「……二人で此處へ泊つた言譯を、どうしたものだらうと考へた。同時に今日、嫂を一所に出て、滅多にない斯んな冒險を共にした嬉しさが、何處からか湧いて出た。其嬉しさが出た時、自分は（中略）母も兄も悉く忘れた。すると其嬉しさが、俄然として一種の恐しさに變化した。（中略）自分を粉微塵に破壞する豫告の如く思はれた。」

すると彼女は次の如く言ひ出す。「二人で和歌浦へ行つて浪でも海嘯でも構はない、一所に飛び込んでお目に懸けませうか」これは抑壓せられた心中の相談である。

右に列擧した如き、恐しい戀愛關係を何といふか？

讀者諸氏は既に充分氣づいて居られる。これ即ちエディポス的戀愛に外ならない。吾々は之等によつて、漱石その人がエディポス的戀愛に、異常な興味を有してゐた事を察知し得る。

次に擧げらるべき共通點には、結婚問題に關する事がある。之にも二つの特徴があつて、一つは親達が極力すゝめる結婚を、絶對に受付けない事。いま一つは、その勵められる結婚の相手は必ず近親者だといふ事である。

この傾向は既に『虞美人草』の頃から見へてゐる。その主人公である甲野は言を左右にして、母の勵める結婚に從はないが、結局はその親戚に當る糸子と結婚する。『三四郎』も田舍の母が決めた許婚者を嫌ふ。『それから』には之の傾向が最も猛烈である。（代助と父との對話。）「代助は次に獨立の出來る丈の財産が欲しくはないかと聞かれた。代助は無論欲しいと答へた。すると父が、で

は佐川の娘を貰つたら好からうと云ふ條件を附けた。」代助は之を峻拒して、他人の人妻を要求するのである。（親が勵める結婚には、必ず財産が結びついてゐる事も注意されねばならぬ。）

『彼岸過迄』の須永は、母親が希望し、自らも愛してゐる從妹の千代子との結婚を、何故ともなく拒み、『行人』の二郎は、之も何故ともなく結婚を肯ぜず、「一家の主人となるとか、他人の夫になるとかいふ方面には、故意に意志の働を鈍らせる癖に」と評され、『心』の先生は叔父から、その娘（卽ち從妹）との結婚を迫られて當惑する。『明暗』にも、主人公津田は、叔父の娘――二人の從妹との結婚を一寸考へたが知らん顏をして過ぎた――とある。

第四の共通點は、これらの小說に於る主人公が、多くは經濟的獨立を持たぬ、無爲徒食の人物だ、といふ事である。『虞美人草』、『行人』、『心』、『明暗』等に於いてもさうであるが、特に甚しいのは『それから』の代助と『彼岸過迄』の須永とである。「代助は月に一度は必ず本家へ金を貰ひに行く。代助は親の金とも、兄の金ともつかぬものを使つて生きてゐる。月に一度の外にも、退窟になれば出掛けて行く。」そして彼は嫂に言はれる。「だつて餘りぢやありませんか、月々兄さんや御父さんの厄介になつた上に、人の分迄自分に引受けて、貸してやらうつて云ふんだから。」「代助は嫂から無心を斷られるだらうと氣遣つた。けれども夫が爲に大いに働いて、自ら金を取らうといふ決心は、決して起し得なかつた」のである。

須永は「軍人の子でありながら軍人が大嫌ひで、法律を修めながら役人にも會社員にもなる氣のない、至つて退嬰主義の男であつた。尤も父は餘程以前に死んだとかで、今では母とたつた二人ぎり、淋しいやうな、又床しいやうな生活を送つてゐる」この生活こそ漱石の理想であつたのだ。

しかし反面に於て、『野分』、『門』、『道草』の如く、親に棄てられた者の生活苦を、鋭く描いてゐる事も見逃せない。漱石の實生活は寧ろ之に近かつた。）ともかく漱石の小說は、無爲徒食の人物か、又は生活上惡戰苦鬪の人物かの、兩極端を扱ひ、經濟上の安定した地位を持つ者は、一人として無かつた事が吾々の注意を牽く。

第五の共通點は、財産及び家督問題である。之は、自分の繼ぐべき家督又は財産を、他人に奪はれた怨み、若しくは、財産等は不用だといふ逆願望の形を採つて表れる。『虞美人草』では、あの鼻もちのならない醜惡な葛藤が、家督と財産とを繞つてなされてゐる。甲野は自分の當然受け繼ぐべき家督と財産を、腹違ひの妹、藤尾にやつてしまうと云ふ。「本來の無一物から出直すんだから

是からだよ。つまり家を藤尾に呉れて仕舞へば夫で濟むんだからね。……僕は立ん坊さ……うん、どうせ家を襲いだつて立ん坊、襲がなくなつて立ん坊なんだから一向構はない。」甚だ意氣地のない話だが、漱石は之を非常に崇高な物の様に書いてゐる。

『それから』の代助は、人妻を得んが爲に、父の與へようとする財産を放棄する。『門』の宗助も、親友の妻を奪つたが爲に廢嫡されさうになり、父の殘した財産は叔父に態よく横領されるが、宗助は一言の口出しても出來ない。叔父は次の様に云ふ。「宗助はあんな事をして廢嫡に迄されかゝつた奴だから、一文だつて取る權利はない。」『心』の先生こそは、この種の最も慘酷な經驗を嘗めた人であつた。

「私は他に欺かれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺かれたのですよ。私は決してそれを忘れないのです。……私は彼等から受けた屈辱や損害を、子供の時から背負はされてゐる。」「平生はみんな善人なんです。少くともみんな普通の人間なんです。それがいざといふ間際に、急に惡人に變るんだから恐しいのです。だから油斷が出來ないんです。……金さ、君。金を見ると、どんな君子でもすぐ惡人になるのさ……一口にいふと、叔父は私の財産を胡魔化したのです。事は私が東京へ出てゐる三年の間に容易く行はれたのです。

吾々は之等の財産問題を、愛の問題に置換へて考へる事が出來る。そして漱石の他人に對する深い怨みが、奈邊から流れ出た物であるかを、考へてもよいであらう。

尙、之に關聯して、漱石が血統問題、特に養子問題について、異常な關心を持つた事も明記して置きたい。『虞美人草』の甲野の母は繼母であり『彼岸過迄』の須永の母も又、繼母である。(たゞ兩者には相違がある。甲野の場合は繼母への憎惡が、須永の場合は繼母への親愛が描かれてゐる。)『市藏(須永)の太陽は彼が生れた日から旣に曇つてゐた。彼等は本當の親子ではないのである。彼は小間使ひの腹から生れたのである。」巧みにも、親子關係を太陽を以て形容した程、漱石の關心は强かつた。『三四郎』では廣田先生が、此の心事を物語つてゐる。

「例へばこゝに一人の男がある。父が早く死んで母一人を賴みに育つたとする。其母が息を引取る間際に、實は誰某は御前の本當の御父さんだと云つた——さういふ母を持つた子がゐるとする。すると其子が結婚に信仰を置かなくなるのは無論だらう。」

漱石自身が實際に於て里子や養子に出された問題はさて置いても、彼が親子關係を信用しなかつた事、及び養子空想に絶大な注意を拂つた事、母と妻とを同一化した事は、之を以てしても明かであらう。

最後に、吾々の注意を最も喚起する共通點は、父母に對する極端な愛憎の分離、並びにそれらの相反併存的態度である。虞美人草 では、父への愛と、母への憎惡が明白に二分されてゐる。「僕の母は僞物だよ、君等がみんな欺かれてゐるんだ。母ぢやない、謎だ。澆季の文明の特產物だ。」「仰向く途端に、父の半身畫と顏を見合はした。（中略）父が死んでから、甲野さんは何となく此畫を見るのが厭になつた。草葉の蔭で親父が見てゐたら、定めし不肖の子と思ふだらう。」「父は死んでゐる。然し生きた母よりも慥かだよ、慥かだよ。」 そして甲野は、家を出る時その畫だけを持つて行くのである。あれ程、父を憎み輕蔑した『それから』の代助さへ、嫂に『代さん成らう事なら年寄に心配を掛けない樣になさいよ。御父さんだつてもう長い事はありませんから」と云はれて「不意に穴倉へ落ちた樣な心持がした」のである。最も神經症的に此の傾向を持つのは『彼岸過迄』の須永である。彼の母に對する愛着と尊敬は、殆ど滑稽にさへ見える。

「僕は自分の嗜好や性質の上に於て、母に大變能く似た所と全く違つた所と兩方有つてゐる。僕は母と自分と何處が何う違つて、何處が何う似てゐるかの詳しい研究を 人知れず重ねたのである。何故そんな眞似をしたか、自分に聞き糺して見ても判切（はつきり）云へなかつたのだから……然し結果からいふと斯うである。――缺點でも母と共に具へてゐるならば、僕は大變嬉しかつた。長所でも母になくて僕丈有つてゐると、甚だ不愉快になつた。其內で僕の最も氣になるのは僕の顏が父に似て母とは丸 緣のない目鼻立に出來上がつてゐる事であつた。器量が落ちても構はないからもつと、母の人相を多量に受け繼いで置いたら、母の子らしくて嘸心持が好いだらうと思ふ。」

『心』には兩親への愛のみが表れてゐる。

「私は父や母が此世に居なくなつた後でも、居た時と同じやうに私を愛して吳れるものと、何處か心の奧で信じてゐたのです。私はたつた一人で山へ行つて、父母の墓の前に跪きました。半は哀悼の意味、半は感謝の心持で跪いたのです。」

『道草』には漱石自身の、養父母及び義父に對する神經症的態度が充分に窺はれる。健三は自分の眞底から憎惡し、又之を近かずける義理も必要もない、過去の養父母と交際し始めて、少からぬ金品を奪はれる、更に義父（妻の父）の爲には、非常な苦勞をしてまで金を借りてやるのである。

「何もさう度々來て、他の邪魔をしなくても好さそうなものだ。彼は腹の中で斯う呟いた。斷然面會を拒絕する勇氣を有たない彼は、下女を見たなり少時（しばらく）默つてゐた。」「隙があつたら飛込まう。落ち窟んだ彼（養父）の眼は、鈍い癖に明かに此意味を物語つてゐた。自然健三はそれに抵抗して身構へな

ければならなかつた。然し時によると、其身構へをさらりと投出して、餓ゑたやうな相手の眼に、落付を與へて遣りたくなる場合もあつた。」「同時に彼女（養母）を忌み嫌ふ念は、昔の通り變らなかつた要するに彼のお常に對する態度は、彼の島田（養父）に對する態度と同じ事であつた。さうして島田に對するよりも、一層嫌惡の念が劇しかつた」（實父達は養父と絶交したに拘らず）『おやぢは阿父、兄は兄、己は己なんだから仕方がない。己から見ると交際を拒絶する丈の根據がないんだから』斯う云ひ切つた健三は、腹の中で其交際が厭で／＼堪らないのだ。といふ事實を意識した。」「健三の借り受けた四百圓の金が、細君の父の手に入つたのは、それから四五日經つて後の事であつた。」『己は精一杯の事をしたのだ。』健三の腹には斯ういふ安心があつた」

　健三は自分が意識的には、あれ程に嫌つてゐる養父母や義父に對して、何故かくまで愛他的な行動をとらなくてはならないのか？　自ら知らないのであつた。

漱石の告白文學は以上の如き著しい特徵を持つてゐる「人物間の近親的關係」、「近親者間の運命的戀愛」、「結婚問題」、「無爲徒食の人物」、「財産及び家督問題」、「兩親への極端なる愛憎」、これらに對して、異常な關心を寄せた漱石がその絶えざる心的不安として、又は願望として、常に彼の行動を決し、彼を藝術にまで驅り立てた、その本源的根據は何れより來たるか？　今、吾々は之を容易に斷定する事が出來る。——エディポス・コムプレ・クス以外に、之を解くべき鍵はない——と。

　ただ、右に列擧した項目が、この斷定とは如何なる關聯を持つであらうか？　之を一段と明瞭にする爲、此處に再び『彼岸過迄』を引用しよう。少し長いが熟讀して頂きたい。讀者は、この憐むべき幼兒的詩人・須永の告白の中にエディポス・コムプレクスの正體を、まざ／＼と見られるであらう故に。

　僕の父は早く死んだ。僕がまだ親の情愛を能く解しない子供の頃、突然死んで仕舞つた。自分を生んで呉れた親を懷しいと思ふ心は、其後大分發達した。當時の僕は父に甚だ冷淡だつたのである。尤も父も決して甘い方ではなかつた。骨の高い、血色の勝れない親しみの薄い格嚴な表情に充ちた肖像に過ぎない。僕は自分の顏を鏡の裡に見るたんびに、それが胸の中に收めた父の容貌と、大變似てゐるのを思出しては不愉快になる。（中略）あんな冷酷に見えた父も、心の底には自分以上に熱い涙を貯えてゐたのではなからうかと考へると父の記念として彼の惡い上皮丈を覺えてゐるが、子とし如何にも情ない心持がするからである。僕は母に對して決して柔順な息子ではなかつた。女親だけに、猶更優しくて遣りたいといふ分別が出來た後でも、矢つ張り彼女の云ふ通りにはならなかつた。此二三年は殊に心配ばかり掛けてゐた。父と母との間は、何れ程圓滿であつたか僕には分らない。尤も父は

癇癖の強い割に陰性の男だつたし、母は長唄をうたふ時より外、大きな聲の出せない性分なので、僕は二人の言ひ爭ふ現場を死ぬ迄未だ曾て目撃した事がなかつた。（中略）母は僕に死んだ父を語る毎に、世間の夫のうちで最も完全に、近いものゝ樣に、說明して已まない。慈愛に充ちた親としての父を僕に紹介する時には、彼女の態度が一變する。あの柔和な母がどうして斯う眞面目になれるだらうと驚く位ゐ、嚴肅な氣象で僕を打ち据ゑる事さへあつた。が夫は僕が中學から高等學校へ移る時分の昔である。今はいくら母に强請つて同じ話を繰り返へして貰つても、そんな氣高い氣分には到底なれない。僕の情操は其頃から學校を卒業する迄の間に、丸で荒み果てたのだらう。現代の空氣に中毒した自分を呪たくなると、僕は時々もう一過で好いから、母の前であゝいふ崇高な感じに觸れて見たいといふ望みを起すが、同時に其望みが到底遂げられない。過去の夢であるといふ。悲しみが湧いて來る。母の性格は、吾々が昔から用ひ慣れた慈母といふ言葉で形容さへすれば、夫で着きてゐる。（中略）是程鋭敏に父を觀察する能力を子供の時から持つてゐた僕が、母に對する注意に缺けてゐたのも、不思議である。僕の父は母よりも餘程他人らしく僕に見えてゐたのかも分らない。それを逆に云ふと、母は觀察に價しない程、僕に親しかつたのである。だから僕は出來る丈、母を大事にしなければ濟まない。が實際は同じ原因が却つて、僕を我儘にしてゐる。僕はまだ就職といふ問題について、唯一度も頭を使つた事がない。固より自慢で斯う云ふ話をするのではない。全く信念の缺乏から來た引込み思案なのだから不愉快であるが朝から晩まで、骨を折つて世の中に持て囃された所で、何處が何うしたんだといふ横着は無論附け纏つてゐた。（中略）僕が秘かに胸を痛めてゐるのは結婚問題である。結婚問題と云ふより、僕と千代子を取り卷く周圍の事情、と云つた方が適當かも知れない。（中略）千代子が生れた其時僕の母は何う思つたものか、大きくなつたら此子を市藏の嫁に吳れまいか、と田口夫婦に賴んだのださうである母が高等學校時代に匂はした千代子の問題　（その理由を訊くと、北山註）實は御前の爲ではない、全く私の爲に賴むのだと云ふ。意地の強い僕は、母を嬉しがらせるよりも、成る可く自我を傷つけない樣にと祈つた。其結果、千代子が僕の知らない間に、母から說き落されてはと掛念して、暗に夫を防ぐ分別をした。」

こゝに吾々は、エディポス・コムプレクスが如何樣に人間の行動、態度を決定する物であるかの、典型的場合を見る、男兒の源初に於るエディポス的態度、卽ち母を愛して父を亡き物にせんとする願望は、やがて其の罪を感じて父を怖れ、之を和解し、之を愛さうと努力める（同性愛的傾向）一方に於ては自分の要求を容れてくれぬ母を憎み、怖れる態度も表れる。卽ち父母に對する愛憎併存的態度である。

次には父母の關係、父母の態度に關する、神經症的に鋭い觀察が行はれる。無論そこには性的な意圖が含まれる。之は男兒をして奔命に疲れしめ、この觀察研究が他に代償を見出すに非れば、遂に全ての追究的態度を嫌惡し、禁制するに至る。（漱石が探偵といふものを餘りに輕蔑憎惡した事は、彼の神經症の一症候となつてゐるが、吾々は此處に、その解決の端緒を發見し得る樣に思ふ。）父母に對する種々なる感情に苦められる者は、やがて父母を聖化するに至る。父母は近かずき難いほど偉大であり、神聖であると觀じ、父母によつて打ちのめされる事を最上の喜びとする。之は御承知の如く、宗教の態度に通ずる物である。

父を愛し、父を怖れる者は、成人後も自ら獨立獨行して業を創め、家を起して父に對抗しようとはしない。父は餘り偉大な强者である。彼等は常に父の支配下に居なければならぬ。同時に、彼等は父の殘してくれる財產に對しても、相反倂存的態度をとる。財產は全て自分自身であり、又父の有した物、卽ち母を思はせるが故に、財產を只そのまゝ讓り受けるのは空恐しい。

結婚及戀愛に於ては、常に自己の近親者を求め、そこに何等かの障害が生ずる事を喜び、又自分の戀は運命的――漱石の言葉を用ふれば「天命」による物――と確信する。しかも彼等は親達の勵める結婚は絕對に受付けない。それは餘りに明瞭な代償となるからである。

かく考察し來つた吾々は、漱石の一生を驅り立てた不安こそは正に「エディポス・コムプレクス」であつたと充分の確信を以て斷定し得る樣に思ふ。彼の告白文學は、彼の興味ある事實を捉へて書き綴つた小說が、自然と彼のコムプレクスを告白する結果となつた物である。この文學に於て彼が何の主張する所もなく、何の結論する所もないのは當然と云はねばならぬ。又かゝる無意識の作品に於て、彼の傑作が生れ出でた事も道理であり、彼の文學には悲劇がなく、泣くべき小說のない事」もこゝに根據が存すると云へやう。漱石は自ら之を肯定して、「世の中ニ笑フ可キ事ハ甚ダ多イ、泣クベキ事ハ殆ドナイ、皆假面デアルカラデアル」と云つたが、それよりも寧ろ、第三者の位置に立たず、たゞ自分のコムプレクスをそのまゝに告白して行く小說には、不快と苦惱こそあれ、悲劇の起り得る筈がないからである。

尙ほかうした一種奇怪なエディポス的文學が漱石の極く初期から存在してゐた事は確かである。『幻想の楯』、『薤露行』、明治三十四年から七年へかけて作られて幾つかの英詩、及び『セルマの歌』、『カリクスウラの詩』並びに二十三年の西詩意譯『母の慈』、『二人の武士』等は

全て、非常にエデポス的感情を刺戟する物である。それらは悉く、、母聖女、娼婦、困苦、陰惨、救ひ、父又は皇帝の死、等を内容としてゐる。又これらの一つ〱は全て神經症發作の最も甚しい時期ごとに、書かれてゐるのである。

九、則天去私文學

「則天去私」とは御存じの漱石が死の一歩手前に於て獲得した一種の悟道である。之を一般に「私を棄てゝ天に則る」と解きはするものゝ、漱石が實際に於て、如何なる哲學を發見したのであるか？ 又それが分析的に見て如何なる心的態度であつたか？ これらの問題を解く事は甚だ困難である。？ 漱石がこの哲學に關して説いた言葉は極めて少く、又それは極めて不明瞭である。從つて又、彼がこの態度を以つて綴つた小説――未完成の『明暗』たゞ一つを以て「則天去私文學」を解くのは 非常な冒険であらねばならない。

先づ理論的に考へて見ても、則天去私文學」とは、「何物にも煩はされぬ態度」を以て書かれた文學を云ふのか、又は其の態度を最も高しとして、之の指導原理に人々を近づけようとする積極的の文學であるのか。吾々には判らない。更に漱石の信じた所の「天」とは、もつと道德的或ひは宗教的な色彩を持つ物であつたか否かも、判らない。

漱石は「則天」の意味について、此等の異つた態度を何等區別なき物の如くに、しば〱云つてゐるのである。彼は則天去私の理論に於て、かくの如き矛盾を表明してゐる。吾々はたゞ、『明暗』に於る彼の態度と、それ以前の文學に吾々の發見する則天去私類似の言葉と、そして彼の晩年の言動とによつて、則天去私の本を探るより他に、方法がない。

今は則天去私そのものを檢討すべき場合ではないからその詳論は避けるが、吾々の感知する所を綜合すれば、漱石の「天」には確かに一種の宗教的な色彩が存在した樣である彼は偉大な力であり正義である何物かを「天」を以て象徴し、萬人が之に從つて行動すべき事を主張したものの樣である。それは又、人間の最も荒々しい活動や、營々たる文化とは相容れない物であつたらしい。從つて「則天去私文學」は、遁世文學と道德主義文學とを相結んだ物の如く考へられる。

告白文學によつて 自己のコムプレクスを無意識的に、種々の形に於て表出し、就中『道草』によつて、嫌惡すべき過去に追はれる自分の姿を書き綴つた彼は、一種の安堵を以て告白文學の手を止めたらしい。そして從

來の文學よりは、一段と高い事を自負する「則天去私文學」に移つた物の如くである。しかも其の內容（明暗）を見る時、彼が「私」として排斥する行爲態度の中には「世の僞善や虛榮」と共に、吾々が既に告白文學の特徵として列擧した多くの事々がそのまゝに存在して居り、之を漱石は非常な惡意と誇張とを以て、毒々しく書いてゐる。しかも此等を非難する所の本體、卽ち所謂「天」の態度にも、彼のコムプレクスによる所の「遁世的傾向」、「近親愛的傾向」が認められるのである。

つまり、エディポス・コムプレクスによる、多くの矛盾した態度の葛藤に惱まされ續けた漱石は、遂に或る一部の願望を、他の部分の願望（彼がより高しとした願望、宗敎的退行的傾向）を以て非難し、屈服せしめ、そこに幾分の安定と平和を保たしめようと試みたのである。

一例をとれば、『明暗』の主人公津田は例によつて無爲徒食的の人物であつて、職はあり乍ら父親から月々の仕送りを受けてゐる。從來の漱石の態度では、かうした經濟的無獨立性を賞揚する態度こそあれ、毫も非難する事はなかつたのであるが『明暗』に於ては、この勝手な振舞を『私』の一部として攻擊する態度が見られる。かくの如く『明暗』には告白文學に於て見られなかつた意識的な批判性がある。そして小說自體の構成にも、見えすいた拵へ事や誇張がある。それは決して冷靜にあるがまゝの世間を見る態度ではない。

『換言すれば不自然は自然には勝てないのである。技巧は天に負けるのである。策略として最も効力あるものが、到底實行出來ないものだとすると、つまり策略は役に立たないといふことになる。自然に任せて置くがいゝといふ方針が、最上だといふ事になる』（大正四年斷片）

この「自然」とは「現實」の意ではなくして、山や溪や素朴な人間の生活によつて代表される所の「近親愛の世界」であつた事も、吾々には多くの點からして推察し得る。この世界を求める聲は、旣に「遁世文學」に於て充分述べられてゐるが、この場合は單に、俗界を捨てゝ一時的にも、自然の間に逃れる事を望んだ物である。之に反して則天去私文學は、さうした「素朴な自然」こそは、人間界の最も尊い、最も根本的な、又最も力强い物であらねばならぬ事を主張する、總ての人、全ての物が之に從ふべき事を主張する。この點に於て遁世文學よりは一段と積極的である。

右の如き目的を以て『明暗』に對したに拘らず、漱石は其の執筆を非常な苦痛として嫌惡し、その爲に每日の午前は小說を書くと、午後は遁世的な漢詩ばかりを書いて暮したのである。之は甚だ不思議であらねばならな

い。

「僕は不相變『明暗』を午前中に書いてゐます。心持は苦痛快樂、器械的、此三つをかねてゐます。夫れでも毎日百回近くもあんな事を書いてゐると、大いに俗了された心持になりますので、三四日前から午後の日課として、漢詩を作ります日に一つ位です。さうして七言律です。中々出來ません。（五年書簡）

これに關して、吾々は次の様に考へる事が出來る。卽ち、「則天去私」は單に石漱の信じた願望的哲學であつた現實に對し、又は他人に對して强硬に主張すべき根據を持たない物であつた。故にそれは漱石が口では輕蔑した現實の爲に、稍もすれば壓倒され勝ちであつた。

現實は天を以て解決さるべく、餘りに複雜であり、力强い物であつた。彼が『明暗』に於て、輕蔑すべき現實の種々相を書き乍ら、却つてその爲に不快を感じ、これらを彼の信念に從はしめる事の困難を思つた。彼の則天去私は「自分を圍繞する全ての物が、則天去私であらねばならぬ、否あつて貰ひたい」といふ幼兒的空想であるに過ぎず、之を現實に於て客觀的に主張し得る物でない事を自ら悟つた爲であらう。

小說は俗でいやだ、と云つて漢詩を作る彼の心理は、か丶る物であつたらう。彼にとつては、世を動かし得べき小說よりは、自分一人にしか判らない漢詩の方に、興味があつたのである。されば『明暗』に於る漱石は、その筆致こそ衰へては居らぬが、他のあらゆる點に於て、特に小說を書く熱度に於て、著しく低下してゐる。

要するに、則天去私文學「明暗」は、藝術的價値から云つても、又他の方面から云つても、世間が其の名を畏敬する程に、重大なものではない——と吾々は考へてよからう。

十、結　語

今や漱石の文學を結論すべき時が來た。吾々は彼の文學に於ける道程を、簡略に辿つて見よう。

幼時の環境の爲に、漱石は終生情算し得ぬ程に强烈にして複雜なエディポス・コムプレクスを持つた。その葛藤に惱まされた彼は、十歲前後からして、强い藝術的衝動に驅られた。それはエディポス的願望充足（懲罰的逆願望を含む）と共に、エディポス期以前への退行を目標とする物であつた。明治三十年代の英文斷片の中に、彼はかう說明してゐる。

”Some fealings . . call to me, like melodies sung ten fathoms under the sea. They bring me some times sorrows——forgotten sorrows. buried in

far off time when I was not.
彼は生以前の聲を聞いたのである。又彼は云ふ。「情を働かして生活したい。知意を働かせたくないと云ふのではないが、情を離れて活きて居たくない、と云ふのが我々の理想であります」(四十年文藝の哲學的基礎)

右の目的の爲に、彼は先づ之を學問に求めたが、彼の望む物は其處に得られなかつた。長い躊躇の後、彼は智的文學を創め、やがて闘爭文學に移つた。しかし闘爭によつては、現實を倒す事も、願望を滿たす事も不可能であると悟つた彼は、一方に於て遁世文學とを創めた前者は幼兒的近親愛的の世界を求むる聲であり、後者はエディポス・コムプレクスに由來する所の、感傷愛擁護と、愛慾的方面の排斥とを主張するものであつた。

次に彼の願望充足である所の告白文學が續いた、之は彼をして二三の傑作を生ましめたが、之によつて彼自身が分析された譯では、決してなかつた。彼は不快に追はれるまゝに自分にも會體の知れぬ物を、吐き出したのであつた。

「私は自分で小說を書くと、其あとが心持が惡い。それで呑氣な支那の詩などを讀んで埋め合せを付けてゐます(大正二年「傳說の時代」序)

修善寺の大患以後、彼の傾向は除々に變化を示した。それは著しく退行的となり、孤獨的となつた。彼は天に則して他を排する事を考へた。かくする事によつて、願望充足と禁制と懲罰とを同時に行ひ、且、退行によつて彼の不安を避ける事に重點を置いた。彼は『明暗』に於て之を主張しようとは試みたが、彼の小說に對する熱度は、も早や以前ほどではなかつた。「則天去私」は主張すべき物ではなく、體驗すべき物であつた。彼自らが其の中に抱かれてゐれば、それでよい物であつた。それは小說よりも漢詩によつて表現せらるべき物であつた。「小說も職業となると、出來る丈早く書いて、あとの時間を外の事に費やしたくなります」(大正四年書簡)といふ理由だけではなしに、彼は小說から急速に離れて行つた彼が更に長壽を保つたと假定しても、吾々は彼に、小說家としての未來を期待する事は、到底許されない樣に思はれるのである。(完)

漱石の傳記に關しては、本誌五卷五號の拙稿を參照されたい。尙ほ小論に引續き「漱石のエディポス・コムプレクス」「退行願望」「神經症」等の拙論が掲載せらるる豫定である。大方の御批評を賜はりたい。(後記)

シェイクスピア『ソネット集』の性心理分析（ヤング）（續）

岩倉具榮譯

自分自身の子孫によつて不死たれと勸めて見ても一向きゝめがないらしいので、ではせめて若者は詩人の句の中に不死の命を持つようにとの彼の決心と、若者への愛着的な献身とを詩人が端的に表白してゐる之等のソネットは第十八から第三十二迄數へられる。それ等の內でシェイクスピアは前より幾らか大膽になつてゐる。彼は二人の友情がかくも美しく始まつたのにそれを欺いたのはひどいと彼の裏切を責める。吾々は既に第三十三に於いて、この事の仄かに現れてゐるのを感ずるが、この事は第三十四に於いてこれよりもつと遙かに詳しく述べられその終りの所では、若い貴族の眼に後悔の淚を見て彼を許し、それ等の淚は凡ゆるものを償つたと云つてゐる。

——第三十三——

あまた度、あまた度、われはめざましき朝暾を目撃しつ。
そは王侯倣す目指をもて山嶽の頂を悦ばせ、
黃金倣す面わをもて綠の牧野に接吻し、
天の錬金術をもつてして蒼白き流水に鍍したりき、
而もまた、いつしかに淺ましき裂れ雲をして天翔り行く其が
面上に乘入らしめつゝ、
此世界を見棄つ、顏押隱しつ
そと西の方へ落ちゆきぬ。其不様なる姿を人には見せで。
正に其如く、わが太陽も、或朝まだきには、
赫々としていとも目ざましくわが額を照しつるが、
あゝ、うらめしきかな、其がわが有たりしは束の間なりき！
空なる雲は今やそを悉く遮蔽し了んぬ。
さもあれ、わが切愛は其爲につゆばかりも彼を賤蔑まず。
此世の日の曇るは理りぞかし、天つ日だに曇れば。

——第三十四——

などて君はさしも日の麗かなるべきを約束しつ、
われをして外套をも著で外出せしめながら、
不意に途上にて穢き雨雲に出逢はせて、
其腐れ靄の中に赫く御面をば隱したまへるぞや？
よしや今雲を破りつ立現れ、あらしに撲たれつる
わが此面上の雨を乾かさむとしたまふとも及ぶべからず。
何となれば、よし創を癒すも辱を治し得ざらむには、そを
何者もいみじき藥膏とは稱せざるべければなり。
君の慚羞もまたわが此憂悶を醫するには足らず。
たとひ君が悔ひ歎けばとてわが損失は依然たるなり、
蓋し凌辱者の悔恨は只微弱なる救ひを齎すのみ
強大なる凌辱の苦に悲める者には。
あゝ、されど、君の眞情が灑ぐ涙は眞珠なり。
其涙は貴し、あらゆる非行を贖ふに足る。

次のソネット第三十五で、シェイクスピアは彼にそのことについてくやむのを止める樣に云つてゐる。「人誰か誤ちなからむ―そして彼自身とてもこの點では御多分に洩れないことをかくすわけに行かない。それ故、この場合告發者側に立つて、彼は敵の辯護者として行動するだらう。彼は愛と憎しみの相爭ふ情熱に裂かれる。が、それにも拘らず彼から（その情婦を）「むごくも剝ぎつる」「可憐なる賊」（若い貴族）にくつついてゐる。

それでも矢張二人の男は離れるのが必然である。シェイクスピアはこの決心を次のソネット第三十六で非常に痛ましい言葉で述べてゐる。併し乍ら彼の使つてゐる言葉は、誤解に導きさうな色合を持つたものである。

――第 三 十 六――

われら二人は二なり、決して一ならずと言はしめよ、
よし其相愛の切なることは一にして二ならずとも。
然らばわが汚辱はわれに留まり、
君を累はさでわが身一つに負ふことゝならむ。
われら二人の愛は唯一にして二ならざれど、
二人の生活には意地わるき睽離存して、
愛のたぐひなき効果は其れが爲に變化せざるも、
尙ほ甘美なる若干時を愛の悅樂より盜み去らる。
われは最早君と相知れるが如くには振舞はざらむ、
わが歎かはしき罪の故に君を辱めざらむために。
君將た公けにはわれに禮遇を賜ふこと勿れ。
わが彼の榮譽を君の名と引離さざる限りは。
否、然なせそ。わが君を愛する心の切なるや
君をわれとしも思へれば君の令聞はやがてわが有なり。

若しもこのソネットが女に宛てられたものであつたとすれば、そこには確かに唯一つの意味しかなかつた筈である。併しそれは貴族に宛てられて居り、そして確かに

貴族の名譽は女の名聲とは大變違ふものである。例へば若い貴族が情婦を持つてゐてもそれは彼の名譽にとつて大きな汚れとはならなかつたであらう。併し乍ら　彼が自分を愛し且つ信用した男に對する裏切の行爲によつてその情婦を得たといふことが知られたなら、それは重大な汚點となつたであらう。それ故若しもその貴族がこの密通をあくまでも續けようとするなら、彼がシェイクスピアの友達であつたことをはつきり人々に知らさないやうにしておく必要がある。詩人は彼の知遇を斷ち切る樣に彼を誘ふことによつて、友情に對する裏切といふ不名譽から纔かに彼を守つてやらうとしてゐるのである。

シェイクスピアは此の若者のためにこの點で非常に骨を折つてゐる。そして、友人が自分を誤解しない樣にと　て三つのソネットをさしはさみ、その中で友人の不在中でも變らぬ献身を捧げてゐることを明かにしてゐる。それからその次に來るのがソネット第四十で、この中で情熱的な斷念を述べてゐる。こゝで詩人は Love（「愛」又は「愛人」といふ言葉を非常に違つた色んな意味で使つてゐるので、私の解釋を明らかにする爲、その場合の女に關してゐる言葉と句とには勝手ながら圈點を附しておいたが、お許しを願ひたい。

――第　四　十――

愛人よ、わが愛する限りを取去れ。然り、皆取れ。
皆取るとも、前に君が有たりし以外の何物をか得たまふべき
蓋し、眞愛と稱すべき物は、愛人よ、只一つの外はあらぬを
なべてわが有たりしを君は有たりき、此物を取添へつる前に
されば、若し（一に）わが愛の故にわが愛（情人）を領したまへるならば、
われ敢て君を咎めじ、君はわが愛を使用せるに過ぎざれば、
さもあれ曩には嫌へりし物をことさらに弄びて、
已れみづからを欺きたまはむには、咎めなき能はざらむ。
優美なる盗賊よ、われは君の强奪を寛恕すべし、
たとへ君が貧しきわれの有たる限りを盗むとも。
さもあれ、愛は知る憎惡が公けに加ふる傷害よりも
愛の（陰かに）與ふる害辱の更に大いなる苦痛なることを。
あらゆるよからぬ物をよく見定むる淫蕩なる優美（者）よ。
惡意もてわれを殺しぬ。さばれゆめ敵どちとはなるまじきぞ。

次のソネットには、若者が詩人に對して「間違ひ」を犯してゐるといふ直接の非難が初めて表れてゐる。

――第　四　十　一――

時としては我れ君の心と相離る、其時、

放埓（になつて君）が犯す可憐なる邪惡は
君の美、君の齡には甚だふさはしともせむ、
苟も君の在す處には誘惑常に從へばなり。
君は優雅なり、かるが故に言ひ寄らるべく。
君は端麗なり、かるが故に襲はるべきなり。
苟くも女の生める男性ならぬ者いかで（言ひ寄られて）
無下女を見棄てむや、其女が未だ志しを遂げざるに？
あゝ、しかはあれど君は須らく
君の美と君の若氣とを戒めて
あらぬ處に踏み迷ひつわが座を侵すことなからしめて、
二重に信を破るが如き亂行を愼ましむべかり。
しなり。

然るに、君の美は、女を惑はして其信を破らせにき、
又、われに背くことによりて、君の信をも破らせにき。

こゝで「背く」（false）といふ言葉は、詩人が愛してゐる女と密通する不實の行爲を記述するために使はれてゐる。他のソネットの所でこの若者に適用された「背く」（false）といふ言葉は曖昧であるやうだから、その爲このことが重大なのである。それはいつも同じことを意味し、又いつも同じ裏切の行爲を指してゐる。かくてソネット第九十二の最後の二行は次の樣である。

さばれ曾て汚れを恐れざるが如くに美なる幸人や誰そ？
或ひは君不信ならむ、しかるもわれはそを知らであらむ。

それ故、ソネット第九十三は、以上の關係からして、全部を引用しておかねばならぬ。

――第九十三――

されば、われは、騙されたる夫の如くに、君を信實と假定して
世を經てむ。さらば愛友の愛らしき面は
いつまでも愛らしく見えなむ、前とは變り果つたらむとも。
君の顏ばせはわれと共に在れ、君の心は餘所に在りとも。
然るは、君の目には憎惡が住むべくもあらざれば、
顏色にてはわれ君の心變りを意識する能はざらむ。
大方の人の面には其僞りの心の歷史が
氣分もて、澁面もて、奇異なる皺もて書き現はさる。
されども君の面には、天が君を造りし時に、
只甘美なる愛をのみ住ましめよと命令しつれば、
君の想ひはいかならむも、君の心はいかに動くも、
君の顏ばせは只ひとへにいみじき甘美の外を語らず。
あゝ、君の美貌はイーヴの林檎に似たりともいはむ、
若しも君の甘美なる德が君の外見に相應せずば！

こゝで吾々は最初の行で「信實」（true）といふ言葉を見出し、又最後の行では「德」といふ言葉が名譽の信條に適用されてゐるのを見出す。その信條とは紳士の間

に存在し、彼等は各自の愛する女に對してお互ひの權利を尊重せねばならぬと云ふことである。併しシェイクスピアは比喩語を用ひてゐる。彼は不實な友を不實な妻と比べてゐる。併し確かに之については何等新しいことも曖昧なこともない。男又は國民の不名譽さへも女の不名譽と比較することは、エレミヤの昔からの修辭的又討論的な手段である。

そこで今吾々は、若者に對する彼の諒言中に繰返し用ゐられてゐる四つの言葉の意味を知る。その四つの言葉とは「信實」、「僞り」、「名譽」、「德」、である。それ等は快樂を追求するロマンティックな青年としての彼の行爲に對して用ゐられてゐるのである。その青年は勿論、非常な放逸を許されてはゐるが、友人に對する裏切は許されてゐない。多くのソネットでシェイクスピアは彼に警告を與へ、その身を謹んで名譽ある名前にその樣な汚點を殘さない樣にせよと云つてゐる。その一例はソネット第五十四の最初の二行に見出される。

美しきものゝ美しさが、いかにいやまさりて見ゆるぞや、
誠實てふめでたき裝飾の其美しさに添はれる時には

或はソネット第六十九の最後の二行にも見られる。

されど何が故に君の色と君の香りとが相應せざるにや？
其解は（他なし）君が衆と共に生ふる故なり、

又、ソネット第九十四の最後の二行にも見られる。

こよなく甘き物も振舞ひによりてこよなく苦きものともなれ
腐れる百合の香は雜草のそれよりも堪へがたかり。

ところで我等の論旨に戻らう。這般の正確な消息はソネット第四十二の最初の四行に極めて大膽に示されてゐる。このソネットの爾餘の部分は今日分析者間に「逃避の機制」として知られてゐる心理を幻想的に美しい言葉で表現したものである。

——第四十二——

君が彼女を得つることは必ずしもわが痛恨にはあらず。
されどもわが彼女を深愛せしことは實なりといはむ。
彼女に君を奪はれし事こそはわが主なる悔恨にして、
われをして愛に於る損失を一層近接に覺えしむ。
さばれ親愛なる犯罪者らよ、われは斯く（辨じて）君らを恕せむ。
「君が彼女を愛するは（畢竟）わが彼女を深愛するを知ればなり。
彼女のわれに不貞なるも亦た同じくわが爲にすなり。
わが爲にわが友をして其（の心）を試さしむるに過ぎず」と。
われ君を失はむか、わが損失はわが愛婦の利得たるなり。

われ彼女を失はむか、其損失はわが友の拾得たるなり。
二人ながら互ひに得る所あり。然れどもわれは雙つながらを
失ふ。
すなはち、二人はわが爲に此十字架（大苦痛）をわれに負は
しむ。
さばれ喜ぶべきは、われとわが友とは同一なれば、
彼女は只われをのみ愛するなり。あゝ、甘き諛言（自欺）
や！

之を「黑婦人」に宛てられた一聯のソネットの內第百三十四と比べて御覽なさい。

――第百三十四――

さて斯く彼女が君の有たることを、又わが身將た
君の意のまゝの抵當品たることを自白しぬる上は
わが身を沒收せらるゝことを厭はざるべし、
せめてもの慰めに第二のわれを返したまはゞ。
さばれ君は返さゞるべく、彼も免れむとせざらむ。
君は貪る心深く、彼は情け厚ければなり。
彼が署名は、只わが保證人たらむ爲なりしに、
其證文の爲の故に、君は厳しく彼を縛りて、
彼を君が美貌の擔保として取立てむとす。
あゝ、君は高利貸ぞ、物皆を利子扱ひにして、
わが爲に連帶者となれる友をさへに告發す。
斯くてわれは彼を失へり、わが虐遇の連累に。
われは彼を失ひ、君は彼をもわれをも得つ。
彼は全部を支拂ひぬれど、われは尙免れてあらず。

之等の二つのソネットは丁度同じ瞬間に於る同じ心理狀態に關係して居り、それはシェイクスピアが遂に自ら屈服して事實を受入れた時である。これ等は疑ひもなく同時に、一つは男に對し、他は女に對して書かれたのであつた。吾々は既に二つのソネット群が並行して居り時間的に前後して書かれたものではないといふことを注意しておいたが、こゝにその證明がある。もし第二群のソネットに就いての幾分の知識がないと第一群のソネットはこれを讀んでもわけが分らないといふ點は銘記せられねばならない。

それ等のソネット群は、實は私が主張する樣に密接に聯絡してはゐないと反對する向きもあるかも知れない。それの多くは一見、場合々々の氣分によつて生れて來た單なる偶然の作であるやうに見えはする。或るものは極めて月並的で、たゞ次々とソネットを配列する上の單なる裝飾として挿入せられたに過ぎぬのかも知れぬ。確かに之等は右に概說して來た心理狀態に觸れてはゐない。私は凡てこれらのことを承認するが、それを重大だとは見做さない。それらのソネットが皆、詩人が種々力强い

相葛藤する情熱の支配下に於いて詩人の作つたものだといふ事實に變りはないのである。詩人がこの物語を偶然的の間劇で飾つたといふことは、少しもその趣意に變化を及ぼすものではない。

詩人に關する何事にも特別の關心を持たないやうな生き方をするのはこの若者の一般的放縱さであるとてそれに對して所々でシェイクスピアは抗議してゐるのだと云ふことを、多くの註釋家たちは假定してゐる。併し果して何故にさうだらうか。彼自身の生き方としても、彼が云ふ樣に、非難すべき點がなくもなかつた。放縱な生活者は一種の假面としての身振をするのでなければ、お互ひを改めようとはしないのがその習ひである、そしてシェイクスピアは確かに、何等假面をつけなかつた。否、彼は確かに、自分の反對する行爲に全く耽りきつてゐた。同時に、もし彼がこの若者に就いて難じてゐる惡德を彼自身が行つてゐるとしたら、彼はその惡德的なやり方に就いて彼を蔑むと云ふ皮肉な撞着を敢てすることも出來たであらう、で、正しい道に歸るやうにと懇望する矛盾した揶揄は詩的創作の意圖を越えてゐるのである。それは不合理である。そしてこの不合理に照して吾々はこの樣な考へを色付ける二三の句を更に考へて見よう。ソネット第五十七と第五十八とは確かにそのやうに解釋することも出來よう。それ等は共に、詩人が自分の情婦と貴族とが懇にしてゐると想像して堪え難い嫉妬に苦しんでゐるところを、非常によく、今までのものよりはもつともつと合理的に察知せしめるのである。

——第五十七——

和君の奴なるからに、われは、二六時中只一つに和君の欲したまふまに〱陪侍せむのみ。
われには費消すべき貴重なる時間とてもなく、
又、なすべき勤めとてもなし、和君が命じたまふまでは。
又、わが大君よ、われは君の爲に時計を見守れる限りは、
いつ果つとも知らぬ刻々をさへ敢て呪はむともせざるなり。
又、相見ることを得ぬ心苦しさをもわれは敢て苦しとせず、
臣僕たるわれに君が口づから「さらばぞ」と言ひ渡したまへるからは。
又、敢てしふねき疑念を抱きて、君は今いづこに在す、
そも何事をかなしたまへるなどを穴繰らむとも、想像せむともせず。
否、憫れなる奴らしく後に殘りゐて、只一つに思ふのみ、
君の在すあたりの者らの、如何に君の御庇にて、幸福なるべきかを。
愛はさしも忠實なる愚か者なれば、いかなることを
君が物したまふとも、君の意志なるからは、あしとも思は

ず。

——第五十八——

初めわれを和君の奴とならしめる神よ、ゆめ〳〵なからしめよ、
苟くも、君が享樂に過さむ時を、わが制限せむと考ふるが如きことを、
もしくは時間の精算を御手づから示し給へなどとわが要求するが如きことを。
われは君の臣僕にして、只一へに君の間暇に侍すべき身なれば？
不羈なる君が直去自在に、不在なる間は是れわが監禁なり。
されどわれは其監禁を忍ばむ、たゞ命是れ奉ずるわれは。
受苦に馴らされたるわれは、あらゆる非難に堪えて、
いかに侮辱したまふとも、君を咎むることなかるべし。
いづこに在さむもまゝなり。君の自由は大いなり。
欲したまふまゝに時を費したまふ特權あるなり。
何をなしたまはむもまゝなり、みづから犯せる罪を
恕することの能否、一に君の手に屬すればなり。
われは只待たむのみ、待つは地獄（の苛責）なれども。
君の享樂を咎めざらむ、よけくもあれあしけくもあれ。

之等二つのソネットは、如何にもある女尊家が會合の約束を守らなかつた或る女に宛てゝ書いたかの様に始めの程は書かれてゐる。併しながら、何れも終りの方になると、それ等は嫉妬の詩であつて愛の詩ではないといふ十分な内的證據が現れてゐる。それ許りではなく、又之が私の意見の重大な一點であるが、之等二つのソネットは愛の詩だと解釋すれば、尊嚴がなくなる。たとへ女に宛てられたとしても、それ等は威嚴を持つてゐない。シェイクスピアは凡ゆる人にもまして、人間の情熱に威嚴を與ふべき道を心得てゐた。で、このやうな威嚴のない苦惱に就いて之等二つのソネットを彼が書いたであらうとは想像出來ないのである。それのみならず、彼の本當の考へは大變短かく完全にはつきり次のソネットに於いて窺はれる。

——第六十一——

心たゆまるゝ夜もすがら、君の面影の爲の故に、
眠たきわが目をふさがしめぬは、君の意志なりや？
君はわが睡眠の安からざらむことを望めりや、
君に似たる影にわが目をば愚弄せしめて？
はるかに離れて在しながらわが所爲を窺はせむとて、
君は君の精神をわが許へ遣はしたまへるにや、
わが如何に時を、恥づべく空に遣しつゝあるかを知らむとて
是れすなはち君が狐疑の要旨にして眼目なりや？
あゝ、否？　君の愛は量はゆたかなれど、質は大いならず。

若し夫れわが目をして塞がしめざるはわが愛の切なる爲なり
わが愛が眞實なる爲なり、眠りの安靜を破りてわれをして
常に君のために寢ず番の役を演ぜしむるは。
　君のためにわれは寢ず看守る、君がわれを遠く離れて
　仇し處にて仇し人らをいとも近づけて起きて在す時に

「他し所にて他し人らをいとも近ふ近づけて。」それは如何にも慘ましいことで、若者は黑婦人に近ふ近づいてをり、而も詩人はそれについて一人で苦しみつゝ目ざめて輾轉反側してゐなければならないのである。

ソネット第九十五と第九十六とはもつと曖昧に書いてあるやうだが、二篇とも異常に美しいもので、それ等の主題は全く同じである。

――第 九 十 五――

あゝ、君は汚辱をだにいとゞ愛しくこそ見えしめたまへ
かぐはしき薔薇(の中)に潜みて、今しも蓄みそむる
君の御名の美しさを汚す青蟲の如き汚辱をも?
あゝ、君は如何なる甘美なる物をもてか君の瑕疵を包みたまへる。
君の過ぎ來しかたを物語る(世人の)其舌も
君の耽溺をみだりがはしき語をもて評しながら、
其誹謗をして遂に一種の讚美たらしめずばあらずかし。
君の御名を揭ぐれば、惡評をだにも神聖ならしむるなり。

あゝ、何といふいみじき館をば得たるぞや其惡德らは、
彼等の住ますべき處として君を擇びつる其惡德らは
そこに在れば「美」の面帕があらゆる汚さを掩へれば、
目の見る限りのすべてを美しくこそ見えしむれ。
　心せよ、愛友よ、此大いなる特權を使用することに。
　こよなく堅硬なる小刀も、惡用すれば其刀を失ふ。

――第 九 十 六――

或者はいふ、君の瑕瑾は血氣なりと、或者は放逸と、
或君はいふ、君の美所はうら若さに伴ふ無邪氣の戲れと。
(要するに)美所も、瑕瑾も、共に上下大小(の人々)の愛着する所たり。
君は、君に參する者には、瑕瑾をも美所と思はしめたまふ。
高御座に在する女王の指に在るときには、
いとゞいやしき寶石もいといみじう思はるゝが如し。
正に其如し、君が過失は正しきものに變へられて、
正しかる物としての見られもし考へられもすなり。
あゝ、かの殘酷なる狼が如何ばかり多くの仔羊を陥れむ、
彼れ若し其面を仔羊の如くに變へ得べくば
あゝ、如何に多くの凝視者をも君が誘惑し得ざらむや、
君にして若し君が美の全力を用ひたまはむには
　されば、然なせそわが君を愛することの切なるや
　君をわれとも思へれば、君の令聞はやがてわが有なり。

確かに、若しも之等の各行が愛人からその情婦に寄せられたものであるならば、それ等は、最高度にまで高められたる毒を含んだ不義にして不確な情熱に附きものゝ狐疑と恐怖とを表現してゐるのであらう。併しそれ等は一人の貴族に宛てられて居り、そして年上の男によつて彼の大變愛する若者に向つて此の樣に書かれてゐるならば、それは如何にいよ／＼美しくなることだらうか。その若者は美と優雅と貴族的魅力とを持ち、そして彼の友人となり、戯曲家としての彼の經歴に出來るだけ援助し、又彼の偉大な名聲と輝かしき婦人關係とを「黑衣の僧」の如きみぢめさに引き落しかくて詩人の愛する女をそゝのかす重大な侮辱を犯して了つたのである。シェイクスピアは若氣の情熱とその無思慮な殘酷さと利己主義に心を引きさかれるが、彼は本當に友人と喧嘩することは出來ない。彼はその女が無價値なことを知つてゐる。彼は敵のために辯解したり許したりして自分の悲しみを隱してゐる。遂に長年たつてから、又私が後に論ずるもう一つの危機が過ぎ去つて、後に彼はソネット第百十六を物し、それに於いて吾々の知る限りの愛の最高の理想化を與へてゐる。

確かに女に對する男の、又は男に對する男の愛の、何れにしてもかくも美しいものはあり得なかつた、單にそれが吾々の多くには及びもつかないものであるからとてそれを「正常の型ではない」に違ひないと考へるのは、全く餘りに詭辯である。（未完）

前號正誤表

頁	行	誤	正
一二	一四	エイスマン	ユイスマン
二一	一五	オーフェリア	オーフィリア
四〇	一九	をれ	を吳れ
同	二〇	保存し吳な	保存しな
四七	下七	主社會	主に社會
八五	上四	立たぬ	立たね
八五	下二一	水結	水に
同	下二二	物が	物の
同	同	性的に	性的結
一一二	下二三	發達	發迭

『ハムレット』の分析鑑賞（一）

大槻憲二

一、『ハムレット』分析の文献

シェークスピヤの四大悲劇の中、『ハムレット』を除く他の三作、卽ち『リヤ王』、『マクベス』、『オセロー』に就いては、私はこれまで前後八回に亘つて『藝術殿』誌上に論じて來たが、こゝに最後に、最大の悲劇『ハムレット』を對象として見たい。私がこの作の研究を最後に廻したのは、一つにはこの作が既に西歐の諸分析者に依つて至れり盡せりの分析を試みられ、私にまで獨創的研究の餘地が殘されてゐないやうに思はれたからでもある。實は存外さうでなかつたのだが……。

『ハムレット』を對象として分析研究を試みてゐる西歐の學者は、まづ第一にフロイドであり、次に英國の分析學者アーネスト・ジョーンズ（Ernest Jones)があり、最後に、オーストリーの分析學者オット・ランク（Otto Rank "Der Künstler" 1925)がある。フロイドの『ハムレット』論は、彼の名著『夢の解釋』（一九〇〇年）の中に收められてゐるが、そこでは、ギリシャのソフォクレースの悲劇『エディポス王』と比較して兩者が共に父殺しの悲劇である所以を明かにしてゐるのである。併しフロイドは後年更にドストイェフスキーを論ずるに際し彼の『カラマゾフ兄弟』を捕へて、『エディポス』と『ハムレット』とこの作とは、世界文學史上の三大父殺し文學であると論じてゐる。つまり、フロイドは二ケ所に於いて『ハムレット』を論じてゐるのであるが、そのより重要なるは、前者卽ち『夢の解釋』中の言及である。後者は、私の譯が雜誌『精神分析』昭和九年五月號に收められてゐるが、前者に就いては、長谷川誠也氏の紹介（同

氏著『文藝と心理分析』昭和五年春陽堂版）及び新關良三氏の譯（『夢判斷』昭和五年アルス版）がある。長谷川氏の論文は單にフロイド說を紹介してゐるのみならず、フロイド說に基いて試みられたジョーンズ說をも殆どそのまゝに紹介してある。ジョーンズ說は、彼が英國人であるだけに自國の文學中の最大傑作を對象とすると云ふ民族的責任感も手傳つてか、なか／＼行屆いて細緻に組織的に論究してある。

そのやうな次第であるから、『ハムレット』分析の外國文献としては、その紹介の殘つてゐるのは、ランク說だけであるが、ランク說とても畢竟するに、フロイド說を敷衍したものに過ぎない。たゞ彼の獨創性は、その『劇中劇』の重要性を强調してゐる點に存するので、私はこゝに大體ランク說に基き――と云つてもそれはたゞ劇中劇の場の重要性を强調する點などであるが――自分の多少の獨創的管見を述べて見たいと思ふ。

併し、それにはまづ、フロイドの『ハムレット』論なるものが、大體どう云ふものであるかと云ふことを、讀者に知つておいて貰はなければならない。本誌の讀者諸氏がみな長谷川氏の紹介を讀んでゐられると云ふことは待期し難いことであるから、私はフロイド說をこゝに改めて（新關氏譯とは別に）フロイド原書全集第二卷二六七頁から譯出して見たい。

「『エディポス王』と同じ土壤に根ざしてゐるのは、今一つの偉大な悲劇的作品、シェイクスピヤの『ハムレット』である。併し同じ材料を別々に取扱つてゐるところに、相互に甚だしく隔つてゐる二つの文明的時期に於ける精神生活の相違が――人類の感情生活に於いて抑壓が幾百年を隔てゝ如何に進步するものであるかゞ――完全に覗はれる。エディポスに於いては、根柢に橫はる幼兒的願望空想は、夢に於ける如く、明白に知覺されてゐるが、ハムレットに於いては、それは抑壓せられたまゝになつてゐるので、我々はそれの存在を――神經病者の場合に於けると同じ具合に依つて――たゞその空想から出發する禁制の作用に依つてのみ、知るのである。この主人公の性格が全く不明瞭であるのに、この近代戲曲が壓倒的に効果を及ぼし得るのは抑々偶然でないのだ。この作品は、ハムレットが自分に課せられた復讐の責務の履行を遷延させることの上に構成せられてゐる。その遷延の理由なり動機なりの何であるかは、本文に告白せられてない。またこれまで色々に解釋を試みた向きもあつたが、何れも肯綮を得てゐない。ハムレットは新鮮な行動力をあまりに豐かな思考活動の發展のためにそいで了つた（「蒼白い憂慮に白ちやけ……」た）型の人間を表はす

ものだとする考へ方はゲーテに基くのだが、この考へ方は今日もまだ勢力がある。その他の人々の考へ方に依ると、詩人は、神經衰弱の領域に陥りつゝある、病的な、無決斷な性格を描かうと試みたのであると云ふ。併しこの作品の脚色から見ると、ハムレットは決して行動一般に無力な人物とも我々に見えない。我々は彼が二度、行動的に登場したのを見る、一度は、彼が垂幕の背後に立聽きする者を認め、非常に激昂してこれを突倒した時であり、今一つは、計畫的に、否寧ろ狡猾なほどに如何にもルネサンス時代の王子樣らしい大膽さを以て、自分の陥されるべき死の運命に、自分を送つて來てゐた二廷臣を陥れて了つた時である。して見れば、彼の父の亡靈が彼に課した復讐の大任を果すに彼を躊躇せしめたものは何であらうか。この疑問を解くためにはやはり、この任務の性質が特殊であつたと云ふことを考へねばならぬ。ハムレットは如何なることでも爲し得るのだ。が、たゞ、彼の父を亡きものにし、父の代りとなつて母の側に居る人に對して、つまり彼の抑壓せられたる幼兒的願望を想起せしめた人に對して、復讐をなすことだけが出來ないのだ。彼を驅つて復讐に赴かしむべき憤りは、彼にあつてはその代りに自己批難となり、良心の苛責となり、それ等の批難と苛責とは彼自身に向つて、お前自身はお前が罰しやうとしてゐる罪人よりも少しもよくはないのだぞと（言葉として理解せられたとすれば）云ひ聞かせてゐたのだ。右は私が主人公の精神に於いて無意識のまゝであらざるを得なかつた考へを意識に移して見たのだ。ハムレットをヒステリー患者であると云はうとする人があるならば、それは私の解釋の歸結としてのみ私は承認することが出來る。ハムレットはまたオフィリヤとの對話に於いて性的嫌惡を表明するが、この嫌惡がまた以上の見解とよく一致する。さうしてこの嫌惡はまた詩人の精神中にその次の數年間に愈々根を張り、『アテナのタイモン』に於いてその頂點に達することになつたその嫌惡であつた。我々がハムレットに於いて見るところのものは、勿論たゞ詩人自身のものに外ならなかつたのだ。ゲオルグ・ブランデスの『シェイクスピヤ論』（一八九六年）に依るとこの戲曲はシェイクスピヤの父の死（一六〇一年）の直後に、つまり父の喪に入つたばかりの時に、父に關する幼兒的感情の（敢へて云ふ）復活した時に、書かれたものである。また周知の如くシェイクスピヤの早世した息子はハムネット（Hamnet. Hamlet と酷似）と云ふ名であつた。ハムレットが息子の兩親への關係を取扱へてゐるやうに、製作年代から云つてそれと近接して出來たマクベスは子供のないと云ふことが主題になつて

ゐる。あらゆる神經病的症候が、否、夢さへもが、二重三重の解釋の餘地ある如く、あらゆる眞の文藝作品は一つ以上の動機から詩人の精神中に於ける一つ以上の感激からなされるものであり、從つて、一つ以上の解釋が許されるのだ。私はこゝではたゞ、創作する詩人の精神に於ける感激の最深層の解釋を試みたに過ぎないのだ。」

二、ハムレットの復讐衝動と自己批難との關係

精神分析學で云ふエディポス・コムプレクスなるものを十分に理解せられてゐないかも知れない人々に對し、以上の說明がどの程度にまで精神分析學的なハムレット觀を傳へ得るかは疑問であるが、併し只今は精神分析學の根本命題を解說してゐるべき場合ではなく、斯學の見地からのハムレット研究が目的である。我等は讀者が以上の說明に依つて旣に大體に於いて精神分析的ハムレット觀を理解せられたものと想定して、更に細かい論證と考究とに這入つて行かうと思ふ。その間に、諸君の疑問を解決し、不明とせられる諸點を闡明するかも知れないからである。

アーネスト・ジョーンズに依れば、ハムレットにとつては（詳しく云へば、彼の無意識にとつては）三人の父（先王ハムレット、叔父クローディアス、侍從長ポローニアス）があつたことは、丁度『ジューリアス・シーザー』にとつて三人の息子（ブルータス、カシアス、アントニアス）があつたのと同じである。換言（詳言　すれば、父王ハムレットと叔父クローディアスと侍從長ポローニアスは彼の無意識に依つて混合せられつゝ、別々の感情の對象となつてゐた。元來は單一の對象（實父）に對して抱かれてゐた相互に矛盾した三種の感情であつたのだが……。今は亡くなつて自分の競爭者としての地位を完全に放棄してゐる實父に對しては心からなる尊敬を、實父の代りとなつて母と政權とを、壟斷してゐる叔父に對しては憎惡と恐怖とを年齡に於いては父親格ではあるが人格と才能と智力と地位とに於いて自分より低いポローニアスに對しては嫌惡と輕蔑とを、それぞれに抱いてゐた。ところで、彼はその實父の亡靈から、自分を暗殺したものはクローディアスであるから、その復讐をしてくれとの依賴を受けた。併しこれは必ずしも亡靈の告知と云ふ極めて不自然な（劇的ではあるが）形で知つたとしなくてもよいのだ。何か他の方法で確知したとしてもよいのだ。彼が躊躇逡巡してゐるのは亡靈と云ふ賴りないものから告知せられたゝめ、事實か否かを確めて見なければ分らないと考へたためではないのだ。彼は劇中劇と

云ふ『鼠おとし』に依つて王の本心を觀破したばかりかその密室に於いて罪を懺悔し呟いてゐる叔父の姿を見てさへも（確證を掴み得た後でさへも）言を左右に托した敢へて復讐しようとはしないのだ。最後に、自分も死にかけて（彼の無意識にとつては、懲罰を受けかけて）始めてその仇に復讐することが出來たのだ

その間、彼の復讐的攻擊慾は、正當な對象（叔父）に向はずして何處に向つてゐたのであらうか。第一は自分自身にである。第二はポローニアスにである。

ハムレットの自己批難は相當酷烈を極めてゐる。彼は第一幕第二場に於いて自殺願望を告白し（「おゝこの硬き剛き肉が、何とて溶けとろけて露ともならぬぞ！　せめて自殺を大罪とする神の掟がなくばなあ！」云々）、第二幕第二場に於いて自己と人類一般とへの幻滅を語り（「世界の花とも萬靈の長とも思ふ此の人間！　その人間が予にとつては、只の塵埃ぢや！」云々「徒らに因循し　予を悪漢と呼ぶのは誰ぢや？」云々。）、また第三幕第一場に於いて「予などは隨分正直な生得ぢやが、母御が生んでたもらなんだならばと怨めしう思ふ程に、高慢で、執念深うて、野心が激しうて、自身で許しさへすれば澤山惡事をもしかねぬ、たゞそれを調整する思案とそれに像を附くる想像とそれを行ふ時と場合とがないばかりぢや。天地の間に匍匐る予のつれのものが何事をか能せうぞい。人は悉く怖しい悪漢ぢや。……」云々とまで極言して自分の罪障を難じそれを人類全般に及ぼしてゐる。これ即ち、自分と他人（叔父）や母が同罪であることを認識し告白してゐるのでなければならない。この同罪であることの認識は叔父の罪過に依つて觸發されて已れを自覺するやうになつたゝめと解しなければなるまい。

このやうに自分自身を批難してゐるものにどうして他人を批難（懲罰復讐）する餘力があらう。彼はまたしても自己を督勵するために、宮中で演劇を行はせて叔父を試したり、母の寢室では父の亡靈を呼起したり（彼自身の幻覺過程として見て）してゐる。さうしてなけなしの對他的憎惡を發散させたのが、僅かにポローニアス殺しとなつて結果してゐるが、併し元兇叔父にはまだまだ及びもしなかつたのである。ジョーンズの云ふやうに、彼は同罪者である自分自身を殺すことになつて、甫めて叔父に復讐の刄を加へる勇氣が出來たのだ。

三、ポローニアス一家の心理的關係

ポローニアスがハムレットにとつて父の俤であることは、作者に於いても十分の用意があつたと思はれる。それはジョーンズやランクも指摘してゐるやうに、ポロー

ニアスが嘗て大學で演劇を演じ、その時ジューリアス・シーザーに扮してブルータスに殺されたと云ふことを作者が語らしめてゐるに徴して明かである。ブルータスが自分の父シーザーを殺した如く、ハムレットはその父代償ポローニアスを殺したのだ。彼はこれに依つて叔父を殺したつもりでゐたのだ。それ故に彼は垂帳の蔭を覗き見る前に「今のは王（叔父）か？」と叫んでゐるのだ。一瞬前、叔父王が懺悔の祈禱をしてゐたのを見屆けて來たハムレットであるから、これが叔父王でないことは彼には分り過ぎてゐるのだとランク云つてゐるが、或はさうかも知れない。然るに、只今刺殺した手應へのあつた相手を「王か」と叫んだのは「王であればよいのに」と云ふ意味であると解することも出來る。

讀者は、ポローニアスが大學に於いてシーザーに扮してブルータスに殺されたと云ふ話を只偶然の話と見ようとせられるかも知れない。この話にハムレットとポローニアスとの關係を暗示するものと思ふのは、分析者の法外な穿鑿であると思はれるかも知れない。併し私はシェイクスピヤがその作を構成するに實に驚くべき綿密な用意と周到な注意とを以てしてゐると云ふ事を斷言することが出來る。それは私が從來試みて來た彼の作品の分析研究を讀み直して頂ければ自ら首肯して頂けることゝ思ふが、なほこゝにポローニアスに關して類似の場合を指摘することに依つてその一證に代へたい。それは第二幕第二場に於いて ハムレットがポローニアスをエフタに擬してゐる條である。

ハム「あはれ、エフタ。イスラエルの士師 てもおぬしは見事な寶物をお有ちやつたのう！」
ポロ「どのやうな寶物を有ちをりました？」
ハム「はて……花の娘を只一人、又なき者とめでけるが」
ポロ（傍を向きて）「相變らず娘が事を。」
ハム「なう、エフタの叟よ、何とさうであらうが？」
ポロ「小官をエフタと呼ばせらるゝか、いかさま小官娘をば一人持ちをりまする。はい、又なきものと愛でをりまする。」
ハム「いや、さうはならぬわ。」

こゝに出てゐるエフタと云ふのは舊約聖書の『士師記』第十一章に出てゐる人名で、彼はボレアデのためにアンモンの子孫と戰ふ時、エホバに誓願を立て、「汝誠にアンモンの子孫をわが手に付したまはゞ我がアンモンの子孫の所より安らかに歸らんときに我家の戶より出てきたりて我を迎ふるもの必ずエホバの所有となるべし、我之を燔祭となしてさゝげん」と叫ぶ。やがてエフタはエホバ

の助けによつてアンモンに勝ち、わが家の方に歸つて來ると、その一人娘が鼓を執り、舞ひ踊つてこれを迎へたそのためにエフタは娘をエホバに捧げ、娘は遂に男を知ることがなかつたと云ふ話である。エフタが自分の都合のために娘の性生活の幸福を失つて了つたやうにポローニアスも自分のおせつかいのためにオフィリヤの戀を遮つてしまつたと云ふ意がそこに寓せられてゐることは何人も否定することは出來ないであらう。その點からもポローニアスはハムレットにとつて惡父であることは丁度クローディアスが母の愛をハムレットから奪つてしまつて惡父となつたと同じである。シェークスピアはその挿話や固有名詞を作中に導入するに常に十分な用意を以てしてゐるのであつて、決して偶然の思ひ付きや出鱈目でするのでないことは、次に私が細々と論ずる内にまた自ら明かになつて行くであらう。

このやうに、ポローニアスはハムレットにとつては惡父であつたが、その子レーヤチーズやオフィリヤにとつては善父であつたのだ。さうしてその善父を殺したハムレットはレーヤチーズとオフィリヤとにとつては正に惡父となつたのだから實に皮肉である。この曲の最後の場面は實に二重の意味の復讐となつてゐることを忘れてはならない。さうしてこのレーヤチーズの復讐慾を利用し自分への「楯」としてハムレットに當らしめようとしたのはクローディアスの狡計であつたのだ。

オフィリヤにとつては、このやうに、ハムレットは善父ポローニアスの代償としての愛人であると共に、反面においては善父殺しの惡父となつた。そこに彼女にとつてはハムレットに矛盾した二様の感情を抱かねばならなくなつたのであつて彼女の發狂の源因が二人の愛人（父とハムレット）を失つたにあると共に、他面においてこの第二の愛人（父代償）を敵として見なければならなくなつた心的葛藤の苦惱の歸結であつたとも見なければならない。

ハムレットはポローニアスを憎んで、連りに彼を愚弄し嘲罵してゐるけれども、ポローニアスは別に惡人ではない。彼は俗人で、お喋舌りで、ハムレットのやうな詩人的な才能や深遠な思考力や纖細な感覺を持つてはゐない。併し侍從長と云ふやうな役目を果すには、彼のやうな人物で澤山であり、また實際、彼はよくその職責を果してゐる。たゞ彼はあまりこせ〳〵と小細工を仕過ぎ、ハムレットの幸福を妨げたり彼の感情を害するやうなことをし過ぎたゝめに（例へば、ハムレットに自分の娘を放つて垂帳の蔭から様子を窺つたりするやうなことをし過ぎたゝめに……）ハムレットの神經をいら立たせ、憎

まれるやうになつたことは、蓋し已むを得ない。

　ポローニアス一家には父と兄妹と三人のみで、母は居ない。母はいつ亡くなつたとも曲中には言及せられてゐないが、かゝる關係に於いて、オフィリヤが父と兄との兩方から愛の對象とせられることは當然である。彼女の貞操はハムレットから擁護せんとした父子の感情に於いてそこに尤な現實的理由の存することは認められるにもせよ、なほ如何なる他人にも彼女を與へたくないと云ふ利己的感情が二人になかつたとは云へないやうである。作者がポローニアスをエフタに擬してゐるところを見ると、作者に於いてさう云ふ心持の存したことは否定し難いのでなからうか。また墓場に於いて、オフィリヤの遺骸を中においてレーヤチーズとハムレットとの間に愛の鞘當てのあつたところを見ても、レーヤチーズにおいてハムレットへの競爭心、排撃心のあつたことは、これまた否定し得べくもないであらう。

　オフィリヤが父のためにその愛人ハムレットから引離され、またハムレットのために幼兒愛的對象たる父を奪はれ、兄は國外に旅行して身邊に居らず、そのリビドー纒綿の對象を悉く失つた時、精神病の定石的心理過程をとつて、その愛人の一方（ハムレット）に無意識的に同一化して發狂（彼女はハムレットが本當に發狂したものだと思つてゐた）し、他方、意識的には父を追慕してゐたとランクの論じてゐるのは、流石に鋭い見方であると思ふ。彼女が發狂に於いて色情的なことを口走つてゐるのは、父兄からその性的活動を禁斷されたゝめであるとランクの云つてゐるのは云ひ過ぎであるとしても、少くとも發狂はそのリビドー壓力から遁れるための一つの逃避的方法であることは、大抵の婦人精神病者に就いて云ひ得ることであるかも知れない。

四、劇中劇の場の重要性

　以上、論じて來たやうに、ハムレットの復讐衝動は一方自分自身に向つて自己批難と云ふ形で三分の一程解消せられ、他方、ポローニアスに向つて更に他の三分の一ほどは解消せられ、更に第三には、劇中劇の催しとなつて最後の三分の一が解消せられてゐたと見ることが出來る。人間は屢々、現實生活に於いて行はうとして行ひ得ざることを、夢に於いて空想的に代償的に行つて濟ませておくやうに、藝術もまた一種の白日夢として願望充足の手段として利用せられる。ハムレットが劇中劇の試演は、『鼠おとし』として、叔父の肚を探らうとの意識的意圖があつたことは、本人も公言してゐる通りであるが、

（七〇頁下段へ續く）

ナポレオンの精神分析（イェーケルス）―承前

Der Wendepunkt im Leben Napoleon I—Lu dwig Jekels

延島英一

十二、父象徴としての國王

我々の精神裝置は、力學的原則に從つて動く。この力學的原則を明かにすると、アムビヴァレンツ的感情に於て、對立する愛憎の兩傾向が同一愛情對象に集中されるのは、否定的感情がまだ愛情によつて中和され得る間だけだといふことが分る。この中和が可能でなくなると、對象は二つに分れる。そしてこの對象の倍加と共に、不平等な割合で混合してゐる二つのリビドー的流れが生れ、それによつてあるひは肯定的、あるひは否定的度合の强い感情の全系列が作られるのである。

ナポレオンにあつては、リビドーの力が强い。從つて對立する愛憎の二つの流れを同一對象に集中することは恐らく一層困難だつたに違ひないが、しかしその過程の

あつたことは、やはり容易に觀取されるのである。我々が當面の問題の理解を基礎にしやうとするのは、この根本て精神狀態にほかならない。

ナポレオンの精神の中に、一系列のいろ〳〵な父があつたことはすぐ分る。生父シャルル・ボナパルトはしばらく論外として、先づマルブーフとパオリの二人だけを擧げて見やう。そしてこの二つの父の映像に對して當然のことながら、彼がどれほど生父の場合と同樣アムビヴァレンツ的であつたかを觀察して見たい。

パオリとの關係については、後で別に語ることゝする。こゝではマルブーフに對してナポレオンのいだいてゐた感情は、精神分析の結論する憎惡だけではないことを述べて置きたい。ナポレオンが彼にある種の愛を感じてゐたことは、立派な證據がある。ナポレオンにこの種の表

現があることは既に述べたが、こゝではシュケエに從つて、自治制以前のコルシカを支配してゐたフランスの將軍達をその文章で痛烈に攻擊してゐる彼が、その將軍の中にマルブーフを加へず、ナルボンヌ、フリツラル、シオンヴィル等の名をあげるだけで滿足してゐることに注意を促したい。しかるにコルシカ人が最も敵視したのはマルブーフその人であつて、一記念標には彼を「瀕死のコルシカに君臨した專制者」と刻してある。

しかしながらナポレオンの心內で父の影像となつたのは、決してパオリとマルブーフの二人だけではない。ブリアンヌ在學時代の徵候的行爲で明らかなやうに、國王もまた彼にとつては父の映像であつた。槪して國王は、歷史的進化によつて、人心に父として深く刻印されてゐるのである。

生涯のこの時期に於るボナパルトは、どの傳記者によつて見ても、確信的な、狂信的な共和主義者であつた。シャルロット・ロベスピエールが、彼を呼ぶに「山岳派の名を以てしたといふことは、それを證明して餘りありとせねばならぬ。またその遙か以前、彼がヴァランスでモンタリヴェ、スュシイ兩名と會見したこと、殊に彼がその仕へる王政の猛敵であつたことを示す少壯時代の著作は、彼のいだいてゐた感情について一點の疑惑だに許さない。彼は、國王の權威に關する論究」といふ論文を、次のごとき言葉で書き出してゐる。

この論文は、先づ國王の名が人心に生じた起源及その成長に關する一般的觀念から論究をはじめる……。次に今日ヨーロッパの十二王國に於て國王が簒奪し、享有してゐる權力の細論に入ることゝする。

國王の地位にあるもので、廢位に値せぬものは極めて稀とせねばならぬ。

「リヨンの演說」では、次のごとく述べてゐる。

國王の常に利己的なことは、充分世に知られてゐる。國王は人民、國家を自分で持つてゐるつもりなのである。

「祖國愛」と題するナポレオンの論文は、彼の王政憎惡の根據及性質を示すものとして、我々精神分析者にとつて極めて意義がある。それはシラキューズのディオンを純眞な祖國愛の實例として擧げてゐる點である。彼は次のごとく述べてゐる。

ディオンは鉅萬の富を有し、家は名門であり、地位は既に高かつた。彼は何が不足であつたか？　隋弱な精神の人は、それを推量もできず、また敢ていへもしなからう。彼の祖國は、專制者の下に奴隸だつたのである。その專制者は彼の同盟者であり、彼が愛し、敬

する人であつた。だがそれでも、専制者の専制者であることに變りはなかつたのである。

この文章が、私の結論と合致することは明瞭である。私はこの文章を以て、ナポレオンの父影像に對する精神的關係の反映だとするのである。否、反映以上のものだとするのである。ナポレオン自身にとつても、この文章に表現された類似は餘りにも明白に過ぎた。彼の無意識的傾向が餘りに明かに姿を現したからである。そこで彼は、形式に於ても意味に於ても正しいこの一節を、必要もないのに削除し、たゞディオンとデニスの親族關係、ディオンのデニスに對する親愛と尊敬を述べたゞけの文章を以てそれに代へたのである。マソン版に載つてゐるのは、この削除された節の第二のもの丶全文である。

ナポレオンにあつては、國王の映像が父の映像に代置されてゐるといふ假定は、以上に於て確固たる基礎を與へられたと見ねばならぬ。我々はその前に、ナポレオンの生涯に於ては、彼の幻想と現實との間に時宜を得た一致があつた――人間の運命を決定するこの二つの因子の間に珍らしい一致があつたといふ意見を述べたが、それはこの點を指したのであることを注意したい。

ナポレオンの青年時代は、ちやうどフランス大革命とぶつかつた。歴史上比類のないこの大擾亂の下では、父に對する系統發生的な憎惡が曾つて見ぬ跳梁の機會を與へられ、人心は全くその支配の下に歸したのであつた。F・ミュラーリエルは、我々とは全く立場を異にする人であるが、純粹の社會學的見地から出發して、この革命の結果、それまで不動であつた父の位置に巨大な龜裂が生じたことを述べてゐる。註

註。F・ミュラーリエル「家族」(ミュンヘン、一九一二年刊)一六九――二〇二頁。

父に對するこの一般的憎惡は、ナポレオンにも大影響を與へずには置かなかつた。當然の結果として、彼の父コムプレクスは活氣を帶び火を點ぜられ、强烈な振動を經驗せねばならなかつた、何もかもすべて父に向つて注がれた群衆のリビドーは、ナポレオンにとつて父の象徴であつた國王に血と肉を具へた實在性を與へ、生命を有する現實となつたのである。そしてナポレオンは、それまで彼の父定着に於てさへ無益な、破壞的であつた彼自身のリビドーを、新に生命を有する現實となつたこの群衆リビドーの方向に振り向けたのである。

その證據に、ナポレオンは國王に對しても、父(及マルブーフ)に對すると同じくアムビヴァレンツ的となつた。彼の心で革命的であり、反國王的なのはその半面だけであり、後の半面は革命に反對であり、國王擁護に傾

いてゐた。上に擧げたディオンに關する論文には、ディオンのデニスに對する愛情の痕跡が見られるが、この痕跡は、ナポレオンの少年時代の物語にもあると傳記者はいつてゐる。一七八〇年、彼はスールに於て「一文一揆」の鎭壓に從つたが、その時彼は、革命一般に反對する意を辛辣極る言葉で表明したとコストンは述べてゐる。その數週間の後、彼の駐屯地方オーゾンヌで同じ類の一揆が勃發した。彼はその時熱狂した民衆に嫌厭を感じ、王家呪咀の言葉に憤慨したとキルハイゼンは傳へてゐる。コストンによると、ナポレオンは、一七九一年七月十四日、新憲法に對する宣誓を終つた後で、かう述懐したといふ。

　この宣誓をする前に、私が民衆に發砲せよといふ命令を受けたとしたら、私は習慣、先入主、教育、國王の名などに驅られて、屹度その命令に從つたと思ふ。

　一七九一年六月二十日、國王の國外脱走計畫が失敗した。この失敗は、ルヰ十六世の運命を全く見込のないものにしてしまつた事件である。この事件の後で、ナポレオンはヴァランスのクラブで一場の演説をしてゐるが、その調子は極めて國王に同情的で、國王を追及してゐる宿命について、「事件の責任は、國王を深淵に陷れてゐる顧問達にある」といつてゐる。一七九二年六月二十日事件及八月十日事件を契機とする考察に於ては　彼の國王に對する同情は極めて明瞭に表はれてゐる。六月二十日事件とは、パリ郊外の民衆がチュイルリイ宮殿に闖入し、國王を冷罵し、侮辱した上、ジャコバン黨の帽子を國王にかぶらせた事件である。ナポレオンはこの時、友人のブリアンヌにかういつたといふ。

　コグリオーヌ！　賤民を宮殿に入らせるとは何ごとだ。大砲で四五百人ぶち殺せばよかつたんだ。さうすれば後は消へてなくなるさ。

　六月二十日事件の際には、彼は同情と「尊敬の意をルヰ十六世だけに表した。彼は國王の勇氣と決斷を稱讃した」と、シュケエは述べてゐる。

　八月十日事件とは、ジャコバン黨が隊伍を組んでチュイルリイ宮殿を襲撃し、禁衛のスヰス人傭兵を殺戮し、暴行を働らき、國王を國民協議會(コンヴァンシヨン)へ避難させた事件である。國王は避難先の國民協議會で王位を剝奪され、逮捕された。ナポレオンの國王に對する同情は、この時更に一層明白に表現されたのである。彼は國王逮捕の報を聞いた時、「もし自分に命令があれば、必らず國王の守護に駈けつけたと私は感じた」といつて、憚らなかつたのである。

　しかしながらナポレオンの態度は、集團の感情の制肘

を受けるのを免れない。これを考へる時、ルヰ十六世に對する彼の憎惡と憤怒が、悲劇が結末に近づくに從つて力を增し、ナポレオンのリビドーが集團と同じ方向を取り、彼の父に對する態度に固有する否定的傾向が、遂にその極端性を發揮するに至つたのは少しも驚くに當らない。一七九二年十一月上旬になると、タムプルに監禁されてゐたルヰ十六世の一身に關して、極めて痛烈な討議が國民協議會で行はれる時期が到來した。協議會の演說、例へば十二月三日のロベスピエールの演說――國王ばかりか、國王と共に權威を失墜した「王政に對する最も深刻な嫌惡」を含んだ演說のごときは。フランス全土に響き渡つたのである。

だがナポレオンにとつては、この主權者の相貌の中に、父に對する彼のすべての憎惡を特に喚起し、それを極端にまで發展させる一つの特徵があつたのである。けだし革命時代を通じて、國王が外國に援助をもとめ、外國と結んで祖國の攻擊を企んでゐるといふ疑惑は一瞬といへども國王の身邊を離れなかつたからである。國民協議會の討議で最も國王が指彈されたのは、國王が國民に刑罰を加へる目的で、その同僚、すなはち「外國の專制者」に武力干涉をもとめた點であつた。そして國王に對する裁判で彼の主罪と見られたのは、「國家の一般治安破壞の陰謀」であつた。

從つて少年ナポレオンの幻想に於ける生父シャルル・ボナパルトと同じく、ルヰ十六世は母を外國人に引渡さうとしてゐたのである。これがナポレオンの心內に强烈な反響を喚起し、その刺激が燻つてゐた父に對する昔の憎惡を煽り、それを再び烈火のごとく燃へ上らせたのは、けだし當然といはねばならぬ。

ナポレオンの宿命を定めたのは、本來的にいつてルヰ十六世の宿命であるといふのは正にこの點にほかならない。

ルヰ十六世の宿命は、二つの本質的な點に關して、ナポレオンの態度を決定し、固定させる働らきをした。次にその點を研究の對象として見たいと思ふ。

十三、國王に對する愛憎

先づ第一に、ナポレオンのフランスに對する態度がある。彼の態度は變轉を免れなかつたが、それは王家を襲つた悲劇の變遷に從つて變轉したのである。

頑强なコルシカの愛國者ナポレオンは、國王の亡命計畫が失敗するまでは、フランスの政治に積極的な關心を示したことは一度もなかつた。しかるにこの失敗を機として、彼は國民的相違と全く忘れ、その問題を憲法問題

に従屬させるやうになつたのである。ヴァランスの憲法擁護者クラブで、彼はこの時自由を熱愛する意味の一場の演說を行ひ 聽衆の大喝采を博したのである。

一七九一年七月十四日、軍隊と市民は、その忠順を國王に對してゞはなく、國民會議(アッサンブレ)を國家最高の機關と認め、それに對して宣誓することゝなつた。この時ナポレオンは、安睹の吐息をもらして「これで自分も、國民のほかに何も認めないでいゝことになつた」といつたのである。

一七九一年七月二十七日といへば、その宣誓のすぐ後で、國王の蒙つた屈辱と權力制限の印象のまだ生新しい時である。この日ナポレオンは、すなはち彼自身の言によれば、「國家問題のほか何ごとも顧ない頭腦」は、「わが身の血管をローヌ河の流れの早さで廻る南方の血」に戟され刺て、軍事委員ノーダンに一書を呈してゐる。この書はすべての傳記者が異常視してゐるものであつて、彼がフランスに對する合體の意をはじめて表明したものである。それには次の一句がある。

祖國(コルシカ)の運命と友人(パオリ)の名譽に關しては、小官は全く安睹仕り候。小官にはもはや母國(フランス)の運命のほか懸念するもの全く無之候。

ナポレオンのフランス人に對する衝動は、この時は永續しなかつた。その理由は、生父に對する强烈なアムビヴァレンツにあつたと考へられる。彼は間もなく再びコルシカ人に歸り、二ケ月の後にはアジャッキオへ戻つて前に述べた反佛行動を開始した。すなはちフランス人を驅逐する目的で、要塞を襲擊する陰謀をはじめたのである。

六月二十日事件と八月十日事件の際には、ナポレオンの同情は明かに國王側にあつた。セント・ヘレナでナポレオンは、八月十日事件についてかういつてゐる。

私は隨分數多くの戰場に臨んだが、この時のスヰス傭兵の鏖殺ほど多くの死屍の觀念を私の胸に浮ばせたのはその後一つもない。

この兩事件の後でも、まだナポレオンの心がフランス側に身を轉ずることにハッキリ定つてゐなかつたとすれば、その理由は正しく父映像に對するアムビヴァレンツにあつたに違ひない。けだしシュケエによれば、この時まだ「彼の想像は落着を得ず、彼自身の言葉でいへば、彼を惱ましてゐたからである。彼の頭にはコルシカのほか何ものもなく、彼の考へは絕えずそれに歸つてゐたからである。」彼は家族にフランスの狀態を語つたが、その言葉の調子は冷淡で、殆んど無關心に等しかつた。だから「彼を一寸見たゞけの者は、彼をパリに多勢ゐる外國

人と思ひ、たゞ好奇心の眼で事態を見てゐる人に過ぎぬと考へた」のである。彼が兄のジョゼフに「事件の結果コルシカは結局獨立するといふことが益々確實になつて來た」といふ手紙を書いたのはこの時である。この時彼はまた、陸軍省から嚴重な譴責を食つたにもかゝはらず、聯隊に歸隊しないで、十月十五日、コルシカへ歸國したのである。

だがそれからまた三四ケ月後になると、ナポレオンは國民協議會(コンヴァンシヨン)の討議に印象され、また國民協議會が十二月國王を告發した裁判の影響を受けて、再びフランスに接近をはじめてゐる。この國民協議會の討議は、彼の心内の父影像に對する否定的感情を覺醒させる强い働らきをしたのである。前にのべたやうに、この時コルシカでは政府の選擧があつた。シュケエによれば、ナポレオンはこの選擧の際、コルシカ人にフランスに同情するやうに勸告したらしいのである。

だがナポレオンがフランスに對する愛着をハッキリと、決定的にまた最後的に示したのは、一七九三年一月十八日、國王に死刑の判決が下された直後である。

大法官パキエルは、その回想錄の中で次のごとく述べてゐる。

ボナパルトは、ポッツォと同じくはじめパオリに與してゐた。しかし彼は間もなくパオリを離れ、フランス政府の權利を擁護する側に廻つた。彼がその態度を決したのは、ルヰ十六世に對する死刑宣告の報道が到着した時である。私はこの事實を、當時フランス政府代理委員の資格でコルシカに駐在してゐたセモンヴィルから直接聞知したのであるが、ボナパルトはセモンヴィルを深夜訪問し、就寢してゐる彼を起してその來意を次のやうに述べた。

代理委員殿、私はコルシカの情勢を熟慮した上で參りました。コルシカ人は愚かな行動をはじめやうとしてゐます。國民協議會のしたことは確かに大罪です。あれを遺憾とする點では、私は誰にも劣りません。だが何が起らうと、コルシカはいつでもフランスと結合して居らねばなりません。フランスと結んでこそ、コルシカは存在できるのです。私と私の一家は、この結合の維持に全力をつくします。私が參りましたのは、それを申し上げるためです。

これでナポレオンが決定的にフランスに歸服したのは、多くの罪惡の嫌惡すべき發頭人である父、母をナポレオンが所有するのを妨げて外國人と分有した父――この父が、ついにその頭を以て罪の償ひをしたその時であることが分るのである。

國王の死刑は、ナポレオンのエディポス幻想の本質的部分の實現にほかならぬ。從つて彼がフランスとの合體を以つて解放された母を占有し、それによつて象徴的實現を完成したのは、極めて當然の行爲とせねばならぬ。

それぱかりではない。父が作り出した狀態をそのまゝ繼承するこの行爲は、またその父との同一化であり、從つて父に對する愛の表現なのである。

この同一化は、それと同時にまた憎惡が滿足を得た後で生ずる罪障感の結果式である。それはセモンヴィルに語つた「私は大罪を遺憾とする點では、何人に劣りません」といふナポレオンの言葉がよく證明してゐる。だからこの同一化は、一方では罪の償ひ、贖ひでもあるのである。

更にまたナポレオンが、自分をマルブーフと同一化したことも、この贖罪狀態の因となつたかも知れない。

我々は夢によつて、また神經症の病狀によつて、無意識の橫着さ加減をよく知つてゐる。無意識は、その時々の要求だけしか考慮しない。それまでナポレオンにとつては、フランスはマルブーフを意味し、母をマルブーフの手に委ねることを意味してゐた。しかるに今度はこのフランスが橫着な無意識によつて、母そのものゝ象徴、母國になつたのである。そしてナポレオンの熱愛は、これに向つて注がれることゝなり、フランスは彼が熱情的に欲求し、自分の「北極星」と呼び、最後まで擁護するものに變つたのである。

十四、理想の父パオリ

ナポレオンが、自分の想像力で父の屬性をまとはせた人物は、生父シャルルのほかに三人ある　それはマルブーフ、ルヰ十六世、パオリである。この四人の父の中で、パオリだけは全く特殊の位置を占めてゐる。けだし彼はナポレオンの想像力の中で、父の理想、よき父、模範的父を代表してゐるからである。

パオリは、確かにこの理想を具體化するに適當な人であつた。コルシカ人は、彼をイル・バッボ（父）と呼んでゐた。ボナパルト一家では、彼は代父といはれてゐた。彼にはその過去の、獨立戰爭時代の英雄的行爲の赫々たる後光が附纒つてゐた。無意識の言葉でいふと、彼は母を外國人から保護し、彼等を退ける父の姿を持つてゐたパオリは、母を外國人マルブーフと結びつけるのに手を貸した眞實の父の對立物であつた。從つてナポレオンがパオリに對して強い愛情を感じ、莊嚴な崇拜と尊敬の念をいだいたのは極めて當然とせねばならぬ。

ナポレオンの幼年時代、少年時代は、その全期間を通

じて、この眩いばかりの父の影像に支配されてゐた。その當時の彼の心は、すべてこの影像に占められてゐたのである。

だからこそナポレオンは、渝らぬ熱情を以てこの父の理想に忠實さを持ち續けたのである。この忠實さは、一七九二年夏、彼がパリに滯在してゐた時でさへ、毫も變化を蒙らなかつた。彼はフランスがその內部的弱點のためにコルシカを保ち得ず拋棄すること、コルシカにその後で國民政府が成立することを夢想してゐたが、彼はパオリがその時再び將軍となり、フランスの占領以前のやうにコルシカの攝政に就任するものと考へてゐた。そしてパオリについて「彼はすべてゞある。將來も彼はすべてゞある」といつてゐたのである。

ひるがへつてこの時囚人として監禁されてゐた國王の運命は、國民協議會（コンヴァンシヨン）の討議が熱を帶びるにつれ、また裁判が進行するにつれ、次第に暗欝となり、次第に悲劇的となつてゐた。そしてその暗欝性が增し、悲劇性が募るにつれて、ナポレオンの心內でもまた國王に對する憎惡が興奮を起し、古くからの父に對する憎惡を現實化する道をとつたのである。しかるにコルシカ總督パオリは、愼重な態度をとつて中々動かない。ナポレオンは失望を感じた。その結果、彼は、少年時代の理想から段々遠ざかるに至つたのである。

ナポレオンとパオリの葛藤が最初に發生した時日については、歷史には何んら正確な證憑はない。しかし私は心理學的理由によつて、ナポレオンがパオリに公然たる且つ決定的な仇敵的態度を示したのは、國王の斬首が確定されたその日に違ひないと考へるのである。常態者が神經症患者と異る所以は、常態者は無意識の傾向に出口を與へる時には、必らず集團と現實の中に支柱と接觸を求める點にある。常態者に於ては、自分の精神的內容と一致する現實が存在せぬ時には、無意識の傾向は抑壓されるのである。だからナポレオンが父に對して極端に否定的な態度をとるに至つたのは、國王斬首事件に刺戟されたからに違ひない。それまでは、ナポレオンのこの傾向は、共同體と現實の中に支柱と接觸を求めて、それを得られないでゐたのである。

父といふものは、いかによい父、いかに理想的な父でも、父といふだけのことのために、いつかは必らず倒されねばならぬのである。オンケンは、ルヰ十六世の運命を論じて同じことをいつてゐる。「國王が弑逆されたのは、彼が國王であつたといふだけのためである。」註

註。ヴィルヘルム・オンケン「革命と帝國と解放戰爭の時代」（ベルリン、一八八四年刊）

ナポレオンにとつて最後の父の影像であつたパオリも、だからやはり倒れねばならなかつた。ナポレオンは少しの躊躇もなく 公然と自分はパオリに反對すると聲明し、パオリの仇敵サリチェティと密接にまた決定的に結んだのである。

我々はナポレオンの進化に決定的に作用したのは國王の死刑であると推論したが、この推論は事實によつてもまた證明されてゐる。パオリはその當時、サリチェティと同じく共和國に忠順な態度をとつてゐた。だからナポレオンと彼との間には、政治的または國民的感情の問題がある筈はなかつた。しかるにナポレオンは、パオリ派とサリチェティ派のどちらかに與せねばならなくなつた時、サリチェティ派を選んでそれに投じたのである。

パオリは、決して國王の死刑を批難しはしなかつた。彼はコルシカ人が國王の統治に反對するのを願つた。しかし彼は國王の死刑執行人となることは嫌つたのである。しかるにサリチェティは、國王の死刑に贊成の票を投じた唯一のコルシカ代表だつたのである。

しかしパオリに對して、ナポレオンの態度を變へさせたのはそればかりではない。ほかにもまだ無意識の動機があつたのである。前に述べたやうに、父（國王）の消滅以來、ナポレオンは消滅した父と同一化し、自ら父となつた。そしてこれは我々の見方の正しいのを證明するものであるが、彼は父の遺したプログラム（母とマルブーフとの結合）を、自分のプログラムとしたのである。彼がパオリの消滅、最後の父の映像の消滅を欲したのはこの意味で毫も不思議とするに當らないわけである。

これに加ふるに、この同一化の結果、彼はパオリに對して、父のとつた行動をくり返さねばならなくなつた。ナポレオンの父シャルルは、多年にわたつて忠實にパオリに從つた後、同じくパオリを捨てゝフランス人の側に身を投じたのである。ナポレオンの行動は、その點ではたゞ父を模倣したに過ぎない。

かゝるすべての動機が、却つてパオリズムそのものから強い支持を受け、力を與へられた點は、極めて示唆に富むといはねばならぬ。國民協議會に出席してゐたコルシカ代表の多くは、次第にパオリ擁護論を強調し出したのである。この形勢は、無意識の傾向が昂進してゐるナポレオンには、一つの防禦行爲とは思はれなかつた。彼はそれをパオリが主權を擅有し、再びフランスと鬪爭をはじめやうとしてゐると見たのである。いまや確實に父と同一化し、シャルルの作り出した新狀態に忠順を誓ふに至つたナポレオンは、猛烈にこの生れたばかりのパオリズムに反對した。それはその少し前、彼がコルシカ人の

背反運動——實際に於ては國王の死刑に對する抗議に過ぎなかつた背反運動の第一步に反對したのと全く同じであつた。彼のこの反對は、セモンヴィルに述べた「コルシカ人は愚かな行動をはじめやうとしてゐます」といふ言葉がよく證明してゐる。

しかしながらナポレオンのパオリに對する行動が、これで全く直線的にたゞ憎惡だけで動かされるやうになつたと考へるのは、アムビヴァレンツの本質と、そのナポレオンに於る力を正當に認めぬ誤りを免れない。この鬪爭自體の中で、陽極、すなはちパオリに對する愛情は、極めて生々と表現されてゐる。四月二日、パオリに對する逮捕令が出た後で、ナポレオンはパオリと和睦を圖つてゐる。彼は軋轢の緩和に努力を傾けてゐる。殊に彼の國民協議會に宛てたパオリ辯護狀は、頗る熱烈な調子で書かれてゐる。シュケエもいつてゐるやうに、この辯護狀が「疑問符だらけ」で書かれてゐることは事實である。そしてこの疑問符だらけなことは、その筆者が內的確信を缺いてゐるのを示すものである。我々の見るところでは、彼は自分の決定の動機について、自分に質問をしてゐるのである。そして彼はその決心がどれほど眞摯なものか自分でもよく分らなかつたらしい。辯護狀が疑問符だらけなのは、この自分自身に對する質問がそれに含まれてゐるためである。

ナポレオンとパオリの軋轢については、その動機を歷史家はいろ／＼あげてゐる。例へばリュシアンの誣告が公表された後、パオリが彼に明白な敵意を示したことや、その結果ボナパルト一家が、コルシカ人の迫害を受けた事などがある。我々はそれらすべての原因を、その正當な價値で評價した。だが我々はその原因に、更に無意識から生じた强力な一つの本能感情的動機を加へねばならぬ。ナポレオンのパオリに對する愛情を冷却させた點では、この動機もまた他の原因と同じ作用を演じたのである。

（次號完結）

（五九頁下段より續く）

併しそこにはなほ、實行しようとして實行し得ざる復讐を非現實的に代償實施せんとの無意識的意圖の存したことは否定し得べくもないであらう。その他この場面は、分析的に研究して見ると、幾多の重大な、先人未發見の要素が含まれてゐるのである。その故に、この戲曲に於いて、劇中劇の場面は、時間的にも心理的にも、最も重大な高頂點を示すものであるとのランクの說は正しいやうに私には思はれる。依つて、次に私はこの劇中劇の場面を少しく分析的に研究して見たいと思ふ。（續く）

柿實る（戯曲）

倉橋久雄

伴　友造（會社員、五十三歳）
れい子（妻……　四十六歳）
同　耕造（長男……二十三歳）
さと（女中……十八歳）
ふみ（隣家の女中、十九歳）
小學生男の子（尋常四年位）
同　女の子（尋常三年位）
號外屋
配　達
外、唄ふ子供等の聲、出征を見送る人々の聲等。

第一場

伴友造の家、八疊の間。左手の襖は玄關に通じ、右手の襖は次の間から臺所に通ずる。前に庭がある。庭のすそを廻つて臺所にも行かれる。その庭に通ずる木戸が舞臺左手にあるその木戸の左側を通つて、玄關に通ずる道。だが玄關は見えない。

七月下旬のある日の午後。三時頃。號外の鈴の音しきりに聞える。さと編物をして居る。健康で明るく可愛らしい十八九の娘。身なりと云ひ。仕草と云ひ、此家の娘同樣で、女中とは見えない。

汗をふきふき號外屋登場。玄關に號外を入れて去る。

伴友造。庭木戸から這入つて來る。

さと　あら、旦那樣、もう御歸りなつたんですの、いま號外もつてまいりますわ。（と立つ）

友造　それからステッキもね。たまの休暇だと思つて、思ひ切つてこの暑いさ中に散歩に出て見たものの、かう手がぶらんぶらんしては第一恰好がつかなくつて……。

さと　はい。（と、左手の襖を開けて去る。間もなく、ステッキと號外を持つて出て來る）

さと　ステッキはこれでよろしうございます？

友造　あ、（と受取つて、號外を手に）廊坊に於いて日支兩軍遂に開戰す……か……（と讀む）

さと　あの戰爭になるのでせうか？

友造　さ、政府は不擴大方針をとつてをるんだから……しかしこの分だと……どうなるかわからんなア。

さと　さうでせうかしら……くにでは母が心配してますわ。きつと……兄は去年除隊になつた許りですから……

友造　さうなつたら、さうなつたで肚がきまるものだよ。なア、さと。いまくにの話が出たから云ふんだけど、このステッキネ、お前のおばあさんが家から暇をとる時、かたみ代りにとわたしに買つて吳れたんだよ。

さと　（編物を手にして）そんなに古いんでございますの？

友造　（緣にかけ）さよう、わたしが大學にいつてた頃だから……（と、ステッキで、庭石のあたりを突いたり、たゝいたりしながら）お前、今いくつだつけ？

さと　十八でございますわ。

友造　十八か？　若いなア、ぢや、このステッキの方がず―とお前の御兄さまだ

さと　あら！　ステッキの御兄さまなんておかしうございますわ。

友造　ぢや、わたしならどうだ。わたしの御兄さまならおかしくはあるまい。

さと　旦那樣つたら、ほんとに御冗談ばつかし。

友造　冗談とはなさけないぞ。ハ、、、。あ、さうさうそつちの部屋に（と右手を指し）デパートの包紙にくるんだ箱があるから、それを持つて來てくれないか？

さと　（と右手に去る。やがて、長方形の包を持つて來る）

さと　はいこれでせうか？

友造　一寸開けて御覽！

さと　あの、私が開けてもよろしいでせうか……。

友造　いゝんだよ　お前にやるつもりで買つて來たんだもの。

さと　でも。（と躊躇する。）

友造　いゝから、開けて御覽よ！

さと　何でせう。怖いやうですわ。（と、おづおづ開けて）

さと　まア、綺麗なお人形！

友造　どうだ、綺麗だろ。

さと　隨分大きな御人形ですこと。まるで赤ちやんみたいに……。

友造　今更、御人形でもあるまいとは思つたのだが、やはり、私としては、自分本位ではあるが、他のものでは氣に入らなくなつてね。お前にいやがられるやうでは困るとは思ひながらも、これを買つて來たんだよ。

さと　あら、いやがるなんて、そんなこと決してございませんわ。

友造　喜んで貰へれば、それでわたしも本望なのだ。

さと　すみません。こんなに可愛いゝ御人形ではありませんけれど、小供の時分、母にねだつてやつと小さいのを一つ買つて貰つた時の嬉しかつたこと、いまだに覺えておりますわ。（と、人形を出して抱く。）

友造　なア、さと。お前が來てからと云ふもの、わたしもめつきりと元氣が出て、今更ながら、娘といふ派手な色彩のなかつた過去が無意味だつたと振りかへられるほど、それだけに、いまの樂しみも人一倍で、何だかひどく張り切つた氣持ちでゐる。それと云ふのも皆んなお前の御蔭だ。今度のやうに病氣をしても、直ぐまた立直ることが出來ると云ふのもさうだ。お前が娘のやうに親身になつて、甲斐〲しく看護して呉れたためなのだ。だから、ほんの御禮のつもりで、氣には入るまいとは思つたがそれを買つて來たのだ。

さと　ありがたうございます。わたくし、こんな結構なもの頂くほど…。

友造　いやいや、さうでない。元來が氣むづかしい私のことだ。大變だつたと思つてゐます。それで家内の方はあれがまた何か考へて買つて上げる事になつてゐるから……。

さと　奥さまにまでそんなにして頂いては濟みませんから……。

友造　まアいゝいゝ。そんな遠慮は禁物だ。いつも云ふ通り、家の娘のつもりで、わたしなどにも、もつと甘へるほどでなくてはいけない。

さと　はい、でも……。

（この間に、友造の長男耕造、學校から歸り、玄關途で、これを見、庭木戸の邊に隱れる）

友造　その、でもはいかんなア。（と、さとの顏をのぞき込み）お前、口紅つけてゐるのかい？

さと　いゝえ。

友造　眞ツ赤ぢやないか。お前の唇……。

さと　そんなに紅いでせうか？

友造　紅いとも、どれどれ。（と、手を出して、さとの唇に觸れようとする。）

さと　（その手をはらつて）いやですわ。（と、拗ねる眞似をして見る。）

友造　（笑つて）ほんとうか、ほんとうにつけてないのか。いや、實際きれいな唇をしてゐるな。……ア、家内から御白粉を貰はなかつたか？

さと　……。

友造　どうして、御白粉をつけないのだ？

さと　だつて、旦那樣がいつか、お前は御白粉をつけない方が綺麗だとおつしやつたんでもの。

友造　さうか。そんなことまで覺えてゐたのか。あんまりお前の頰が薔薇色なので、ついさう云つたのだよ。だが、この邊から、ほんのりとつけたのも、いゝなア……。

（と、頸のあたりを觸らうとする）

さと　（またはらつて、にらむ眞似）ウーン、旦那樣つたら……奥樣にいひつけますわよ。

友造　構はないさ。別にお前をとつて食つたわけでもないんだから……。

さと　（はぐらかして）今年、田舍の柿はどうでせうかしら……。

友造　俗に、桃栗三年柿八年と云ふが、八年待たずして家の柿も立派に實つたね。

さと　家の柿といひますと……？

友造　（一寸さとの頰をついて）この柿さ……。

さと　あら、知りませんわ、もう旦那樣なんかと御話しませんから：（と赧くなる。）

友造　ハ、、、まア怒るな。」

さと　……。

友造　お前、家に來てから四年になるかね？

さと　來たばかりの時はほんとに田舍娘でしたわ。

友造　お前の血色のいゝ顔を見てると、お前の田舍の柿を思ひ出すよ。なにしろ、お前んとこの柿ときたら、この家にとつては、私の赤ん坊の頃からの古いなじみなんだから……。

さと　旦那樣は赤ちやんの時、とてもやんちやだつたんですつてね。よく祖母から聞きましたわ。

友造　だけど、ばあやは言つたろ。お前の寢小便よりはまだよかつたつて……。

さと　あら、わたくしお寢しよなんてしませんわ。

友造　どうだか。おでこの白い所まで紅くなつたのを見ると、どうやらほんとらしいぞ。

さと　ウーン、旦那樣のいぢわる、しませんたら！

友造　どれ。わたしは散歩にでも行かうが。さとに憎まれてはかなはんから……。

さと　どうぞ、ごゆつくり。御留守中に旦那樣のおきらひな御白粉をどつさりつけてしまひますから……。

友造　あ、いゝとも、いくらでもおつけ……。いくらつけても、わたしはお前をきらひになんか、なつてやらんから……。

（去らうとして、庭木戸のあたりで、隠れてゐた耕造と會ふ）

友造　何んだ！　お前か。そこで何してたんだ？

耕造　別に何もしてやしません。

友造　變な奴だなア、歸つたら歸つたで、言葉位かけるものだぞ。（去る）

耕造　チェッ。（と、庭木戸から入る。）

さと　お歸りなさい。（と、人形を箱に入れる）

耕造　母さんは？

さと　朝からお里ですわ。（と、編物を手にする）

耕造　さうか。すると、今時分、お袋はおやぢの愚痴を並べたてる頃だなア。

さと　どうしてでせう。あんなにいゝ旦那様ですのに……。

耕造　（座敷に上り）　フーン、人形を貰つたと思やがつて……。

さと　御世辭ぢやありませんわ。

耕造　おやぢも馬鹿だなア。こんなに大きな娘に人形を買ふなんて……。

さと　とても可愛いゝお人形ですわ。（と、見せやうとする）

耕造　見度くもないよ。そんなもの！

さと　どうしてそんなに怒つていらつしやるの？

耕造　それより、この間の返事どうしたんだい？

さと　あの、この間のつて！

耕造　何遍いはせれば濟むんだい。僕はお前が好きなんだ。だから……（とすりよる）

さと　あら、いけませんわ。

耕造　おやぢの云ふ事なら聞けて、僕の云ふ事は聞けないのか？

さと　だつて、旦那様はそんな事なさいませんもの……

耕造　考いぼれてるからだよ。さと、今日の事奥様にいひつけてやるぞ。

さと　何をでございます？

耕造　何をつて、きまつてるぢやないか。おやぢとふざけてゐたことだよ。

さと　ですけれど、別に……。

耕造　さうは云はせないよ。頰をいぢらしたり、唇をつけたり、人形を貰つたり……。

さと　嘘ですわ。そんなこと！

耕造　だつて、人形が其處にあるぢやないか？

さと　これは奥様御承知の上ですわ。
耕造　頰ッぺたもキッスも御承知の上か？
さと　そんな嘘いつたつて……
耕造　嘘でもいゝさ。僕が言へば母さんは信じるから……。
さと　困りますわ。
耕造　なら、僕の云ふことも―お聞きよ。青春再び來らず、今からでも遲くはない。ね、僕のために、そしてお前のために、お前の眞赤な唇をお出しよ。
さと　あたし、そんなみだらな事出來ませんわ。
耕造　いゝぢやないか。（と、抱かうとする。）
さと　いや！（と、激しく抵抗する。もみ合ふ中に、さとの腰紐ほどける。それをとつて、耕造庭にとび下りる。）
さと　あら、何をなさるの！
耕造　ハ、、、（と、庭に下りて、縄飛びを始める。何回も、何回も……。）
耕造　（しながら）どうだい、一所に飛ばないか？
さと　…………
耕造　（やめて）縄飛びさへも出來ないのか。お前はそんなに僕に薄情なのか。そんなにおやぢが好きなのか？
さと　好きですわ。あなたのお父さん大好きですわ。
耕造　言つたなア。（と、座敷に飛び上り、さとを思ひ切りなぐる。）
さと　（倒れて、烈しく泣く。）
耕造　弱蟲。男と縄飛位出來ないのか。子供の時は野良仕事が忙がしくて、縄飛びさへも知らなかつたと言ふのか。フーン、可哀さうな田舍娘だ。
さと　やりますわ。やれますとも。そんなこと位、こちらへ來るまでは毎日してましたわ。
耕造　よし、やつて見ろ！（耕造、庭に下り、縄飛びを始める）
耕造　さア。
さと　（續いて下り、耕造の縄に入る。飛びながら）耕造さんは田舍を輕蔑なさるの？
耕造　（飛びながら）嘘だよ。ただ、さう云へば、さとちやん云ふことを聞くと思つたから……。
さと　（飛びながら）卑怯者ね。（暫く、無言で二人飛んでる）
耕造　（やめて）さと！（と抱く。）
さと　（振り離して）やめて！　あたし獨りでするわ。
耕造　（縁でやすむ）僕は卑怯者かしら……？
さと　……（飛んでゐる。）
耕造　君は自分で自分の美しさを知つてゐるのかい？
さと　（飛びながら）あたし、小さい時から綺麗だつて云はれつけてるから平氣よ。旦那様もさうおつしやつた

わ。
耕造　また云ふ！　おやぢのことを云つて毆られたいのか？
さと　（飛びながら）だつてほんとうですもの。
耕造　よし、毆つてやる。（と、その實、抱からうと思つて立つ。）
さと　あらア。（と、庭木戸の方へ逃げる。ふと、そこから外を見て思はず立どまる。）
耕造　（追つて、後からさとを抱く。）
友造　（入つて）耕造！（二人あはてゝ離れる。友造、庭木戸から這入り、耕造の前に立つ。）
友造　何をしてたんだ？（落ちてゐる腰紐をステッキで引つかけ）これは何だ！
さと　私のです。（とる。）
友造　お前はあつちへ行つとれ。
さと　濟みません、あたしが……。
友造　いゝから、いつとれ！
（父と子、無言對立、暫し、突然、友造、ステッキで耕造を打つ。）
耕造　何をするんです。亂暴な！
友造　馬鹿者！　貴様がこんな不良だとは思はなかつた。
さと　旦那様！
友造　お前は默つとれ！
耕造　不良ですつて……僕は……僕は眞劍なんです。出來ればさとと夫婦になるつもりです。
友造　そ、さう云ふのが不良の手だ。さと！　こんな奴に、だまされるんぢやないぞ。え、……耕造！　さとは普通の女中とは違ふつて事はお前も知つてるだらう。
耕造　知つてます、知つてますとも。知つてればこそ！
友造　その目、その目は何んだ。憎しみに燃える目、それが子の親を見る目か！　大事なひと様の預り娘、若しもの事があつたら、どの面下げて、ばあやや、さとの母さんに詫びが出來ると思ふ。（ステッキを示し）これは、ばあやから貰つた記念の品だ。（耕造を打つ。）
耕造　（平然と打たれる。）
友造　どうだ、わたしには反抗するお前も、ばあやの制裁は骨身にこたへるだらう。
耕造　お父さんは、そんなに僕が憎いんですか？
友造　何んだと……わたしはお前のためを思つて……その腐つた心をため直してやらうと思つて……。
耕造　嘘だ。そんなことは嘘だ。あなたはさとが好きなんだ。だから……。

友造 だから、何んだつて云ふんだ。わたしはお前みたいなみだらな眞似はせんぞ。
耕造 みだらな眞似なんて、してやしません。
友造 ぢア、何をしてたと云ふんだね。
耕造 たゞ、遊んでただけです。
友造 耕造、お前いくつになつた？
耕造 二十三です。
友造 學校へ行つてるやうだが、何處だ、學校は？
耕造 そんな事わかつてゐるぢやないですか。
友造 いゝから言つて見ろ！
耕造 城北大學です。
友造 城北では、繩飛びまで敎へるのか？
耕造 さとは僕を卑怯者だと云ひました。しかし、僕より、お父さんの方がよほど卑怯者だ。
友造 うるさい！　さと、さとと自分のもののやうに云ふな。以後さとの名を口にする事はゆるさんぞ。
耕造 そんなに僕が、あなたにとつて邪魔者なら、僕は出て行きます。
友造 この親不孝者奴！　行け、さつさと出て行つて二度と再び顏を見せるな！
耕造 行きますとも、こんな家なんか、誰が居てやるもんか。（出て行かうとする）
さと 耕造さん！（はしり寄る）
友造 さと、そんな奴のこと、構ふな！
耕造 （さとに小聲で）今晚六時、新宿驛で待つてる……
さと あの……。
友造 まだ、ぐづぐづしてゐるのか！
耕造 行きます。行きますとも！　母さんにはあなたから宜敷言つといて下さい。僕は……。
友造 母さんも定めし喜ぶたらう。そんな親不孝者はあたしたちの子ではない。

（耕造、奮然と庭木戶より去る）

さと 旦那樣！（と、馳けより、足下に倒れて）あたし……（と泣く。）
友造 さと！　もう旦那樣ではないぞ。お父さんと云へ、お父さんと……家では息子の代りに娘が出來たのだ。さと！　お父さんと呼んでくれ！　お前は今日から此處の娘だ。離しはしない。離しはない。
さと それでも……。
友造 いゝんだ。いゝんだ。さ、お父さんと呼んで……！
さと お父さま！
友造 さと！（と、涙ぐんで）お前は何處へも行かないで……。

さと　私、一生おいて頂きますわ。そしてお嫁にも行きませんから、どうか、どうか耕造さんと……

友造　あ、さと！　わたしは嬉しい……（しやがんで、さとの手をとる）この手、この溫み、まるで小さい時握つたばあやの手そつくりの感觸だ。ああ、あの頃の幸福がわたしにも今、よみがへつて來たのかしら……。

（友造、さとを抱く、さと、友造の胸に泣きくづれる）

―溶暗―

第二場

舞臺、前場と同じ。

前場より三月ほど後のある日の午後。

四時頃。

さと、やつれた面持ちで、緣にかけて、隣家の女中ふみと話してゐる。

ふみ　で、いつ歸るの？

さと　多分、あさつて位……

ふみ　寂しいわね。折角御友達になつたのに……。

さと　あたし、此頃よく夢を見るの。昨夜もネ、夜中にふと目が覺めたら、誰かあたしの傍にゐるの、あたし死んだを父つアんがもう迎へに來たのかと思つてゾッとしたの。さうぢやアなかつたの。旦那樣だつたの。旦那樣なら、あたしの傍に寄つてはいけないと思つて寄らないで下さいつて賴むの。あたしが夢中で賴んでゐるのに、旦那樣つたら、どんどん寄つて來るの。奧樣に見つかつたら大變だと思つてゐると、いつの間にか、奧樣があたしの傍にゐて、ぢつと私をにらんでゐるの……怖かつたわ。

ふみ　どうしてそんな夢を見たんだらうね。

さと　耕造さんは、神經衰弱だつて云ふの。

ふみ　坊ちやんにその話したの？

さと　うーん、話なさいわ。だけど、あたし變なの。時々奧樣の御用忘れたりなんかするの。

ふみ　そんなこと、あたしにだつてあるよ。それよりあんたが歸つたら、柿が食べられなくなる方が心配さ。あたしにとつては……

さと　柿だつたら、今日か明日來る筈よ。

ふみ　それが最後の柿つてわけ。

さと　まづい柿なのに、隨分皆んなに喜んで貰つたわ。だけど、柿だけは每年送ると思ふの。

ふみ　だつて、こつちの手には渡らないでしよ。あなたがゐない以上……。

さと　あ、さうね。

ふみ　あんた、どうかしてやしない。顏色も惡いし、そ

れにやつれたわ。

さと 私もう死にたいの。（泣く）

ふみ 死ぬなんて……どうしてそんな事云ふの。泣かないで、ね、泣かないで！ 元氣になつて、もう一度東京へ出て來てよ。

さと ありがたう。あんたにも心配かけたわ。皆んな親切ないい人だのに、何故、何故こんなになつたんだらう。

耕造（左手より出て來る）只今、（ふみを見て）やア誰かと思つた。

ふみ お歸りなさい。（さとに）ぢや、またあとでね。歸るとき御見送りするわ。（去る。）

耕造 さと。（と、傍にすはる）

さと 寄らないで！

耕造 どうしたの、どうして僕をきらふの？

さと あたし、悪い女なの。

耕造 何故？ 何故悪い女なの？

さと そんなこと、あなたに解らなくともいゝの。

耕造 さうはいかない。僕は、僕はいつだつて、君を愛してゐるんだ。話してくれ！どうしてなんだか……。

さと 耕造さん、約束して……。

耕造 何を約束するの？

さと 決して、この譯を聞かないつて……ね、私、悪い女なんですもの。

耕造 だから、それがわからないんだよ。僕には……。

さと いゝから聞かないで……。私、あなたにだけは好かれたまゝで別れたいの。

耕造 どうも、僕にはげせないんだ。君がこんなに僕を避けるやうになつたのは、おやぢがステツキで僕をぶつた時からずつとなんだ。あの晩、六時に君と新宿驛で會ふ約束をした……。

さと ……………

耕造 だのに、君は來てくれなかつた。それもいゝ。大體あの約束は一方的なもので、君の承諾は得てゐない。だから、約束をたてにどうのといふ譯ぢやない。

さと すみません。あの時はどうしてもいけなかつたのです。

耕造 何も、何も君が謝る事はないんだ。僕はあの時、君と何處かへ行つて了ひたかつた。しかし僕もあさはかだつた。蟇口には一圓許りしか金はない。歸るに歸られず、憤怒と悔恨にさいなまれつゝ、何處といふ當もなく、夜もすがら、東京中をさまよつて歩いたんだ。頭に浮ぶ事と言へば、君の事許りだつた。

さと 許して！ 耕造さん。あたし、あなたとかうして

御話してるだけでも苦しいのです。（立つ）

耕造　何故？　だから、何故なんだ。君は、君が國へ歸る理由さへ僕には云つて呉れないぢやないか。

さと　勘辯して……。あたしをせめないで……。ほつといて……。（右手に去る。）

耕造　（暫く、沈思）

配達　（這入つて來る、玄關に廻つて、「伴さん」と呼ぶ聲、やがて庭木戸から）　伴さん、小荷物ですよ。

耕造　（ハッとして）あ、（と、庭に下り、受取る）御苦勞さま。

配達　判を願ひます。

耕造　（次の間から拂つて來て捺してやる、配達去る）

耕造　（小荷物を座敷の隅におき、上つて、寢ころぶ。）

れい子　（主婦。左手から入る）お前、ひとりかい？

耕造　（反對の方へ寢返りする）

れい子　困るね、さとにも……（と、右手に去り、掛蒲團を持つて來て、耕造にかけてやる。）

耕造　いらないよ。（邪けんにはねのける。）

れい子　どうしたのさ。（と顏をのぞき）おや、お前泣いてるのと違ふ？

耕造　（顏をそむけて）泣いてなんかゐるかい。泣く事なんかないぢやないか。

れい子　さうお前、つけつけ云はなくつてもいゝぢやないか。泣いてゐなければ、それでいゝんだよ。

耕造　母さん！

れい子　なんだい？

耕造　何故、さとを國へ歸すんです？

れい子　何も歸すわけぢやないさ。本人が、さう云ふんだよ。歸りたいとね。

耕造　何か事情でもあるの？

れい子　そりや。あるだらうね。こゝの家のやうにお孃さんみたいにして、女中をおいてをく所なんぞは何處を搜したつてありやしないだらうからね。

耕造　でも、父さんはお前は家の娘なんだからつて言つてましたよ。

れい子　何かのはづみでさう云つたんだろ。今晩にでもお父さんに訊いてごらん。多分もうさうはおつしやらない筈だよ。

耕造　さとはどうしても國へ歸る譯をいはないんです。

れい子　當り前だよ。それをぬけぬけとお前に話すやうぢやア……。

耕造　やはり何かあつたんだ、父さんと……。

れい子　（遮つて）それ、柿だらう。（と隅の小荷物を指して）さとの國から、さうして柿が送られてくる以上、お前

の思つてるやうな事なぞないよ。

耕造　それなら母さん。さとを僕に下さい。

れい子　何を云ふんです。馬鹿な！　お前にはお母さんが、綺麗な氣立のよいお孃さんを見立てゝあげますから……。

耕造　母さん、でも僕は……。

れい子　あ、さうさう、あたしは愛國婦人會の事で御近所を廻らなくてはならないんだつけ。（と立つ。）

耕造　僕も、いかう。

れい子　をかしいぢやないか。母さんは……。

耕造　さうぢやないんだ。僕は映畫にでも行くんだ。

れい子　さうかい、それはいゝね。何だか、ダンスので大變いゝ寫眞がかゝつてるさうぢやないか？（愛國婦人會の襷をかけて、耕造と共に去る。）

友造　（暫くして、出てくる。悄然たるさま、カバンをおいて）誰もをらんのか。（小聲で）さと！（やゝ大きく）れい子！（大聲で）耕造！　をらんやうだなア。あゝあ（とのびのびと寢る）いゝ氣持ちだ。この三月ばかりといふもの、一晩だつてかうして足をおもいつきり伸して寢た事はなかつた。

男の子　（小學四年位の男の子と三年位の女の子、庭木戸に近づき、友造を見て）あ、おぢさんだ・おぢさん！

友造　（起きて）おう。

女の子　おぢさん伴つて云ふの？

友造　さうだ、伴友造。

男の子　這入つていゝかい？

友造　あ、いゝとも、お出で。

男の子　（女の子と庭に入り、友造に近づき）僕、ばあやの所へ行くんだ。

女の子　おつぱい飲みに行くんですつて……。をかしいわ……。こんなに大きいのに。

男の子　おぢさん、子供嫌ひなお母さんつてある？

友造　……（知らない子供等なので、けげんさうに見てる）

女の子　ばあやさんつて、おばアさんでしよ。しなびてるわね、おつぱい。をかしいわ……そんなの……。

男の子　馬鹿！　飲みやしないつたら……毆るぞ。

友造　君達、何の用だね。

女の子　あのね、御手紙頼まれたの。（男の子に）持つてるわね？

男の子　（ポケットに手をつつ込んだり、身體をなでまはしたりして、捜してる。）

女の子　（小荷物をいぢりながら）これ柿ね。書いてあるわ。

友造　やらうか？　この庭をまはると臺所に出るから、

金槌を搜しといで……。
男の子　（捜すのやめて）僕持つて來らあ……（と去る）
女の子　おぢさん、柿の歌知つてる？　健ちやんの田舍
で唄ふんですつて……。
友造　それより手紙どうしたの。
女の子　健ちやん持つてるのよ。
男の子　（右手から金槌持つて出て來る。）
女の子　健ちやん、手紙は？
男の子　はい（と友造に金槌を渡す。）
友造　（箱をこわし）さ、手をお出し　（と、よささうなのを
一つづつやる。）
女の子　ありがたう。
男の子　ありがたう。
男の子　おぢさん、柿の歌敎へてやらうか？　僕ばあや
から敎はつたんだ
友造　手紙誰に賴まれたの？
女の子　トランク下げたお姉さん……。
友造　何處で？
女の子　その八百屋の角でよ。
男の子　とても重さうだつたね。あのトランク……。
友造　何時？
男の子　たつたいまだよ。
女の子　（ふと、思ひ出したやうにスカートのポケットに手を
やり）あら、あたし持つてたわ。（と、手紙を出す）
友造　（受取つて、裏を見て驚く、急ぎ讀み下し、あはてゝ）
で、どつちへ行つた？
男の子　驛の方だよ。
友造　（庭下駄をつゝかけ飛び出す。）
女の子　馳けていかなくつちや駄目よ。
友造　（去りかけて）もう一つづゝやらう。（と、あと一つづ
つやつて、急いで追ふ。）
男の子　歸らうか？　（柿を二つ各自手にしながら子供等去
る）
耕造　（入れ違ひに耕造、左手より出て、玄關に廻り、やがて
座敷に出て來る。……ふと、友造のおいてつた手紙を見、な
に氣なしに手にし驚く、讀了して身體を固くし呆然と立つ）
さとに子供が……おやぢの子供が出來たつて……。
（ふと耳を傾ける）
（さつきの男の子と女の子を中心に近所の子供等大勢の唄ふ
聲聞える）
唄　おオらが背戸の柿の木に。エーイエイ。今年や柿の
實がようなつた。なつたとも〳〵　エーイエイ
唄　九つ小枝に皆實つた。エーイエイ。
色づいた。たアれに食はしよと色づた。ヨイ〳〵

ヨイトナ。

耕造 （じつと聞きいつてゐたが、ふと右手の室に去る。）

（少時……友造、がつくりしたさまで出て來る。そして椽にかける。……あたり、段々暗くなる）

耕造 （トランクを持つて出て來る）あ、お父さん……。

友造 （驚き）お前。（と、さとの手紙を捜すがない。）

耕造 お父さん、目つかりましたか？

友造 （ぢつと見つめて） お前は殘酷だ！

耕造 そのセリフはそのまゝお父さんにお返しした方がよささうですね。

友造 なに！

耕造 お父さん、さよなら！

友造 さよなら？

耕造 折角大學まで出して貰つて、それも來年は卒業といふ今日、かうして家を出るのは濟まないと思ひます。併し、僕はどうしても行かなくてはならないのです。

友造 何處へ？

耕造 さとの所へです。さとは苦しみながら、世の中の迫害に堪えて、これからの毎日を生き拔かなくてはなりません。

友造 ……………

耕造 僕は、それが誰の罪だと云つてるんぢやアないのです。かうなつたのはお父さん許りぢやアない。母さんも惡い。さとも惡い。そして僕も惡いんだ。

友造 ……　……

耕造 しかし、この苦しみを一番直接的に受入れるのはさとなんです。嵐に抗して、さとのあの若い身體がどうしてやつて行けるでせう。せめて、家中で誰か一人さとと苦しみを共にしてやる、あれの肩の重荷を輕くしてやる者が必要なんだ。だから僕は行くのです。いはゞお父さん、僕はあなたの罪亡ぼしに行くんですよ。

友造 フン、もつともらしい事を云ふな。誰も賴みもせんのに……。お前の心の中ではさとに對する情熱が燃え、手はしつかりとさとを抱く歡喜にふるえ、何の苦業で何の償いだ。白々しいにも程がある……。

耕造 お父さん！ よくもそんな事が云へますね。あんたこそ心の中で僕を嘲笑してるるのでせう。成程、僕は甘いかも知れない。しかし金にも情熱にも負けない戰ひをきつと戰つて見せます。ではさよなら。（と、庭へ裸足で飛び出す。）

友造 それ見ろ！ 今からそれではさきが案じられるぞ靴はどうした？ 靴は？

耕造　餘計な事は云はないで下さい。戰ひはこれからです。

友造　さとは何處に行つたか知つてるのか？

耕造　そんな事知るもんですか。僕の力で必ず搜し出して見せます。（玄關に廻らうとして、庭木戸の所でれい子に會ふ。）

れい子　何處へ行くの？

耕造　母さん、さよなら、さとと一所にくらします。

れい子　（とめて）何です、氣狂ひみたいな事を云つて……
……。

耕造　ほつといて下さい。

れい子　いけません、そんな事、母さんがゆるしません。

耕造　死ぬんです。僕はさとと死ぬんです。（ふり切つて去る、が氣付いて、靴をとりに玄關の方へ。）

れい子　あなた、とめて！

友造　なに、死ぬ、馬鹿な！（左手に去る）

れい子　（も玄關の方へ。やがて、耕造、庭木戸のところから外へ去るのを見て）耕造！　お待ち！（追つて去る。）

友造　（これも急いで追ひ去る。）

（舞臺、空虚）

ふみ　（隣家の女中ふみ、左手から出て來る）　何だらうね。ひどく騷がしいけれど……。さとさん！（と呼んだが返事がないので、庭木戸から這入る。）

ふみ　おや、柿がある。（と、緣にかけ）さとさん、一つよばれますよ。うまさうだね。さしづめ、これが最後の柿つてわけかな。（と、食べ出す）

（雨の音）

ふみ　おや！　雨だよ。何をしてるんだらうね。さとさんは……もう何時だらう。眞ッ暗だし……。それにこの家の人達は何處へ皆んなして行つたんだらう？

（雨、ますます激しく、夜更けて）

（遠く、萬歲の聲）

ふみ　（引かれるやうに、庭木戸の邊まで出て）何處の家かしら……。（と、呟く。）

（續いて、天に代りての、合唱聞える）

（降りしきる雨の中、軍歌流れて……。）

——幕——

附記——
劇中挿入の柿の歌は、故坪内博士の御作『役の行者』中のものを拜借致しました。こゝに御斷りすると共に厚く御禮を申述べさせて頂きます。

時評

映畫『大地』を觀る

大槻憲二

パール・バック女史原作『大地』(The Good Earth) の映畫化せられたものを今更取上げるのは、いさゝか時期遲れの感はあるが、支那人心理研究の一助となることだし、それに迂遠なる私はこれをほんの最近に見たので、今頃これを問題にすることを許されたい。

支那北部の或る地方、飢饉と戰亂とのあらゆる自然の暴威を逞しうする廣大な大地、こゝで貧農王龍は富豪黄家の奴隸女阿蘭を娶り貧苦と戰ひつゝ次第に土地を增して行き、子供も儲けた。併し彼等の幸福も未曾有の旱魃に襲はれて一場の夢と化し、彼等は南の都會に走つたが、こゝも樂土ではなく、しかも恐ろしい暴動が起つた。支那と云ふ土地が永い歷史に亙つて繰返す上下の逆轉で、砲火掠奪が天地を蔽つた。この混亂の中で阿蘭はふと澤山の寶石を拾ひ、これを手にして再び故鄕に歸り、彼は忽ち大地主となつた。かくて王龍は氣傲り、大地を忘れて酒と女の生活に浸り、家庭は紊亂し、親子兄弟夫婦の間に葛藤が始まつたが、大地を忘れない妻の阿蘭と長男とは、戶主の亂行に負けずに眞面目に働き續けてゐた。その時、いなごの大群が押寄せて來て農作物を荒し、王家の富も危うくなつた、その危機に依つて彼の安息の

ABHUB

アプフウプ

他の學問がアプフウプ(屑)として棄てたものゝ中から、分析は眞理の黄金を探し出す。

『針金』

不老泉院主

口繪に揭げておいた水彩畫『針金』は小山良修氏作で、昨年末、蒼原社展(神田東京堂階上)に出品せられたものだ。私はこの作を見た時、直ちに象徵的意味あることを直觀し、就中野菜が女を代表するものであることを感じて、後、作者にそれを質したところ、作者はこれを承認せられると共に、その作畫の發展過程を具さに告白せられて、私の分析的直觀の妥當なることを裏書きせられた。また

夢も醒め大地の正道に引戻されたのであつた。

以上はこの物語の荒筋であるが、主人公は一見王龍の如くであつて、實は阿蘭であらう。彼女は「大地」そのもの丶象徴となつてをり、忍從、生産、堅實、謙讓の諸々の美德そのもの丶體現となつてゐる。彼女は元、相當の農家の娘であつたが、或る年飢饉に襲はれてその親は彼女を黄家の女奴隷として賣拂つたのであつた。そのやうにして彼女の忍苦と犠牲の生活の第一歩は始まるのであるが、彼女を黄家から娶つて新郎王龍が意氣揚々として桃の實を嚙りつゝ自家に引擧げて歸つて來る場景はほゝえましいものであつた。阿蘭はその間楚々として王龍のあとに從つて來るが、王龍が捨てた桃の種を拾つて夫の家に持歸りそれを庭の一隅に植える。それがやがて生長して大木となり、彼女が死した後に、夫王龍は臨終の室を出で丶庭に出た時、丁度この桃の木の下に佇んで（小山良修氏は殊に彼が木の股の間に顔を突出したところに注意せられたが）「彼女は大地であつた」との述懐を洩すが、これは實に意味深長なるプロットであると申さねばならぬ。

この作の「詩」は以上の如くであるが、更にこの作の「道德」は如何なる點にあるかと云ふに、それは人間の生活が大地を離れてはならぬと云ふ點、大地を離れることが同時に道德的低落を意味すると云ふ點にある。私は本誌前號に於いて多摩少年院探訪記を物して、その中に、人類の生活が原則としては直接の（殊に大地に卽しての）物資生産を遊離してはならないのだ、その遊離からして多くの精神的不健全が生ずると云ふ意味の事を暗示しておいた。私は嘗て社會思想上農民主義を唱へたことがあつたが（そこには多くの母コムプレクス的病理性が支配してゐたことを只今承認するに吝でないが）

如何にして野菜に女の象徵を直觀したかと云ふに、それは夢に通有な象徵であるためばかりでなく、繪畫に於いてもこれは屢々用ゐられて來たところだからである。セザンヌの林檎はただの林檎でない。セザンヌの林檎にギリシア藝術以來の裸形人體の傳統を直觀し得ないやうなことでは美術家たるの資格を疑はれても仕方がなからう。日本の繪畫にもその例證は數多く擧げられるが、その一つとして昭和十年の帝展に出品せられた石橋武助氏作油繪『裸婦』を擧げることも出來よう。この作に於いては、裸婦の側に大小十數個の野菜が連ねられ横たへられてあつた。これは批評家たちに奇異な感じを與へたらしいが、私には面白い着想に考へられた。

何れにもせよ、小山氏の構想がこの『針金と野菜』に發展するまでには、實に二つの前段階を經てゐるのであつた。その第一段階は異様な形體の青赤二頭の馬（と云ふよりは馬の如き形體の奇岩）の交錯せる（青赤の交錯は男女の交媾を

その中心思想は今なほ（よしんば形は違つてゐるにもせよ）、私の確信となつてゐる。

併しそのやうに大地を離れることが人類の墮落と不幸とを意味するとすれば、抑々文明とは何であるか。それはナンセンスか。文明とは要するに大地に叛逆せぬまでもこれを遊離することを意味するではないか。左様、人類は大地を遊離しなければならぬ。而も他方、大地を憧憬しなければならぬ。そのディレムマは實に。生の本能と死の本能との相反併存の鬪爭と妥協との姿を彷彿するものであらう。

『大地』は人類の大地への憧憬の美化せられた詩である。詩に美化せられざるものはないが、その美化は現實を掩ふことを必然とする。世に阿蘭のやうな忍從そのもののやうな、マゾヒズム美德の權化のやうな女はないであらう。女の美德がマゾヒズムのそれであると云ふことを否認しようとするのではないが、マゾヒズムの美德のあるところ、その反面の惡德とて介在しないわけには行かない。この惡德の隱されてあるところに、この作の詩があり、この詩のあるところに虛僞のある所以であるが、これは一面たしかに支那人心理の美點を誇張寫したものであると共に、他面、作者パール・バックの女としての自己表現でもあるのであらう。彼女は己れを阿蘭に大地に同一化してゐるのかも知れない。そうして彼女に「母」なる別作のあることは實に極めて自然であるやうである。何となれば、阿蘭は大地の象徴であると共に母の象徴でもあるからである。女は母性本能の觀念的お化に終始するものではない。彼女は女として人間である。彼女等は母親でもあるが娼婦でもあるかも知れない。女であると共に男でもあるであらう。

意味せるに非ずや？）前後に嚴めしい鐵條網が張り繞らされてゐるのであつた。

併しこの構圖は獨立美術協會派の、殊に福澤一郎氏等の作を模倣せるかの如き印象を人々に與へる危險があると作者は感じてこれを廢棄し、次いで裸體美少女が秋草咲き亂れる中に立膝しつゝ背後に倒れんとして左手を以てわづかに全身を支へてゐる如き姿勢をとれる前に、これまた鐵條網がシメ繩の如く張られてあるところを描いて見た。が、これは今度は反對に、畫面の雰圍氣があまりに優美になり過ぎて、宛も日本畫の如き畫面感觸を呈したので、これもまた廢棄して第三回目に口繪の如き作畫となつたと云ふ。

鐵條網は近代人の神經を適切に象徵する事として擇んだと作者は云はれるが、これは近代人のそれのみならず、作者自身のそれをも象徵する事に違ひない。これが性的禁制のみならず警戒や防禦を意味することは想像せられるが、作者の創作の眞の動機に就いては鐵條網を以て觀者の窺視を許さぬものゝあることを感ぜ

×

併し支那人がマゾヒズムの民族であると云ふことは、私が『中央公論』二月號に『蔣介石の精神分析』の題下に論じておいた通りである。この『大地』は私のために、右の結論への有力な裏付けをしてくれた點で非常に興味が深かつた。なほも一つの裏付けは、雜誌『惱』昭和十二年十二月號に掲げてあるシャルテンブラント氏稿（田村幸雄氏譯）『北京に於ける精神病學』であつた。その內に「興奮の强い時に自分に傷をつけるのが支那に於ける精神病患者の特徵である」と云ふ一節がある。これは「解雇せられた或る建築勞働者が腹いせに今迄働いてゐた作業場で狂言自殺を企て周圍の人に止められたが、雇主は彼に赦を乞ふた」と云ふ事實に關聯して云はれてゐる結論であるから如何なる興奮の場合にもさう云ふ症候を呈するとは限るまいが、（日本人でも腹いせに敵の門前で割腹する例は珍しくない）少くとも西洋人から見ると、かう云ふ自己破壞的行動はめづらしく不思議なのであらう。支那人にのみ特殊とは云へないであらうが、東洋人的な心理特徵であるとは云へるであらう。

×

その後『大地』の新居氏譯本を延島英一氏から借覽する機會を持つたが、映畫とは大分違つてゐる點のあることを發見した。桃を喰べるところは原作にもあるが、その種を拾つて庭に植えるやうなところはない。寶石も偶然拾ふのではなく、彼女が富家に傭はれてゐた經驗を利用して富家に於いてさう云ふ貴重品がどう云ふところに匿されてあるかを知つてゐるために、動亂の機會にそれを盜んで手に入れるのであつた。このやうに總てが、原作に於い

しめる。

『砂上母子』

こゝに掲げた圖は鈴木保德氏原作、獨立美術協會秋季小品展（昭和十二年秋、銀座三昧堂階上にて）に出品せられたものである。題して『砂上母子』と云ふがこの畫因をたゞ砂上に坐してゐる母子と

て遙かに客觀的に現實的に描寫せられてある。舊支那政府の監督の下になされたので、さう云ふ方面の干渉があつて映畫の方では總てがやゝ美化せられてあるらしいのである。兩者を細かく比較批判する餘裕は只今の私にはないから、この問題はこれにて擱筆する。たゞ王龍が立派な棺桶を生前に作つてそれに出入して樂むと云ふ話は、これが彼のみならず支那人一般の風習であるらしいところから見て、彼の民族の死の本能を想像するに足り、その點が私の支那民族心理への分析解釋を裏付けるものだと云ふことをこゝにも一度繰返しておきたい。（終）

新刊紹介

『喪服はエレクトラに相應し』

大槻岐美

『此の三部曲はエスキラスの悲劇「オレテス物語」の近代的解釋とも云ふべきもので、物語の筋は希臘悲劇のそれと同じく、只一八六〇年代のニュー・イングランドを背景としてゐる。登場人物も傳説のそれと並行し、名前も或程度迄原型の人物と類似してゐる。非常に陰慘な劇で、骨肉相互の愛慾葛藤をフロイド流に取扱ひ明朗と云つたやうな點は少しも無い。場面も全戲曲を通じて殆ど夜か黃昏であり、マノン家特有の凍付いた樣な表情、ラヴィニ

のみ單純に、常識的に解したのではこの畫の面白味は分らない。この畫家が殊に幼兒期の自己經驗を中核とする抒情詩的な主題を好んで擇ぶ作家であることは私嘗てこれを論證したことがあつたが、さう云ふ豫備知識を持つてこの作畫に對すると、この畫因の境地が自ら觀者に彷彿するであらう。

私の解釋にしてもし誤たないならば、畫中の母の膝は砂と同一視せられてあるのだ。それ故にこの畫家は母の全身を故意に畫面に描き表はさなかつたのだ。その必要がなかつたからだ。否、むしろ、さうしたならば、畫因の强調點が判然しないからだ。畫家はたゞ母の膝と子供の脚と砂とだけを强調したかつたのだ。畫家は勿論この幼兒に自己を同一化してゐる。その脚に自己の脚を同一化してゐる。幼兒の脚がたゞおとなしく、平凡に母の膝の上に突立つてゐるのではなく、ましてやたゞその上に坐してゐるのではなく母の膝の上で盛んに活躍してゐるところを描いてある點に御注意を願ひたい。子

アの黒い裝ひ、等はマノンの先代が憎惡を以て建てたと云ふ「白く塗られた墓」にも似た家の、希臘神殿風の列柱をもつた玄關を主な背景として、此の劇の凄慘な效果を高めてゐる』と譯者解說にある通り、原作者ユージン・オニールは人間の運命を貫くエディポス・コムプレクスをさま〲な角度からわれ〲の眼前にはつきりと示してゐる。

夫婦に一男一女の子供を加へた一家族が互に愛し合ひ反目し合ふ、陰慘な悲劇である。

エズラ・マノンは妻よりも娘のラヴィニアを愛する、妻は夫を憎惡し、息子のオリンを何時までもその手中に愛撫し度い慾望をどうすることも出來ない。姉娘のラヴィニアは、父親への愛の競爭者として、又弟オリンへのそれとして母クリスティーンを仇敵視し嫉妬のために母親からオリンをもぎ去る父に味方する。絕望の母は遂に船長アダム・ブラントと不義を重ねる。娘はブラントを祕かに愛してゐるが、こゝでも母親は、父親を取つた如くブラントを取つたものとして二重に母への憎惡が昂る。ブラントとはエズラ・マノンの弟と召使の女との間に生れた子である。かつてマノンは弟とその召使ひを爭つて遂に弟が勝利を得たものである。そのためマノン家を追はれた弟夫婦は悲慘な境遇のうちに死ぬる。ブラントはその復讐をなすべくマノン夫人クリスティーンと通じてマノンを毒殺する、それを知つたラヴィニアは、不義の母を裏切り者として憤り恨むオリンを唆かしてブラントを殺害させる。母親はブラントの後を追つて自殺し、オリンもまた母への思慕と自責の結果自殺するに至る。只一人殘されたラヴィニアは結婚も思ひ斷つてマノン家の罪、血に汚れた自已の罪を購ふために墓場にも似た白い館に身を隱す。

供は母の柔い膝の上を踐みつけることに無上の快感を覺えてゐるのだ。さうしてその足の快感はたゞの足の快感ではなくもつと深い快感を象徵的に彷彿せしめてゐるものであるらしいことは、これを容易に想像することが出來る。何となれば母の膝は單なる平板なるものではなく、そこは山の如く隆起してゐると共に、また谷の如くに陷沒してゐて、そこを蹂躪し征服する足の快感は登山家の足の快感の源泉として我等の無意識に極めて遠く深いものがあるからである。卽ち、エディポス・コムプレクスに淵源してゐるらしいことはこれを否定するわけに行かないからである。

畫家は海邊の柔い砂を強く踏みつけ、勇ましく蹴散らすことに依つて、嘗ての母の膝の上に於いて經驗した深い歡喜を想起し、かくてこの抒情詩的な畫作となつたのであると解して、恐らく誤ちはあるまい。さうしてそれは畫家自身の恐らく苦笑と滿足との交錯した（併し勿論前者の勝つた）表情を以つて承認せられる

全篇を交錯するエディポス・コムプレクスに、女性々心理の發展過程を配し生と死の本能の闘爭を描き物凄さまでに人間心理を剔抉してゐる。此の劇は當時上演されて壓倒的人氣を呼んだものであつたさうだが、その原因は私共のコムプレクスに觸れるところ多く、かつ深くあるからに相違ない。作中、作者の象徵使用の意圖は分析學を學んだ者にとつては胸の透くほど正確であり、判然と解釋出來る。精神分析學の勉强のためにも精讀をおすゝめし度い。譯文も大變讀み易い。譯者は京都帝大出身の阪倉篤孝、湯澤了豐、井上宗次、石田英二の四氏である。（春陽堂發行、定價五十錢）

ところであらうと信ずる。

『ヴィナス脫殼』

口繪に掲げた右題名の畫は大内青坡氏作に罹るデッサンである。實は私はこのデッサンに基き作られたる油繪を昨年末上野府美術館NAS展で見たのであるが油繪の方がこのデッサンよりは遙かに魅力的であつた。全體は褐色調で、頭髮の背景のあたりに宛も光背の如くにコバルト色の一部分が見えて、それが非常によく利いて、全畫面を引き立て引きしめてゐた。さう云ふ美しさはこのデッサンの寫眞では失はれてゐる。

大内青坡氏はフロイド賞牌の作者大内青圃氏の令兄であつて、氏等兄弟の作には多くの共通的な特質がある。佛敎的な雰圍氣もその一つであるが、更に判然と云へは、非常に抑壓せられたエロティシズムの美事に昇華した魅力である。愼ましい南國美人の色氣である。青圃氏の純粹にインド的であるに對し、青坡氏はインド的と西洋中世的の混淆調和がある。

その點に於いて堂本印象氏を聯想させるが堂本氏よりは純粋で素朴で内氣で、その代り覇氣に乏しい。殊に青坡氏の畫に於いては、女の皮膚の滑らかさの感覺がいつも心憎いばかりに鋭く匂つてゐる。『ヴィナス脱殼』と題して、貝殼のないのを人々は不思議に思ふかも知れない。が、今脱ぎ捨てられた衣裳がその貝殼の代償である。氏はモデル女等が畫室に於いて衣裳を脱ぎ捨てモダル臺上に進まうとする瞬間に於いて、常に美神の誕生を彷彿するのであらうと私は想像する。もしさうだとすると、その感覺は誠に正しい。私は氏の前作をこゝに想起する。それは一昨年の大平洋畫會展に出品せられたものであつた。その作はやはりヴィナスと同じやうな表情を示してゐたが、彼女は脱ぎ捨てられた衣裳の上に横坐りに坐つてゐた。その肢體の下に敷かれてゐる衣裳は扇形に擴げられ、その扇形は正に貝殼を彷彿せしめた。私はひそかに作者のその工夫を直觀して、嘗て青圃氏に面接の際にいさゝか得意になつてそれを質したところ、氏は令兄のために私のその直觀の正しいことを保證してくれたことがあつた。私は、青坡氏の藝術を愛する。

北山氏の漱石研究

本號所載北山隆君稿『夏目漱石の精神分析』はなかなかの力作である。同君はさきにも漱石の性格を論じ、今また彼の文學を論じ、この小説家の研究に熱心であるのは學徒として結構な態度である。

北山君の研究に依つて我等は漱石の本質をまざ／＼と知解することが出來たばかりでなく、彼の作がわが國の今までのインテリの間に廣く愛讀せられた所以をも明かにすることが出來た。彼は典型的なインテリ作家であつた。その煮え切らない。行動能力の乏しい、觀念遊戯的な不能症的態度はそのまゝ明治末期以來のわが國インテリの特徴である。戸坂潤氏はかつて都新聞で「漱石文化」を論じ、現在官學派の文學、岩波系の文化が實にこの漱石文化である所以を説いてゐたがこれは氏の論文の中でも優秀なものとして私にまで印象してゐた。併しその内容はやはり心理學的に闡明せられなければならなかつたのだ。今、北山君の論文を讀んで小氣味いゝまでにその漱石文化の心理的病根の剔抉せられたるを見る。殊に私にまで興味のあつたのは、論者北山君が實に久しくこの漱石病の持主であつたと云ふことである。その故に、君は漱石に久しく執着して來たのであらうが、恐らく今次の論文は君が漱石への卒業論文となり、絶縁狀となり今後に君が更生せらるべき契機となるのであると云ふことを切に期待するものである。

講座

精神分析學入門（二）

ジグムント・フロイド（ＫＯ生譯）

精神病學の講義でなしに、まア歴史の講義を聽きに來たと想像して御覽なさい。そして講義がアレキザンダ大帝の生涯と戰爭とを語つてゐるとして御覽なさい。どう云ふ動機に依つて、諸君はその講師の話すことが噓でないと信ずるのか。まづその事情は精神分析の場合よりも遙に不都合である。歴史の敎授なるものは諸君と同樣、別にアレキザンダの遠征に參加したわけではないのだ。これに反して精神分析家は少くとも自分自身が親しく携はつたことに就いて報告するのである。併し次に歴史家が信じてよいとしてゐるのは抑々何であるかと云ふことが問題になる。歴史家は諸君に當代の人々の、もしくは問題の事件を去ること程遠からぬ頃に生存してゐた人々の古文獻を、例へばディオドル（Diodor）、プルターク（Plutarch）、アリアン（Arrian）等の書物を參考にせよと云ふことであらう。歴史家はまた王樣の今日まで殘存してゐる貨幣像や肖像の複寫を見せてくれることであらう。またイソス（Issos）の戰ひを寫したポンペイのモザイクの寫眞を諸君の間に順々に廻して見せてくれるであらう。嚴密に云ふならば、これ等總ての記錄は、昔の人々がアレキザンダの存在を、またその事業を本當の事として信じてゐたと云ふことを示してゐるに過ぎないのであつて、諸君としてはこれを新たに批判してかゝる必要があるのである。さて批判して見ると諸君はアレキサンダに關する記錄の皆が皆まで信ずるには足らぬこと、その細部を確めて見なければならないことを知るであらう。然しながら、私には、諸君が擧つてアレキサンダ大帝の實在を疑つて講堂を去られるだらうとは考へられない。諸君が去るか去らぬかは專ら次の二つの思慮如何から極められるであらう。第一は、講師自らにも確かでない事實を諸君に本當のやうに思ひ込まさうとする見え透いた動機を示さないかどうか、第二に、凡そ手に入る何れの歴史書を探索してもこの事實を殆ど同樣に記載してゐるかど

うか。諸君が古文書を檢討する時は同じ點を顧慮されよう。卽ちその文書を保證する人に何かの下心がありはせぬかと云ふ點と、おのおのの筆者の間に一致點があるかどうか顧慮されるだらう。檢索の結果アレキサンダの實在は確かに信用してもよいことになるが、モオゼスとかニムロドのやうな人物になるとさうは行きかねるのである。ところが諸君が果して精神分析の報告者を信賴していゝかどうかはあとになつて十分に知られるやうになるであらう。

偖て諸君は今や當然次の疑問を起されるであらう、若し精神分析を客觀的に信ずる途がなく、それを證明する事が不可能であるなら、一體どうして精神分析を學び、その主張の眞實なることを確認することが出來るか。實際、精神分析を學ぶのは容易なことでない。精神分析學を正式に修めた人もあまり多くはない。だがこれに達する道は勿論開かれてゐる。先づ諸君は精神分析を自分自身に就いて試みて自己の人格の研究によつて學ぶことが出來る。これは所謂自己觀察と申す意味とは全然趣を異にしてゐるが、一寸適切な言葉が見付からないので、今のところさういふ言葉で現しておいてもよからう。精神分析法を少しく學べば、屢々見られる誰でも知り拔いてゐる精神現象で分析材料に出來るのが無數に轉がつてゐる。さういふ材料を分析することによつて、諸君は精神分析の記述する現象が眞實であること、精神分析の考へ方が噓でないことを確信されるだらう。尤もかういふ方法ではある境地までにしか進めない。さらに深く進まうと思へば、專門の分析家に自分を分析して貰ひ、分析の效果を自分自身で體得し、さらに、その分析家が用ゐる分析の微妙な術式を觀察してみる機會を利用するに如くはない。勿論こんな方法は、個人個人にのみ限られてゐて決して一時にクラス全體の學生に望まれるものでない。

精神分析を理解しようとする時に起る第二の困難は、最早精神分析の與り知るものではない。少くとも諸君が今日迄醫學研究に從事してゐられるなら、諸君自らがその責任を負はなくてはならぬと私は考へてゐる。諸君の教養は諸君の思考活動を精神分析とは非常にかけ離れた方面に向けてしまつた。諸君は有機體の機能や障害を解剖學の基礎の上に立つて觀察し、化學的乃至物理學的に解釋し、生物學的に考案するやうに教育されて來た。その結果諸君はその興味の一部だに、驚くべく複雜なこの有機體の進化の絕頂にある心理生活に向けることはないのである。かういふ教育のために、心理學的考へ方を信用せず、それに科學といふ性格を認めず、心理生活を素

人、詩人、哲學者、神祕家のなすが儘に放任してしまふ習慣がついてしまつた。このやうな缺陷は確かに諸君の醫者としての能率を損傷するであらう。何となれば、諸君が患者を診る時に、總ての人事關係に於いてさうであるやうに、先づ第一にその患者の精神的表面にぶつつかるからである。そして諸君の求めてゐる治療的感化の一部を、諸君があれほど輕蔑してゐる籔醫者、自然療家法及び神祕家に任かしてしまふことになると云ふ天罰を受けるのでないかを恐れるものである。

諸君の教育のかゝる缺陷に對してどのやうな辯明が現れるかは固より私に分つてゐないわけではない。が、とにかく諸君の醫學的意圖に十分役立ち得る哲學的補助科學が缺けてゐるのである。學校で教へてゐる如き思辨哲學とか、記述心理學とかさては感覺生理學を土臺とした實驗心理學とか申すものは、身體と精神に介在する關係を知る上に大して役立つものではないし、それに、精神機能に就いて起り得べき疾患を理解する鍵を供することも出來ない。醫學の領域に於ては、精神病學は、その觀察した精神障害を記述し、臨床的症狀に總括する仕事に從事してゐるが、彼等も正直な氣持になつた時には、精神病學の純記述的方法が果して科學の名に背かないかを自ら疑つてゐる次第である。病狀を構成してゐる症候は、その由來その機制、並びにそれが反對側に結びついてゐる時には分らないのである。それ等の症候は精神の解剖學的器官で證明出來る變化と全然一致してゐないし、さういふ解剖學的變化だけを基としてそれ等の徵候を說明することも不可能である。かやうな精神障害は、それがある有機的障害の副作用であると分かつた時だけ、醫學的精神病學から治療的效果が達せられ得るのである。

精神分析は正にこの空隙を䀹つてこれを埋めようとしてゐるのである。精神病學に今迄に缺けてゐた心理學的基礎を與へようとしてゐる。精神分析は、身體障害との結びつきを理解せしむるあの共通地帶を發見しようと望んでゐる。この目的のために、精神分析は解剖學的、化學的さては生物學的などの心理作用とは緣の少い假說から解放されて、純粹に心理學的な補助概念を以て研究せねばならぬ。かういふわけであるから、精神分析が始めには諸君に奇怪な感を與へることだらうと思ふ。

第三の困難は諸君や、諸君の教養や、若しくは諸君の心理態度のせいであるとは申さない。精神分析はその懷抱する二つの信條のために全世界の怒りを買ひ、剰へ反感をさへ惹き起したのである。その信條の一つは知的偏見と衝突し、他の一つは審美的道德的偏見と衝突したのである。これ等の偏見をあまり樂觀的に考へないで頂きた

い。彼等は威力ある敵である。人類の進化の上に役立つた、いや必要であつた諸々の發達の沈澱物である。それ等には本能感情力がこびりついてゐて、それに戰ひを挑むのは非常に困難だからである。

精神分析の、人好きしない主張の一つは、精神現象はそれ自體が無意識的であり、意識的現象は全精神生活の單なる個々の行動や一部分に過ぎぬと云ふ信條である。諸君はそれとは反對に、精神と意識とを同一視する習慣がついてゐるのを思ひ浮べるであらう。私達から見れば、意識とは明らかに精神を概念的に確定しようとする特質であつて、心理學は意識の內容を研究する學問である。この事實は自明すぎる程自明なもので、それに喰つてかかるのは愚の骨頂だと確信してゐるが、それにも拘らず、精神分析が意識と精神を同一視するのは信ぜられないといふやうな抗議を受けざるを得ないのである。精神分析からの精神への定義は、精神とは感情思考及欲望といふ如き諸々の過程であると云ふに盡きてゐる。そしてそれはつまり、精神には無意識的思考と意識せられざる欲望が存在してゐると主張することになるのである。だがこの信條が祟つて、初めつから精神分析は生眞面目な科學の同情者等一切の好意を失つて、闇に築き濁流に魚釣るあの荒唐無稽な秘密敎の類との嫌疑を蒙つたのである。私がどういふ權利の下に「精神は意識である」といふやうな在來の、抽象的命題は偏見だと喝破しなくてはならなかつたかを諸君が理解して下さることは當分覺束ないが、存在しなくてならぬなら、私達のいふ無意識がこのやうに嚴存してゐるのに、それを否定するのはどういふ心理のためであるかと云ふこと、また無意識を否定すると彼等にどのやうな都合のいゝことが生じ得るのかと云ふやうなことは諸君には思ひも寄らぬことである。精神と意識は何んでもこれを同一として見てゐるとか、精神は意識と正に合致すべき筈だとかいふ文句は、結局空虛な口論である。而も私は無意識なる精神過程を假定したことによつて、世界及び科學に新しい方向を打開したと云ふ事を諸君に十分な自信を以て斷言することが出來るのである。（續く）

彙報

フロイド賞贈與式

本誌前號所報の如く、昭和十二年度フロイド賞は高橋鐵氏稿『象徴形成の無意識心理機制』に對して擬せられることゝなりその贈與式が、本研究所研究會一月例會（一月十七日夜）に際し新年會を兼ねて、例に依りアメリカンベーカリ階上にて催されることゝなつた。

フロイド賞詮衡委員三氏の寄贈に依る祝酒が適度に會合者一同に繞つた頃、大槻憲二氏立つて、フロイド賞詮衡の經緯を述べ、高橋氏の今度の論文に就いての批判を人々に依賴し、且つ高橋氏の自己分析の今後とも進捗せられむことを希望しつゝその挨拶を終り、次に賞狀、賞牌及び賞金は岩倉公から親しく高橋氏に手交せられ、その瞬間來會者一同は心からなる祝福の喝采を送つた。

續いて高橋鐵氏立つて、この度詮衡の選に當つたことを謝し今後の精進と自己分析とを約束せられ、謙譲に答禮の辭とせられた。

賞牌は靑銅製の見事なもので、表紙寫眞版で見られる如く、エディポスとスフィンクスとを現はした意味深きものである。作者は大内靑圃氏で昨年度の分と同じである。（表紙寫眞版參照）

精神分析學界懇話會

一月三十日夜、上野山下揚出しに於いて、精神分析學に同情ある諸方面の學者の會合を本研究所主催にて催して、親睦を計つた。席上、司會者として大槻憲二氏の述べられた挨拶はそのまゝその會の目的、雰圍氣などを表はしてゐるものゝ如く思はれたから、次に引用しておく。

「今夕は殘念ながら大變な雪降りになつて來ましたが、この寒さに拘らず、我等の趣旨を賛してかく多數に御集會下さいましたことを、深く感謝いたします。殊に丸井博士はこの會のために遙々仙臺から上京せられ、杉田博士も名古屋から上京せられました。尤も、杉田博士は東京に御本宅があつて毎週末には上京せられるのでその機を利用して御出席願つたわけでありますが……。杉田博士にはこれまで度々お目にかゝりましたが、丸井博士には今夕始めてお目にかゝりました。丸井さんは私とは同じ中學（神戸一中）の先輩でありますが、つい最近、木村廉吉さんからその事を示唆されるまで氣がつかなかつたのです。私が中學に入つた時分には丸井さんはもう卒業してゐられたからです。とにかく同じ中學から二人の分析者を出したことは面白い事のやうな氣がいたします。

精神分析學も永年の世間の抵抗を克服して今日ではやうやく學界一般にもその重要性と意義とを承認せられるやうになつたわけであります。で、この機會に一つ分析學に同情ある諸方面の學者にお集りを願つて、何かな積極的な方策に出るなり、或

は少くとも親睦を圖りたいと云ふ考へで、こゝにゐられる古澤平作さんなどゝ相談してから云ふ會合となつたわけでありますが、私どもとしましては我等の研究所や機關誌のために種々な御援助を願ひたいと思ふことも數々ありますが、それに止らず只今のやうな社會狀勢や思想の病理性を見ましては、これに對して精神病學者や精神分析學徒が何らの對策を講じないと云ふことは、學徒として甚だ意久地のないことであるばかりでなく、曠職の譏りをも免れないわけではないかと云ふやうな感じも致します。

併し只今のやうな御時勢に對して下手な手出しをすることは甚だ危險でありまして、現に私が雜誌『自由』の新年號に執筆しました『戰場心理の分析』と題する論文は當局の忌諱に觸れまして、同誌同號發禁の一因をなしたらしく「新聞日報」と云ふ新聞界の新聞紙上に報道せられてありました。而もそれが擬裝共產主義と云ふ名目の下に片付けられてゐるのですから私は驚きました。私は昔からマルクシズムには嚴格な批判的立場をとり、それが全盛時代から敢然一人それに反撃の矛を向けることを辭さなかつたものでありますが、右のやうな解釋を下されたことは近頃甚だ迷惑な次第であります。尤も、當局者としましては目下とにかく支那事變と云ふ厄介千萬な難局を何とか片付けなければならぬと云ふ大きな責任を帶びてゐますので、そのために凡そ自分の立場に反對するらしく思はれるやうなものは何もかも一緒くたにして共產主義の名で追ひ遣ると云ふお手輕な方法をとらなければ、あんまりデリケートに色々神經を使つてゐては彼等役人の方のエネルギーが破產しますから、これは尤な次第でもありますが、併し我等の立場はあくまでも一切の傾向主義を離れた科學的な研究や觀察にあるのでありますから、あまり本當の事を云つたからとて、これを反戰主義と同一視すると云ふのは無茶であります。併しこんな不平は學者に向つては云ふことが出來ても政治家に向つて云ふことは出來ないので、こんな時には實際上非國民的であつても默つて見てゐるより外はないのでせう。心の底では、如何に心配なことがあつても、その心配は匿しておいてたゞ萬歲萬歲と有頂天になつてゐればいゝのでせうか。

併しそんなことも我々學徒としては良心が許しません。社會の病理性を救治すると云ふのは杉田博士等の平常の御主張のやうですから、我等として何とか採るべき手段もあらば御示唆を願ひたいと存じます。併し平生私の云ひますやうに官立學校に職を奉じてゐられる方々は滅多にさう云ふ事には手出しをなさらぬ方が安全でありまして、たゞ純粹の病人だけを相手にしてゐられる方がよいと思ひますが、社會的な働きかけと云ふやうな方面に就いて何かの御考へをお洩らし下さらば我々は有難いと存じますし、またこの會合の意義を一層大ならしめる所以であらうと存じます。」

この問題に就いては別に方針はまとまらなかつた。もしこれについて何か具體的な態度が確立したら新聞紙上に報道したいと云ふので朝日新聞社會部の記者が態々會場へつめかけて來てゐたのであつたが……。

各出席者の自己紹介的卓上演說があつたのだが、紙面の餘白なきため、こゝには割愛する。出席者は右言及の杉田、丸井、古澤、木村、大槻、五氏の外に駒澤大教授富田義介氏、醫學博士諸岡存氏、同鈴木雄平氏、小峰病院勤務醫學士小峰茂三郎氏東大精神科教室懸田克躬氏、その他は本誌上で常々お馴染の小山良修博士、岩倉具榮公、宮田齊氏、長崎文治氏、高橋鐵氏、北山隆氏、大槻岐美氏等であつた。高島平三郎、長谷川誠也、式場隆三郎、林髞、金子準二の諸氏も出席の筈であつたが、殆ど何れも流行の風邪氣のために突如缺席せられたのは遺憾であつた。（口繪寫眞參照）。

研究所便り

▲大阪府の在外研究會員狩野三郎氏から、鉛筆澤山に寄贈されました。

▲京都府の在外研究會員奧本島田氏より雜誌維持費として金若干寄附を受けました。

▲研究會員平塚義角氏より『ドストイエフスキーの精神分析』賣上金中若干の寄附を受けました。何れも厚く御禮申上げます。

▲此の欄を借りて申上げます。大槻著『精神分析雜稿』を古本でもいゝから見付けてほしいとのお便りが諸方からございますので、當方も手をつくして探してゐますがなかなか見當りません。そのうち入手致しましたら御申込順にお知らせ致しますからそれまでお待ち下さい。尙、同書の再版は種々な都合から見込みがなくなりました。この事をお斷りしてお詫び申上げます。

▲二月十一日、藤田由美氏が來訪されました。氏は大分以前本誌の直接講讀者でゐれましたが、今度又新しく研究會員となれました。報告申します。

▲宮田齊氏の令弟が御死去されました、御傷心の程深くお察し致します。こんな譯で、今月號は同氏譯『教育者の爲の精神分析概論』は休載となりました、何卒御了承下さい。次號には必ず執筆のことを約されました。こゝに哀悼の意を表すと同時に讀者諸氏に御詫びいたします。

▲古澤平作氏は診療所增築成つて、廣告面の如く移轉せられました。

▲延島英一氏は『ナポレオンの精神分析』を近く春陽堂書店から單行本として公にせられる由。

▲大槻憲二氏は近く岡倉書房から『傳說研究と人間心理分析』を上梓せしめられる由。

最近國內關係事實

▲『戰時神經症』椰野嚴稿――『診斷と治療』一月號。

▲『常習便祕と分析』古澤平作稿――『診斷と治療』二月號。

▲『心理學と神話の出會』トマス・マン――『文學界』新年號。

▲『流言蜚語及び宣傳の心理分析』大槻憲二放送――中央放送局、十二月三日。

▲『ロベール及び女の學校の分析』北山隆稿――『科學ペン』新年號。
▲「アンドレ・ヂイド贋金作りの分析鑑賞」大槻憲二稿――『科學ペン』新年號。
▲「夫婦生活の圓滿法」大槻憲二談――『主婦の友』新年號。
▲「自慰の處置法」大槻稿――「人生創造」新年號。

通信

語源と俳句

宮田戊子

拜啓貴誌先號御惠贈深謝いたします。貴稿象徴論中に拙論を御取上げ下され光榮であります。御稿によつて、産みと海が同じであることが分つたのは欣快に堪へません。この上島の語原などが明らかになると古事記などの島生みの傳說もはつきりすると思ふのですが、――古事記の島は今我々のいふ「子」を意味してゐるやうですが、英語で××のことをシーメンといふのと何か關係はないでせうか。

オキは記紀祝詞なども奥を訓んでオキと云つてゐます。しかし海の奥といふのは一寸をかしいですが、御說の通り海が女性々器を象徴してゐるとすれは、奥と云つても差支へないやうです。

「わたつみ」といふ古語が明らかにされました。「わた」が英語のウォーターであらうとはかねて考へてゐたところですが、「つみ」「つび」は女性々器のことで、矢張海と女陰とが一緒になつてゐると思はれます。（言海には「つび」は女性の陰門を指してをり、同時に貝の名でもあるといふやうに記されてあります。）

尤も「つみ」の「つ」は沖つ方とか邊つ海とかいふ接續語のと混同され易いですが、これは嚴然區別すべきもので、或はわたつみは海の隈などを指したものかとも考へられます。大山つみといふのも山の陰所でせうと思はれます。とにかくこの一聯の語意が明らかにされたのは愉快でした。こゝに改めてお禮申上げます。

次に精神分析の方で一茶の研究などされると面白いと思ひますがどうでせう。一茶が分析を必要とすべき性格の持主であることは既に故山口剛氏が云つてゐます。さき頃（昨年五・六月號）に、芭蕉一茶比較考といふのがありましたが、もつと鋭く突込んで分析する必要があると思ひますが、――尤も俳句といふ特殊な世界での研究で相當困難が伴ふと思はれるのですが、俳人の側から材料を提供して分析するとか方法はいろ／＼ありませう。とにかく大方の一茶研究書が一茶の一面をしか剔出してゐないのに私達は慊らなく思つてをりますあまり、分析家の御奮起を願ひたく存じてをります。

なほいづれ申述べたく存じてをります。失禮おゆるし下さい。（大槻氏宛）

フロイド精神分析學全集

第六巻

分析藝術論

大槻憲二譯

口繪挿圖など十三葉。四六版美本。定價一圓九十錢・送料十二錢

機智とその無意識に對する關係と（第一章概論、第二章夢並びに無意識に對する機智の關係、第三章機智と滑稽）——精神分析美學論として最初のもの。美學の諸學者を痛烈に批判す。

フモール——右の論文の補說の如きもの。ユーモアを心理經濟的見地よりも心理力學的見地から考察す。

詩人と空想——文學の心理的本質を闡明す。

レオナルドの幼兒期記憶——有名なモナ・リーザ創作の心理を契機としてダヰンチの同性愛を剔抉す。

原始語の相反意義——何故にエヂプト語に於いては强と弱とは同語を用ゐたか。最初の言語分析論。

匣選みの動機——リヤ王とベニスの商人とを比較分析して死の本能論に及ぶ。三人の女と一人の男との問題。

ミケルアンヂエロのモーゼ——藝術創作心理研究の好見本。

ゲーテの幼兒期の記憶——幼兒ゲーテが瀬戶物割りの惡戯心理分析

氣味惡さ——去勢恐怖の文學的表現の研究。ホフマン分析。

ドストイエフスキーと父殺し——ド氏が自瀆癖賭博癖の分析研究。

春陽堂發行・東京精神分析學研究所取次

振替東京七八八一七番　本郷區動坂町三二七

（附　錄）

Die Geschlechtskälte der Frau

Ihr Wesen und ihre Behandlung

von

Dr. Eduard Hitschmann und Dr. Emund Bergler

冷感症とその治療

ヒッチマン博士・ベルグラー博士・共著

高水力太郎譯

（五）

―目次―

譯者曰――我等はヒッチマン及びベルグラー兩氏共著『冷感症』研究をこれまで本誌上に數回に亘り一節づゝ譯出して來たが（前頁參照）、今後はこの附錄に於いて連續的に譯載することにした。此の論文は非常に重要であり、興味もあり、且つ世人を益するところ極めて多きものではあるが、それだけに我等は或る種の冒險を敢てしなければならないものである。讀者、希くは、編輯部員の科學的誠意と犧牲的精神とを汲んで、十分の支持と愛讀とを賜らむことを……。

第二節　冷感症に特殊なる諸形式

冷感症の最も屡々見られる形式はヒステリー型であるが、これはエディポス・コムプレクス並びに去勢コムプレクスの未解消の殘滓と聯合してゐる。正常の婦人に於いては、エディポス・コムプレクスは崩壞して他人の男（卽ち父親と同一人ならざる男）へとリビドーは轉向し行く。もしこのやうな崩壞が首尾よくなされざる場合には、婦人がその關係を結ぶべき一切の第二の男は父親と同一化せられる。かゝる事情は全然無意識的である。何となれば父親への本當の愛情が抑壓せられてあるからである。それと同樣に、エディポス型（近親愛的）願望に對する無意識的良心（超自我）の反應も亦、無意識である。さうしてこの反應は自己懲罰慾求となつて現はれる。その結果生ずべき神經症的症候は、無意識的本能力の貯藏庫たるエスと超自我との間の妥協として出來たものである。無意識的なエディポス願望は超自我の命令に基く懲罰といふ賠償を支拂ふことに依つて保持せられる。その賠償が卽ち冷感症である。ヒステリー婦人が例外なく冷感症であつて、エディポス的願望それ自身とヒステリー的症候と云ふ手段に依る懲罰願望との間に平均を保つてゐるのは、右のやうな工合に依つてゞある。卽ち、宛もエスはその要求を放棄することは拒み、超自我もその懲罰慾の放棄を肯んぜざるが如くである。で、もしこの妥協を分析的處置に依つて打破しようと試みると患者はその試みに對して猛然たる無意識反逆を示して來る。これを抵抗と呼ぶ。そこでヒステリーの病苦は不可解だと云ふ嘆きが生ずる。宛も患者たちの病氣の訴へが噓であるかのやうに見られる。彼女等は總てを告白しないからである。何となれば、ヒステリー症候に於ける無意識の快感的利得は患者たちの意識に全然上つて來ないからである。分析治療に際しての患者等の防禦（抵抗）の具合を見れば、この快感的利得の如何に大きいかゞ分る。

そこで吾人は、ヒステリー的不良感受の群の内に於いて、次の四種を區別することが出來る。——

一、エディポス定着型

二、エディポス定着型に去勢願望型の附加せるもの。

三、エディポス定着型に去勢復讐型の附加せるもの。

四、ワギナに於ける不隨意的筋肉緊縮の苦痛あるもの。

以上四型は必ずしも截然區別せらるゝものではなくて、さまざまな形で相互に入混つてゐるものである。卽ち各々の境界は判然してゐない。以上の四項及び第廿八頁所掲の各項に就いて以下に說明を加へるであらう。

第一、エディポス定着型

幼兒期に於いて父親に對して無意識的に寄せられたる性愛は抑壓せられるが、併し父親に關係のある無意識的空想の中にそれはなほ低徊してゐる。その低徊せる性愛に對して本人の超自我は嚴重なる禁制を以て、それぞれの罪障感的傾向を以て、反應する。そこで生じ得べき歸結の一つは、本人が所謂老孃となつて一切の性的享受の機會を拒け、後年になつてから――「殘念ながら」――旣にその機會の遲くなり過ぎてゐることを示すやうになるのである。かゝる婦人がその父親のために家政をとつてやつたり、共通興味あるために世話をしてやつたりして、永くその側邊に待してゐるのを見ると、他人からは如何にも犧性的な、自己沒却的な運命のやうな印象を與へられるが、併し本人にはそれは不幸な運命ではないのだ。

父親に對する關係は必ずしも愛情一點張りではない。それは非常に愛憎並存的である。この型の文藝上の實例としては、ゲルハルト・ハウプトマンの『日暮前』のベティナを擧げることが出來る。ベティナはその老父を偶像的に愛敬してゐるのだが、併し彼がその最初の妻（卽ちベティナの母）の死に會し、後妻を迎へようとの意志を示した時には、ベティナは熱愛する父親に對して禁治產的な方法をとるのである。

かゝる婦人が結婚生活に這入つた時、又はその他何らかの方法で性的關係に入るべく强要せられるに至つた時に、その悲劇は始まる。卽ち、典型的な冷感症と共にあらゆる神經症的傾向がそこに生じ來ることは必然の歸結である。婦人の戀愛對象が一般に父親の型に從つて選擇せられるとするならば、右の如き特殊な場合に於いては殊にさうなるのは當然である。最も屢々見られるのは「橫暴な男」に對する無意識的定着であつて、そのやうな男に依つての被虐

冷感症的婦人達の夢の中に於いても我々はこれを發見するのである。

的な待遇を甘受するのである。で、最深部に於いては暴力的に支配せられることが婦人の原始願望であつて、それはかう云ふ型に對しては分析の効果は望みがある。

第二、 エディポス定着型に去勢願望型の附加せるもの。――

これはつまり、自分が女であつて男ではないと云ふ事實に就いて、無意識的に惱んでゐる婦人たちのことである。* 幼兒時代から根差してゐる、男子でありたいとの深い願望の本質的內容は、自分もペニスを持ちたいと云ふことである。かゝる空想は抑壓せられて、意識せられてゐるのはたゞ理窟付けのみである。例へば、婦人は性的にも、經濟的にも、社會的にも行動の自由が少ししか與へられてゐないと云ふが如き不平となつて理窟づけられる。旣に論じて來たやうに、少女達も亦、彼女等が元來ペニスを持つてゐたのだが、それが奪ひ去られたとか、切取られたとか、消滅せしめられたのだとか云ふ風に考へてゐる。この去勢に對して責任ありとせられるのは、例外なく母親であつて、この問責感情がエディポス前期に於ける對母親關係並びにそれの葛藤的な解消と密接なる聯關あることは明かである。このハンディキャップが少女達に依つて素直に承認せられると云ふことはなかなかあり得ない。彼女等は何とかその埋合せをしようとして種々の試みを形作る。卽ち、ペニス様のもの（クリトリスがそれとして見られる）がやがて生長してそれになるであらうとか、肛門的空想に依つて自然に生じた糞便塊を以てペニスに擬したり、或は父親が子供にペニスを與へるであらうとか、云ふ風に……。約言すれば、總てこれ等の空想（生育、自然發生、贈與など）は段々分裂して行つて、ペニス缺如のため他のハンディキャップ（例へば尿道性感、窃視慾及び露出慾の禁制、自慰願望の抑壓など）がそこに附隨すると、ペニスのないことの苦痛が愈々堪え難くなつて來る。（ホルニイ女使の研究に依る。）

註 ＊細部の表現に就いてはカール・アブラハムの古典的研究『女性の去勢コムプレクスの顯現形式』（『國際精神分析學雜誌』第七卷、一九二〇年）に依る。

男兒はその排泄物に對して自己愛的な買被り感を持つものであることは誰しもよく知るところである。例へば、彼

等は常に小便ごつこなどをして得意になつてゐる。この買被り感、並びにそれに聯關ある幼兒的全能感は、女兒に於いては見られない。それのみならず、男兒は排尿に際して自分の性器を見せることがある。さうして自分でもそれを眺め、公然とそれを眺めてゐる。云はゞ彼等は排尿の度毎に自然にその性的好奇心を、それが自分自身の肉體に關係してゐる限り、滿すことが出來る。それから最後に云つておかねばならないことは、男兒等は排尿に際してその性器を把握することが出來ると云ふ事情が、女兒等にはその自慰の許容せられてある如くに觀ぜられると云ふことである。立小便をすると云ふことがさう云ふ女兒等の願望であつて、その願望は試みられることもあるし、また夢に出ることもある。

女子の去勢コムプレクスは正常に發展して行けばどうなるかと云ふにそれは女性的・受働的（部分的には被虐性的（マゾヒスチック））な性役割を甘受することになる。その役割はペニス＝子供の迂回路を辿つて達せられるのである。本源的にはこの子供への願望は父親に向けられるが、たゞ後に至つてこの願望は父を離れて夫に向けられることになるのである。

去勢コムプレクスから發展し來る、神經症的副產物は、アブラハム說に依れば、二群に分つことが出來る。卽ち、願望型と復讐型とである。前者は無意識的なペニス願望を示し、後者は女の役割の無意識拒否となり「愛する」男に對する復讐衝動が一層顯著となる。これ等二群の間の截然たる區別は存在し得ない。

女性の去勢を拂拭せんとの最も徹底した願望充足は、彼女等がその女性たることをその正反對に轉換せんとする症候行爲となつて現れる。この種類の最も見事な實例は、ファン・オフィイゼン（Van Ophuijsen）の報告してゐる或る婦人患者の場合である。彼女は若い頃に夕方になるとラムプと壁との中間に立ち、その指頭を下身邊に擬して、壁面に寫る自分の影に於いてペニスの形を作つて見るのを習慣としてゐた。

これと同じ群に屬するものに「男性的」婦人等の或る態度がある。卽ち、彼女等は服裝や頭髮の刈り方や、步き振りや態度や、知的な興味や職業に於いて男子の眞似をするのである。この態度は併し、無意識的である。かう云ふ種類の婦人は意識的には大抵、男女の別は無意味であると云つてゐる。

著者の一人が嘗て分析したことのある、この種の或る婦人患者は、その兄弟が支那服を纏ひ辮髪を垂れてゐるところを夢の中に見た。この夢は男子同胞を引下げる（ボインの習俗に於いては、支那人であると云ふことは輕蔑を意味してゐる）ものであると共に、窃視欲を滿たしてゐるものでもあるが、なほその上に次の事を意味してゐる。男のくせに婦人服を着たり辮髪を垂らしたりしてゐるくらゐだから、女だとて婦人服を着てゐても男になり得ないわけはなからう、と。

今一人の婦人患者は衣裳會の時にカウボイの服を着、長い鞭を持つて出た。別の婦人患者は小さい散歩杖を持つて行くことを好み、かうもり傘は「如何にも」女らしいとてこれを輕蔑した。

こゝにも一つ擧げておいてもよいと思はれるのは、數年前に屢々見られた或る神經症的な婦人等の斷髪恐怖である。二人の婦人患者は少くとも二十回は理髪師の前に座して見たが、いざ鋏が髪に翳されると又しても恐怖のあまり飛上るのである。これは頭髪＝ペニスの典型的象徴的意義を無意識裡に發見したゝめである。これは審美的見地から頭髪の美に未練があるためだと理窟付けられてはゐたが、實は去勢不安の防禦である。

大抵の女の冷感症はコイトスの間に於いて彼女等が自己を男に同一化し、ペニスが今や自分等に屬してゐると空想するところに由來してゐる。彼女等は、云はゞ行爲を男の立場に於いてなし、宛もさう云ふ場合に男が口にするやうな激勵の言葉を口づさんだりする。ペニスの Erschlaffen は二重の意味に於ける去勢として考へられる。即ち一方、自分のペニスが去勢せられたとして考へると共に、他方相手のそれを去勢したと考へる。女は自分の男性たることの空想が妨げられない限り亢奮する。女は、云はゞ自分が只今保有してゐるペニスが失はれることになる時に、亢奮を失ふか、或はワギナに於ける亢奮を拒否するのである。「行くところまで行かない」と云ふ感じが屢々起きて、それがためにコイトスに障害を生ぜしめるのであるが、これはペニスを保有してゐることが出來ないと云ふ無意識的不安から生ずるのである。（ライヒ説。*）なほ、ライヒに依つて擧げられてゐる、女の性的不能の今一つの契機は、オルガスムスへの不安であつて、これは最深部に於いては去勢コムプレクスと關聯してゐるのである。——

註　*『オルガスムスの機能』（Reich: Die Funktion des Orgasmus, Intern. psychoa'yt Verlag, 1927.）

編輯後記

文藝や繪畫を輕蔑してかゝるのが科學研究家の氣取りであると共に、藝術家の方では科學は淺薄だと云つて頭から取合はず、結局自分自身が淺薄になつてゐるのが、日本學藝界の宿命のやうです。だから、日本は文化的にいつまでも低劣で支那人にも馬鹿にされ、今度の戰爭の遠因の一をなしてゐないとは云へません。或る實驗心理學者が文藝など研究して何になるかと放言してゐるのを聞いたことがありますが、これは文藝と云ふ廣汎な心理現象に對して手も足も出ない彼等の負惜みと我等には聞こえました。本號卷頭言を味つて下さい

×

本號には長論文が多くて編輯がやりにくかつたのでいつもより顔ぶれが少いやうですが、內容はがつちりしたものばかりです。北山氏の漱石論は七十枚の長篇で、これを一度に掲げたのは本誌未曾有のことです。一つには筆者の努力への敬意であり、讀者への便宜のためです。

倉橋氏の創作戲曲は四十枚、斯學應用の正統作品として、創刊號掲載大槻氏作『養父』以來のものです。柿もステッキも人形も縄飛びの如き細部は勿論、作中人物の心理の動きの隅々まで分析を意識したもので、別に解説は致しませんが、讀者にはよくお分りでせう。論と作との並行、また學界の一盛觀でせう。

×

彙報欄がいつもと樣子が違つてゐますが、これは一つには長篇が多すぎたゝめでもありますが、また一つには今後、八頁位のパンフレットを隔月に發行し、卽ち形式上月刊制にして、舊來の第三種刊行物として資格を恢復しようとする計畫のためでもあります。パンフレットは號數だけは中間を拾つて、第一次發行の分は第六卷第三號となり、この次發行の本誌(五・六月號)は第六卷第四號となりますから、そのおつもりで居て下さい。

パンフレットには時評、感想、彙報、通信などを掲げます。特別誌友にのみ無代配布して一般店頭には出しません。合本には加へます。

×

最近の特別誌友(在外研究會員)は左の十五氏であります。なかなか盛況であります。御加盟を謝します。

▼(佐世保市)松尾乙三氏▼(淀町區)瓶子

編輯後記

喜已氏▼（江戸川區）長田耕一氏 ▼（大阪市）澤村良幸氏▼（兵庫縣）五十嵐榮一氏▼（大阪市）多葉田伊之助氏▼（秋田縣）井田實氏▼（小石川區）游高石氏▼（品川區）鈴木喜美子氏▼（四日市市）中村壽平氏▼（四ッ谷區）柳田豐治氏▼（淀橋區）ミクルベ・セイゾウ氏▼（名古屋市）服部正一郎氏▼（本郷區）藤田由美氏▼（兵庫縣）奥田朝治氏。

×

大槻氏著『社會生活法』（人生創造社版）は二月中に第三版が出來ました。品切のために御不便をかけまして濟みませんでした。始めて分析を學ばうと云ふ方々は是非本書から始めて下さい。非常に入易いでせう。新定價送料共一圓二十錢。

×

「戀愛性慾の心理とその分析處置法」も再版後益々需用が高まりつゝあります。この出版界不況の折柄、有難い次第であります。

★

次號の特輯は『**處女性と貞操**』となりました。これに就いて特に我等の誇りたいのは、ヸインの新進學徒ベルグラー氏の特別寄稿のあることです。ベルグラー氏は毎號本誌上で御覽の通り冷感症について非常にいゝ智識を我等に提供してくれてゐます。なかなか頭のいゝ人と思ひます。今度の特別寄稿は本誌編輯主任の依頼に應じてわざわざ書下したもので、大槻氏自ら飜譯の筆をとられます。內容は御期待下さい。

その他「若い人に現れたる處女性タブーの問題」や「現下婦人界の貞操觀念」その他興味ある論文も載る筈になつてゐます。

「ナポレオン」は次號で終りますし、「シエイクスピア」の二篇は續きますし、その他種々の新稿が現れる豫定です。愈々御愛讀を切望いたします。

★

◀和十三年二月二十五日印刷
▼和十三年二月 一 日發行

（月刊）**定價五十錢**
（外地定價）五十五錢

編輯及發行　東京市本郷區駒込動坂町三二七　大槻憲二
印刷所　東京市小石川區戸崎町十三　多木印刷所

定價一部　五拾錢
半年分　一圓五十錢（送料共）
一年分　三圓（送料共）

御注文規定

・本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、**振替口座東京七八八一七番**へ御拂込み下さい。
・郵券代用の場合は一割增に願ひます。
・本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

發行所　東京市本郷區駒込動坂町三二七　**東京精神分析學研究所**　振替口座番號七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂・大東館　北隆館・（大阪）福音社

研究所事業案内

一、分　析　部

・神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄症想、その他）

・性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

・客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし

二、通信分析部

・分析法は毎日、患者が分析者の許に通ひて、處置を受けるが正當なれど、遠隔の地に居られたり、その他、經濟上、健康上、それの出來にくい人々のために、この部を設く。

・希望者は、その姓名、年齡、病歴、手記、感想、夢の記述などに、料金（十圓）を添へて當研究所にお送り下され度。分析診斷明細書を相當期日の後に送る。手記その他は絶對に他に洩らすことはなし。文字は明瞭に書かれたし。

・擔當者は研究所に御一任ありたし。それ〴〵適當の人々にふり向ける。

三、敎　育　部

・當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。

・所員並に客員に對して他より依賴の講演又は講習會。

四、出　版　部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

五、研　究　會

・研究の發表とその討議を目的とす。毎月一回、第三月曜夕、　　にて開催その都度通知、

出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。（但し誌代を申受く。雜誌購讀は會員の義務とす。）

・雜誌のみに依りて研究の發表又は諸般の事業に參與せんと欲する向は特別誌友（直接購讀者）となるべし。

六、講　習　會

毎月一回、第一月曜夜、於研究所開催。當分主としてフロイド著書の精讀。會費二十錢。

特別誌友規約

一、本研究所在外研究會員を特別誌友と稱す。

一、特別誌友は本誌の豫約購讀者として半年分（一圓五十錢）又は一年分（三圓）前納の義務を有す。

一、特別誌友はその研究、感想、報告を、編輯部の了解を得て本誌上に發表することを得。

一、特別誌友は司會者の承諾を得て研究會、講習會に出席することを得。

一、希望者は購讀料金と共に、なるべく左記體裁の申込書を送られたし。（御迷惑の箇所には記入を要せず。）

特別誌友申込書

住所

姓名

年齡

職業

經歷

感想

合本
單册
『精神分析』（特輯題目及び定價）一覽表

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七・振替東京七八八一七番

第一卷・上

第二號（同　六月）「フロイド喜壽祝祭劇記念號」
創刊號（昭和八年五月）「エディポス研究號」＊
第二號（同　六月）「フロイド喜壽祝祭劇記念號」
第三號（同　七月）「教育研究號」＊
第四號（同　八月）「夢の研究號」（第一）＊
（合本としては品切）

第一卷・下

第五號（同　九月）「兒童心理研究號（第一）」＊
第六號（同　十月）「社會思想・犯罪心理研究號」
第七號（同　十一月）「戰爭心理研究號」
第八號（同　十二月）「夢の研究號」（第二）
（合本としては品切）

第二卷・上

第一號（同九年一月）「心理療法研究號」
第二號（同　二月）「女性心理研究號」＊
第三號（同　三月）「傳說研究號」
第四號（同　四月）「文學研究號」
金二圓五十錢（送料共）

第二卷・下

第五號（同　五月）「ドストイフェスキー研究」
（六月休刊・以下隔月刊行）
第六號（同　七・八月）「戀愛心理研究號」
第七號（同　九・十月）「性慾心理研究號」＊
第八號（同　十一・十二月）「夫婦生活研究號」
金二圓五十錢（送料共）

第三卷

第一號（同十年一・二月）「兒童心理研究號」（第二）
第二號（同　三・四月）「宗教心理研究號」
第三號（同　五・六月）「自殺・情死心理研究號」
第四號（同　七・八月）「同性愛と異性愛」
第五號（同　九・十月）「家庭問題と親子關係」
第六號（同　十一・十二月）「常態及び變態の性心理」
金三圓（送料十五錢）

第四卷

第一號（同十一年一・二月）「性格改造研究號」
第二號（同　三・四月）「母性と妖婦研究號」
第三號（同　五・六月）「夢と幻覺研究號」
第四號（同　七・八月）「兒童分析と教育研究號」
第五號（同　九・十月）「愛慾葛藤の諸問題」
第六號（同　十一・十二月）「道德の分析」
金三圓（送料十五錢）

第五卷

第一號（同十二年一・二月）「思春期の研究」
第二號（同　三・四月）「不良少年少女の心理」
第三號（同　五・六月）「生理と心理」
第四號（同　七・八月）「男性と女性」
第五號（同　九・十月）「男女性格分析」
第六號（同　十一・十二月）「幼兒心理研究」
金三圓（送料十五錢）

＊印は單册としては品切、その他は在庫す。單册代價送料共各五十錢

精神分析讀本

大槻憲二著・定價 上製本二圓 普及版一圓 送料十錢

普及版出來

定價一圓・送料十錢

紙裝輕快本、口繪三面、凸版圖十餘面

著者の前著『雜稿』の姉妹篇として續刊しましたところ生死解脱の問題への言及多く、佛教傳統深きわが國人に示唆するところ多大であつたゝめか半年餘にして殆ど賣盡し、こゝに普及版を上梓しました。本書の漫畫分析は著者のいさゝか得意とせられるところださうであります。

社會と傳統――(一)橋畔女怪考(二)精神分析から見た宗教心理(三)輪廻と復活(四)肉彈三勇士分析(五)南畫と山水美心理(六)東西山水美心理比較

戀愛・嫉妬・結婚――(一)童貞と處女(二)右翼小兒病と老人小兒病(三)嫉妬の心理(四)新婚心理學

日本文藝分析評論――(一)文藝と心理學(二)三つの蓋(三)中村星湖『少年行』(四)十一谷義三郎『神風連』(五)上林曉『景色』(六)弘津千代『蛇性の淫』(七)川島順平『あたしのボクサー』(八)牧逸馬のキング・エング

西洋戲曲映畫鑑賞――(一)『ハムレット』(二)クレオパトラと毒蛇(三)チエホフ(四)ゴーゴリ『檢察官』(五)イブセン『野鴨』(六『青い花』と『青い鳥』と『青い光』(七)『自由を我等に』を讃ふ(八)『アトランティス』と浦島傳說。

美術鑑賞と漫畫分析――(一)龍子と深水と朗風(二)一平作『心づかひ』(三)『只野凡兒』(四)『嗜眠病豫防』(五)『女中殺し恐怖』(六)『パチンコ自殺』(七)『眼醫者の戀』(八)『風流』その他二篇

修養と人間智――(一)人心觀破法(二)科學的修養法(三)自惚と僻み(四)人類愛と個人愛(五)怒りの統制法

術語略解――分り易い說明付にて三十二項

岡倉書房發行・東京精神分析學研究所出版部取次

VI. Jahrgang, Heft 2. März — April. 1938. Erscheint zweimonatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse“

(Hefttitel: Literatur und Malerei)

INHALT

Preis des Einzelheftes, 50 sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag

327, Dozakacho, Hongoku Tokio Nippon

精神分析

第6巻第3號

昭和13年4月

—目次—

東洋醫學と精神分析

大槻憲二

物理的運動形態には遠心性と求心性との別があるやうに、人間のリビドー活動には轉嫁的傾向とナルチスス的傾向とがある。或はこれを外向性と內向性と換言してもよいかも知れない。我々のあらゆる種類の活動には望遠鏡的方法と顯微鏡的方法とが兼ね具へられてゐなければならない。この二法の併用のないところには重大な弊害が生じ來るであらう。リビドー活動にも轉嫁性とナルチスス性との自由自在な轉變がなくてはその人の心理機能は病的であると云ふべきである。精神分析學は一方豫防醫學として、精神衛生法として、望遠鏡的方法を用ゐると共に、他方、治療法として顯微鏡的な分析觀察法を適用することを怠らざるものである。

これに比すると、所謂西洋醫學又は所謂學校心理學なるものは殆ど純粋に顯微鏡的（それも大抵の場合、極めて大雜束な）方法をのみ適用してゐるものと云つて大過ないのではなからうか。私は所謂西洋醫學の治療法としての功績と意義とを否定しようとするものでは決してないが、併しその治療法は當然、多くの場合、顯微鏡的方法に終始し、望遠鏡的方法を比較的等閑に附してゐると云ふ批難を免れるわけには行かないやうに思はれる。現に西洋醫學者たちは對症的治療に熱心なほどには豫防的療法に冷淡ではなからうか。勿論、西洋醫學にも衛生法や豫防醫術や榮養學などもないとは云へない。併し我々日本人が常用する白米や白

砂糖などの弊害に就いての警告や、肉食重視の誤謬に就いての警告が西洋醫學者の間から出ずして、皇漢醫學者や食養運動家たちの口から發せられたと云ふことは、私の到底永く忘れることの出來ない大きな事實である。

私はさき頃來、中山忠直氏や櫻澤如一氏の說くところに敎へられて白米を廢して半搗米を常用し、肉類や白砂糖に可及的制限を加へることに依つて非常に身體の調子のよくなつたことを痛感する。近代の所謂文明人は營養の問題を考へる前にたゞ徒らに口唇の快適を求めようとし過ぎるやうである。白米は玄米より、白砂糖は黑砂糖よりも口唇の幼兒期的快感に阿ねるものではあらうが、併し半搗米はよしんば口あたりやゝ粗く、その匂ひに野性味多いとは云へ、その味ひに底力あり、コクがあつて、只口先のみでなく全身を以て味ふ時、これは遙かに美味なるものであることを斷言して憚からぬ。これを常用するやうになつて以來、家内中の者が身體の調子よろしく、殊に快便あり、女は顏があれなくなつたと云つてゐる。東洋醫學は單なる治療法ではなく、豫防法であり榮養法である點に於いて、卽ち望遠鏡と顯微鏡とを併用せんとするものがある點に於いて、文明史的意義にかけて精神分析學と一脈相通ずるものがあると云へるであらう。私は所謂西洋醫學者たちが、その偏見を——彼等は彼等自身の間の相互批評に依れば、甚だ偏見的、排他的であると云はれてゐる——恥ぢて、その缺陷に就いて率直に自省するところあらんことを希望したい。

内外彙報

『國際精神分析學雜誌』昨年度第二册

一、『有限分析と無限分析』ジグムンド・フロイド——フロイドの久しぶりの力のこもつた論文であつて、有限分析とは患者が受ける分析の事を云ひ、無限分析とは分析者の自己分析又は分析者が他の分析者に分析して貰ふことを云ふ。分析者の自己分析は一生の仕事であるが故に無限分析であるが、患者の分析は現實生活に支障なき程度に達すれば一通り終つたものと見るべきである。分析者の分析は深くなれば深くなるほど患者に對する分析の效果は迅速であると云ふのがフロイドの論旨の中心で、これはつまり分析療法の難點であるところの、時間が掛かりすぎると云ふ點に就いての諸方からの批評、又は從來の諸分析者の努力への寄與として書かれたものである。オットー・ランクの『出產外傷說』の如きも、云はゞ治療效果を速からしめようとの努力の一つの現れであつて、フロイドはこれを大戰後の歐洲の悲慘とアメリカの繁榮とからこれを社會分析してゐる。分析者も五年に一度は週期的に分析を受けるやうにした

方がいゝとフロイドは勸めてゐるが、無限分析の立場から尤な主張であらう。

一、『精神分析の將來』アーネスト・ジョーンズ――

一、『中樞神經系統に於ける主導性なき機能（心理學から生理學への一質問）』パウル・フェーデルン――條件反對と精神分析との問題。

一、『躁欝狀態發生の心理』メラニエ・クライン

一、『不安に襲はれる』テオドル・ライク――

一、『自己膠着及び均衡感の心理』パウル・シルダー。

一、新刊新論文の批評紹介等。――

『イマゴー』昨年度第四册

一、『モーゼもしエヂプト人ならば』ジグムント・フロイド――筆者は同じくこの誌の一九三七年度第一册に於いて『エヂプト人モーゼ』に就いて論じてゐることは既に本誌上に紹介しておいたが、今またその續編を見る。この問題の考究に彼がこのやうに熱心なのは、或はナチスドイツの主腦等が、連りに自分等の血のドイツ民族的純粹を主張する心理に對する社會分析的意味を寓するのではないかと察せられる節がある。モーゼは本來エヂプト人であつたが、それがユダヤ人を解放し、その法律を制定した。そこで「或る民族の必要に驅られてユダヤ人にして了つたのである」とフロイドは說き、數十頁に亙つて細論してゐる。

一、『取込み心理に就いて』フクス――同一化の過程は取込み又はその反對の投出によつてなされる。これ等三者の關係を研究して詳細を極めてゐる。

一、『遊戲に於ける玩具布置の外傷性』エリク・ホームブルゲル――（插圖多數）

一、新刊文獻紹介批評――

『精神分析教育誌』昨年度三・四合册

一、『フロイド精神分析學に基く短期心理療法的兒童取扱法』ピション及びパルシェミナイ（パリ）

一、『精神分析と教育』ゾフィ・モルゲンシテルン（パリ）

一、『兒童の夢及び空想の生活に就いて』ゾフィ・モルゲンシテルン。――（插圖多數）

一、『病的好奇心』シャール・オーディア（パリ）

一、『お乳でなだめることの弊害』リヒャード・カルペ（プラーグ）

一、『乳兒と母親』エンドレ・ペトー（ブダ・ペスト）――早期乳兒期に於ける對象關係に就いての觀察。

一、『幼稚園に於ける五歲の女兒ノラ（幼稚園に於ける分析的敎育操作の一例）』エミ・ミノール・ツァルバ（プラーグ）――

一、國際兒童精神病學總會（パリにて、一九三七年七月二十四日より八月一日に至る。）報告。――

『精神分析季刊誌』昨年第三册

一、『知力及び高級心理機能』ピシュラー（チェネバ）

一、『老年期欝憂症の精神分析』ラルフ・カウフマン（ボストン）

一、『或る青年の言動障害の精神分析に依る解消』マクス・レヴィ・ズウル（オランダ）

一、『月經心理學』ミカエル・バリント（ブダペスト）

一、『現實への逃避』バーナード・ロビンズ（ニウヨーク）

——患者が自然的に社會機能を回復して退院して行くことがあるが、而もまだよくなつてはゐない場合に就いての臨床的記錄。戰場に於ける敵前への退却の如き心理か。

一、新刊紹介及び批評十數件。

最近國內關係時事

一、『浦島になつた男』高橋鐵作——『新青年』四月號。

一、『流言蜚語及び宣傳の心理分析』大槻憲二稿——『日本評論』一月號。

一、『戰場心理の分析』大槻憲二稿——『自由』新年號。

一、『初夢の精神分析』大槻稿——『科學知識』新年號。

一、『フロイドと世界觀』大槻稿——『科學ペン』二月號。

一、『自慰の處置法』大槻稿——『人生創造』三月號。

一、『蔣介石の精神分析』大槻稿——『中央公論』二月號。

一、『精神分析から見た若い人』大槻稿——『日本讀書新聞』二月二十五日號。

一、『青年期に於ける人格破綻の問題』大槻稿——『生きて行く道』三月號。

本研究所研究會例會

昨年度十二月例會は二十日午後五時半から例により神田萬世橋驛前アメリカン・ベーカリ階上で催された。

當夕は「シュルレアリズムと文藝繪畫」を主題とする研究會であつたので、特にその方面の立役者たる福澤一郎、瀧口修造兩氏の出席を乞ひ、また狂人の藝術に特別の關心を持つてゐられる式場隆三郎氏も出席せられ、同氏は深川區門前町にある狂人の建てた不思議な家「二笑亭」の內外の寫眞數十葉を持參して一同に展覽せられ、非常に一同の興味をそゝつた。この二笑亭に關しては、式場氏はさき頃の『中央公論』誌上に精しく報告せられた。尤も、この家に就いては福澤一郎氏も早く『みづゑ』誌上に報告せられたことがあつた。

瀧口氏は司會者の乞に應じて「シュルレアリズムと精神分析」との關係に就いて談話せられたが、寧ろ話題は氏のシュルレアリズム的な夢の話に流れて行つた。それに就いて、式場氏は福澤氏の求めに應じて「パラノイア」に關聯させて論ぜられた。

また大槻憲二氏は本誌前號巻頭論文に推敲せられてゐる論を口述せられた。

小山良修氏は最近のシュルレアリズムが精神分析を脫してコムミュニズムに走らむとする傾向ありとの問題に就いて質問せられ、瀧口氏との間に二三の應酬があつた。

出席者は右言及數氏の他に、大久保眞太郎、田中虎男、大川賢司、石橋武助、木村廉吉、富田義介、土屋秋實、高橋鐵、塚

崎茂明、岡忠一、黒澤敬次、大槻岐美、倉橋久雄、横地康國の諸氏であつた。北山隆氏から缺席挨拶があつた。

×

昭和十三年一月例會はフロイド賞贈與式と新年會とを兼ねて十七日夜アメリカン・ベーカリ階上にて催された。賞牌贈與式に關しては、既に前號に報告しておいた通りであるからこゝに繰返すことを控へる。

食前に司會者から本誌一・二月號所載講座に就いて朗讀解說あり、食後、フロイド賞贈與式に於ける高橋氏の挨拶に續き、最近、成女學校長の榮職に就かれた宮田齊氏に對して新校長としての所感を要望する向きが多かつたので、同氏は立つて偶感を述べられ、分析學の今後の應用を聲明せられた。

次に富田義介氏、新年號本誌所載夢の研究に關聯して、夢に於けるエネルギー纒綿差の問題に就いて所見を述べられ、覺醒後の夢の解釋の如何に至難なるかを嘆ぜられた。小山良修氏は自作畫『針金』に就いての告白（本誌前號、不老泉院主氏說參照）をなされ、また氏の專攻たるホルモン問題に就いても論及せられた。大槻氏はパール・バック『大地』の批評を試みられ、深谷恭平氏は嘗ての自分のナイフ恐怖症に就いて告白せられた。

出席は右言及諸氏の他に、岩倉具榮、北山隆、立川玄一郎、倉橋久雄、吳無限、木村廉吉、田中虎男、土屋秋實、高橋鐵、長崎文治、秋山尙雄、大槻岐美の諸氏であつた。缺席挨拶を下さつたのは、霜田靜志、吉田靜枝、長谷川誠也、松井定之、黒澤敬次、北垣照雄、宮田齊の諸氏であつた。

×

二月例會は二十二日夜、同所に於いて催された。當夕の主題は「處女性の問題」であつたので、食前大槻氏は新聞紙上に見えた種々の材料を朗讀報告せられた。

食後まづ、新來者としての藤田由美氏の紹介が司會者からなされ、次いで大槻氏はヴィンの同學ベルグラーから本誌に寄稿して來た「處女性問題」の序論だけを原文を讀みつゝ飜譯紹介せられた。いづれ全文は本誌次號の卷頭に原文とも掲載せられる由。なほ大槻氏は續いて同じく處女性タブーの問題に關係ありとして石坂羊次郎氏作『若い人』の批評を朗讀しつゝ說明を加へられた。これは『日本讀書新聞』の二月二十五日號に掲げられたものであるが、何れ本誌次號にはもつと精細なるものとなつて現れる豫定になつてゐる。

次いで高橋鐵氏は處女性の問題に關係ありとて自作論文を朗讀して會員の批判を乞はれたが、淨瑠璃、おさん茂衞門その他は殊に人々に印象するところ深かつた。

次に、倉橋久雄氏作『柿實る』を大槻氏が第一場を、高橋氏が第二場を、各々擔當して朗讀せられ、ところ〴〵に作者の分析的意圖につき註釋解說を作者に代つて附加せられたので、聽者には非常に參考になつたが、作者はいさゝか照れて「穴あらば這入りたき」風情であつた。

出席者は右言及諸氏の他に大久保眞太郎、立川玄一郎、吳無限、大槻岐美、吉田靜枝、內藤梅子、田中虎男、土屋秋實、の

諸氏であつた。

なほ、宮田齊、富田義介、北垣照雄の諸氏から缺席挨拶があつた。

本研究所講習會例會

一月例會は新年會を兼ねて、本鄕區眞砂町通り江知勝牛肉店階上にて、三日夜五時半から催し、食前例月の通りフロイド『戀愛論』中「フェチシズム」の條を全部各員分擔精讀研究した。この論文に於いて精神症と神經症との區別の問題が主眼である。次いで酒宴に入つて、談論しつゝ歡談した。主題は豐富であつたが、忍術の心理の如きが花やかな話題となつた。後、延島氏と高橋氏との間に共產主義思想問題に就いて意見の交換があり、一同傍聽の觀を呈した。散會は九時半頃、出席者は北山、倉橋、高橋、土屋、吳、延島、大槻夫妻の八氏であつた。

×

二月例會は七日夜、研究所に於いて催した。

本夕はフロイド『戀愛論』中「ナルチスムス概論」の第一論文「知力喪失と自己戀愛」の條を精讀研究した。この論文はフロイドが本能論の第二段發展を示したるものとして重要なる意義を持つものである。

朗讀の後に、本夕小山良修氏が持參せられたる『針金』以前の試作二點を展列せられて一同の批評を乞はれたので一同遠慮のないとこを云ひ合つた。『針金』以前の試作二點については本誌前號アプフウブ欄を參照ありたい。續いて大槻岐美子氏は『中央演劇』誌二月號所載坪田讓治氏隨筆（夫婦生活に於いて女の立場の如何に都合よく男の立場の如何に悲慘なるかを取扱へるもの）を朗讀して男女の心理關係を論じて坪田氏の所見を男らしからずとせられたが、延島氏は得意の婦人解放論を持出してそれに對應せられた。併し兩氏の論旨は何れも尤な點があつたが、相互に別々の事を論じ合つてをるやうな印象を與へた。

通信

前號讀後感

久下貞夫

前號の口繪で精神分析學界諸權威のお寫眞を拜見し、何れもエネルギッシュな風貌の方々ばかりで誠に心强い感じがいたしました。時々から云ふお寫眞をお見せ下さい。

北山さんの漱石論は大層感心して拜見いたしました。實は私も漱石病患者の一人でありまして、この機會に漱石病を卒業したいと思つてをります。肉體の方の病氣は追々よろしい方に向つてをりますから御安心下さい。

分析の本を讀んで

松本綠

『精神分析讀本』（頁六五）―西行や蓮月の歌についての御說成程とおもひすぐに平忠度の「ゆきくれて木の下かげを宿とせば」の歌を思出しました。勿論あの歌も同種の願望をあらはして居るのでせうと存じます。いつか「讀賣」の宗教欄に、ある

憎侶の方が、忠度と蓮月とを、この歌の作者として、且つ淨土敎の信者として、對話させた一文を載せてゐられましたのも面白いことでした。

今一つ、芭蕉の『奧の細道』の旅立の時芭蕉と曾良に餞別として贈つた句「松島の松陰にふたり春死なむ」（俳諧五子稿）といふのがありましたが、作者は芭蕉と親友であつた山口素堂でありませう。この二人は表面芭蕉と同行者の曾良（門人）でせうが無意識的には芭蕉と自分とではないでせうか、素堂は芭蕉よりは先輩です。（芭蕉の方でも「川上と此川下や月の友」と素堂を想つて吟じた例があります）親しい間であつた樣です。（記者曰、芭蕉に同性愛傾向と投身願望のあつたことは確です。）

『精神分析概論』（頁八八）―源氏物語の有名な須磨の所が問題になつてゐますが「霜の後の夢を誦じ給ふ」といふ一句を誤解していらつしやる樣です。あそこは、源氏は琴を彈くうちに絃樂器をもてあそぶ悲劇の主人公として王昭君を聯想して（昔胡の國に遣しけむ女を思ひやつて）大江朝綱の王昭君の詩の一句「胡角一聲霜後夢」を吟じたといふ意です、當時の貴人が折にふれた古詩の一句を吟じて機智を誇つたり、座興としたりする例は源氏物語杜草子その他に澤山散見します。（記者曰、材料の出典と文句の心理的內容とは別問題でせう。）

源氏物語の作者の意圖なり、源氏一部の本意なりについては中世以降續々と解釋が下されてゐますが、明治以後には古い佛敎的儒敎的な敎化的目的論を破壞して物のあはれ說を立てた宣長以に出たものも無ささうですが、此說は誠に作者の意圖を正しく指摘されたものと敬服致して居ります、確かに作者は一人の人間の魂の向上の道筋を描かうとした樣であり、最後に源氏は道心を得て魂の救濟を感じて死んだらしく暗示されてゐます。

編輯後記

こゝに第六卷第三號として、この冊子（パンフレット）『精神分析』を始めて讀者諸賢の間に送る。今後これを「偶數月發行冊子精神分析」と呼ぶに對し、從前發行の雜誌を「奇數月發行正誌精神分析」と名付けることに致しますから、左樣御承知下さい。號數及び月次は兩者を通じて通算しますが、店頭には「正誌」の方だけしか出しません。「冊子」の方は特別誌友（在外會員）にのみ無代配布し、もし特別誌友以外の人々にて冊子を御希望の方々には一部につき金五錢、送料五厘（當分の內三錢）を申受けます。合本には冊子の方も加へます。

×

本號はこのやうに四角張つた編輯振りとなりましたが、次號にはも少し柔味を添へてアプフッブ的な要素をも加へたいと思つてをります。正誌同樣この冊子をも御愛讀願ひます。讀者諸氏からの御寄稿を期待します。

昭和十三年三月廿五日印刷
昭和十三年四月一日發行
（月刊）
定價 金五錢
東京市本郷區駒込動坂町三二七
編輯兼發行人 大槻憲二
千葉市長洲町二ノ七
印刷所 千葉印刷株式會社
東京市本郷區駒込動坂町三二七
發行所 東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番